325
459

始

THE GOSPEL STORY OF JESUS

By Rev. ICHIRO OI.

耶蘇基督

大井一郎著

日本基督教興文協會

Price 20 Sen.

325-489

帝國圖書館藏

大井一郎著

耶蘇基督

大正
5. 10. 30
内交

基督教興文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及頒布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッションの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる此書に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。

凡例

一本書は初めて基督教を聞く人に、耶蘇基督及びその教説の一斑を知らしむる爲に著はしたるものなり。

一本書の叙述は出來得る限り聖書の本文に據り、間々耶蘇の時代の背景を叙し、事件の聯絡を示す爲の説明を加へ、特に年月を明かにするに注意したり、故に此書は一面耶蘇傳の時代區劃とも稱すべく、尚ほ卷末に年譜を添へ、耶蘇の生涯を一目の下に置かしめたり。

一本書の參考書の主なる者左の如し。

The Days of His Flesh (D. Smith)

The Life and Times of Jesus the Messiah (A. Edersheim)

Epochs in the Life of Jesus (A. T. Robertson)

The Life and Words of Christ (Geikie)

The Training of the Twelve (Bruce)

Peloubet's Notes on the S.S.Lessons for 1912 and 1914

The Century Bible.

基督と人生　（柏井園氏）

耶蘇傳　（左近氏改譯）

基督傳　（山田寅之助氏）

聖地バレスチナ　（小西増太郎氏）

一此書多事草卒の間に成る、誤謬の見多からん。大方の叱正を得ば幸甚。

大正五年五月　市ヶ谷谷町の僑居に於て

著者識

耶蘇基督

目次

		頁
緒言	………	一
第一章	聖誕より洗禮のヨハネまで ……	三
第二章	耶蘇の受洗よりベラスダの池まで……	七
第三章	ガリラヤ傳道 ……	二一
第四章	五千人を養ふより構廬節前まで ……	五九
第五章	構廬節中の説教……	七八
第六章	七十人傳道より修殿節まで……	八八
第七章	ペレア傳道……	九三
第八章	ラザロの甦生よりペレア傳道の終まで……	九七

目次

第九章　最後のエルザレム行……一〇九
第十章　受難週……一一六
第十一章　復活及昇天……一六二
第十二章　年譜……一七七

終

耶蘇基督

緒言

奈翁一世の傳を見るに、國を取りては兄弟に與へて王とせし者前後四國、當時の歐洲諸國中英國を除きて他は悉く彼の下風に立ち、國王親ら若くは宰相をして彼に伺候せしめ、殘れる英國すらも、彼が發布せる大陸條例によりて殆ど饑餓に瀕せしめ、歐洲一圓無人の野を行くが如かりし彼も、セント・ヘレナの島影に五十餘年の生涯を閉づる時耶蘇の偉大を稱揚して已まざりしと傳へらる。一日其の幕僚の一人に向ひ、基督と自己及び古英雄とを比較し『我は人生の如何なるものなるかを悟れりと思ふ。古への豪傑は人のみにてありき。其の中には基督の如きもの一人もあらざりき。基督は人以上なりき。歴山も、シヤレマンも、我も偉大なる帝國を建設せり。然れども我等の天才にて造れるものは、何に基くや、そは勢

力に基くのみ。然るに基督は獨り其の帝國を愛に基きて建設せり。而して今日幾千萬の民衆彼の爲めに身を献ぐるを喜ぶ』と云ひ、又或る時基督の神性と其の證據とを論じ『其の主權は絶對にして、其の目的は唯一つ、即ち個人の精神的完全にありき。個人の良心を清め、眞と合致せしめ、其の靈を救ふが目的にてありき。世界の人は歴山の多くの勝利に驚く。然れども茲に最善の爲めに多くの人を征服せるものあり。彼と合致し、一體となるものは、一國のみならず、全世界の人類なり』と云へりとぞ。

耶蘇の生涯は三十三年にて終り其中三十年は全く田舍の貧家に生長し、働き、殘る三年間のみ宗教家として働きたるも、足跡二十里の外に出でず、而も今日世界地圖を開きて、彼を信ずる者の住する處に著色すれば、殆ど世界を蔽はんとす也。奈翁の言宜なりと言はざるべからず。抑も彼の生涯と其教理とは如何なるものなるか、是れ讀者と共に學ばんと欲する所なり。

第一章　聖誕よりバプテスマのヨハネまで

今年大正五年を溯る一千九百二十年の昔、耶蘇基督ユダヤの國に生れぬ。此國は亞細亞、歐羅巴、阿弗利加三大陸の間に挾まり、其大いさ日本の信濃に越後を加へたらん程なりき。此國は四の部分に分たれぬ、第一ユダヤ（狹義の）、第二サマリヤ、第三ガリラヤ、第四ペレア是なりき。當時ユダヤはヘロデ大王と稱ぶ王を戴き、エルサレム（狹義のユダヤの一市）を都としたりしが、不幸にも羅馬帝國の屬國となり居たり。羅馬帝國は當時世界に存する殆ど全ての國を服屬せしめて、前後に比類なき世界統一を爲し居たりき。當時の皇帝の名はケーザル・アウグスツスなりき。

ユダヤの國都エルサレムより五六哩南にベツレヘムと稱ぶ小邑あり、古昔ユダヤの王として、英邁の資を以て經綸を爲し、ユダヤをして西は埃及より東はエフ

ラテ河に至る大領土を包有せしめ、四隣に雄視せし大王ありしが、其の名はダビデと言ひ、此ベツレヘム邑より出でたる人なり。而してユダヤ人を初め世界の人を其罪惡より救ひ出す救世主が、此ダビデの子孫より出でんとはユダヤ人一般に期待する處なりき。而して其出生の地も此ベツレヘムなるべしと豫言者に依りて唱へられき。

時は滿てり、西曆紀元前第五年の夏、羅馬皇帝の命によりユダヤ人の戸籍を調査したりしが、其法は各人をして皆一旦本籍地に歸らしめて、而して之を調査するなりき。茲にガリラヤのナザレ村に住める人にて大工を職とせるヨセフと言へる人ありしが、ダビデの子孫なりければマリアと稱べる其妻と共に戸籍調査の爲めに本籍地なるベツレヘム邑に赴きぬ。然るに彼の妻は曩に神の御靈を受けて受胎し、其時を以て月滿ちたれば、俄に產氣附きてベツレヘムの旅の宿に一男子を生みたり。是れ即ち耶蘇基督なりけり。

耶蘇基督の生誕前後にはいと不思議なる事共多くありて、人々皆此新生兒をユダヤの王、世の救主と言囃しける程に、此事忽ちユダヤ王ヘロデ大王の耳に入りぬ。大王は之を聞きて大に憂へ、是れ畢竟己及び己の家の王位を奪ふものなるべしとて耶蘇基督を求めて殺さんとしたりしが、其居處明かならざりければ、ベツレヘム地方に住める人の生める二歲以下の嬰兒を悉く殺さしめたり。然れど耶蘇基督の父母は神の告げによりて早く之を知りたれば、虐殺の起らざる先に埃及に逃れ行けり。時は大凡そ紀元前四年の二月なりき。埃及に逃れ居る事一二ヶ月の後、ヘロデ大王死にたれば、再びユダヤに歸らんとしたりしが、ヘロデ大王の子アケラオてふ者、父に繼ぎてユダヤ（狹義の）の地方を治め暴虐なりと聞きたれば、直ちに元住みしガリラヤのナザレ村に歸りて住みたり。

ヘロデ大王の死後、ユダヤの國は二分され、ユダヤ及びサマリヤはアケラオ之を治め、ガリラヤ及びペレヤはヘロデ大王の子のアンチパス之を治めたり。アン

チバスは後にヘロデの名を以て稱せらるるに至れり。然るにアケラオは幾多の罪惡を犯したる爲に、紀元六年ゴールの地に追放せらるゝに至り、其後同地は羅馬より遣はされたる總督の治むる處とはなりぬ。其第六番目の總督はポンテオ・ピラトと稱しき。

ポンテオ・ピラトのユダヤ總督となりしは紀元第二十五年なりしが、此年の夏より約翰と呼べる一人の豫言者ユダヤに現はれ、當時のユダヤの人々の罪惡を責め、斯かる狀態にては將に來らんとする神の國に入る能はざるを說き、之に入らんと欲せば、悔い改めて善行を爲さざるべからず、而して眞に之を志す者は其表徵としてヨルダン川の水にてバプテスマを受くべしと要求しぬ。ユダヤ全國彼に依りて動かされ人々爭うてバプテスマを受けぬ。尙ほ彼は神より遣はさるる救世主の近く出現すべきを豫言しぬ。

第二章　耶蘇のバプテスマよりペテスダの池まで

豫言は適中せり。紀元第二十六年の正月、耶蘇基督は三十年住なれし故郷ナザレ村を立ち出で、ヨルダン川に來り、約翰よりバプテスマを受け給ふ。耶蘇基督之を受け給ひて水より上れる時、神の靈鳩の如き形して天より降り、其上に止まりぬ。是に於て約翰は此人の救世主なるを確め得たり。耶蘇基督は之より直ちに神の命を受け、惡魔の誘惑に打勝たん爲に近隣の山に赴きたり。此處にて惡魔は耶蘇基督を邪道に誘はんとして三度試みしが、三度共打ち破られ、遂に彼を離れぬ。此間四十日四十夜を費し、耶蘇は何をも食ひ給はざりしと云ふ。

耶蘇基督惡魔に打勝ち、約翰のバプテスマを授け居る處に歸り來給ひしに、約翰己が弟子の二人（一人はアンデレと呼び、他の一人は彼と同名にて約翰なりき）に耶蘇基督を紹介して、彼こそ世の待ち望む救世主なれと敎へぬ。是に於て其二人は耶蘇基督の

後を慕ひて彼の宿に至りぬ。時は午前十時頃にして、彼等は談話に耽り、時の移るを覺えず、遂に日没に至りぬと云ふ。是れ耶蘇基督の布教の初、其弟子を得たる最初にして、實に紀元第二十六年二月の事なりき。此時アンデレは先づ其兄弟なるシモンを耶蘇の許に連れ來りぬ、耶蘇其信仰の固きを看破し、之に新しき名を與へて彼得と稱びぬ。ペテロとは岩の義なり。次に約翰（弟子の約翰）は亦其兄弟ヤコブを連れ來りて耶蘇に見えしむ。かくて彼等は耶蘇と共に五人の團體となりぬ。

翌日彼等五人相携へて耶蘇の故郷ナザレ村に向ひて出發しぬ。正に是れ好個の新婚旅行、其旅路の如何にをかしかりけん。彼等ピリポなる者に遭ひしに、耶蘇は彼にも從はん事を勸め給ひしかば、彼喜びて從ひぬ、かくて六人の團體となりぬ。次にバルトロマイと云ふ者も亦ピリポの誘導にて耶蘇の弟子となりぬ。かくて七人の團體となりしが、是らの最初の弟子は皆後に使徒と呼ばれて耶蘇の十二高足の一部となりぬ。中にも彼得と約翰とは高足中の高足にして耶蘇の左右大臣たる觀ありき。時は二月の末なりき、寒風尚ほ野山を塞して征袖霜冷かなれども、新しき師新しき弟子の情愛の暖かさは、ガリラヤの湖の暖かさに似て、旅の宿は湖畔のテベリヤなりしか、想やるだに心往く次第なり。

彼等七人は二日路の旅を過ぎて三日目にナザレに著きけるが、耶蘇の母はナザレより一里半許り離れたるカナと稱ぶ村の或る家の婚禮の手傳に赴き居て、彼等七人をも婚禮に招きたりければ、彼等も赴きたり。故郷に飾る錦とて六人の弟子を携へたる耶蘇を見たる時、耶蘇の母マリアの喜悅如何ばかりなりけん。マリアには耶蘇生誕の時の不思議心の底に在りて、耶蘇は長の年月大工の職を爲したれども、何時かは世を救ふ救世主として世に立たん時のあるべきを思ひ居たりしが、今や眼前に其兆を見たる彼女の如何ばかり樂しかりけん。さて人一生の盛儀婚禮の華やげる燈火の影新郎新婦の幾千代かけて杯取り交はす喜悅の宴の尚ほ半なるに、早くも酒盡きて宴を司る者困じ果て居るを見給ひし耶蘇は、茲に憐憫の心

を起し給ひ、其神通力を現し給ひ、六つの大甕に水を把み取らしめて之を酒に變らしめ、無事に婚禮を終らしめたり。是れぞ基督が世に不思議なる業を現せし最初なりける。

耶蘇の父ヨセフの事は記す者無きを見れば、此時早く既に死にたりと見ゆ。家族は耶蘇の母と、耶蘇と、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンと稱べる四人の弟と、他に數人の妹となりしが、數人の妹は既にナザレ人に嫁せり。されば耶蘇は其母と兄弟と其弟子とを携へてカペナウムと呼べる處に下りて、此處に棲みたり。カペナウムはガリラヤ湖畔に在り、現時は徒に蘆葦茂る沮洳の地にて最近掘開せらるる廢墟の跡に昔を忍ぶのみなるが、基督當時は羅馬の稅關、兵營等もありて四通八達水陸交通の便ある頗る殷賑の地にして、加ふるに此處より湖岸に沿うて十哩許南にエンマウスと稱する處あり、有名なる温泉場にして病氣に効驗あり基督當時より今日に至るまで多數病者の輻湊する處なり。然ればカペナウムに在れば

是等病客に治癒を施し得る便利あるなり。かかる種々の便利よりして基督は將來傳道の中心と爲すべく此地を選定し、此處を定住の地と定めたるなり。

カペナウムに居る事一月許にして、三月の末になりければ　ユダヤ人の逾越の節近づきたり。逾越の節とはユダヤの最も大切なる節にして、昔ユダヤ人の先祖が悉く埃及に奴隷たりし時、埃及人餘りに暴虐に彼等を苦しめたりければ、モーセと呼ぶ一人の英雄起り、全國民をして悉く埃及を逃れ出でしむる手段として、神に訴へて埃及人中の初生兒を悉く殺さしめし事ありしが、此時ユダヤ人のみは羊を殺して其血を門に塗り置く樣に爲したれば、死の使の來れる時、此家はユダヤ人の家なればとて門前を逾越して其初生兒を殺さざりき。埃及人はユダヤ人の奉ずる神の力の大なるに驚き、遂にユダヤ人に埃及を出る許可を與へぬ。彼等は遑々しく酵入れぬ麵麭を食ひて埃及を立出で、四十年途中に彷徨し後遂に神より約束せられたるカナンの土地に入る事を得て、此處にエルサレムの都を得、壯麗

なる神殿を建てて國の基を確うしぬ。其故にユダヤ人は毎年春の頃埃及を出でたる時の神の恩惠を記念せん爲に酵入れぬ麵麭を食ひ、羊を神殿に備へて其肉を食ふ祝祭を行ふ、是れ逾越の節なり。此時にはユダヤ人にして滿十二歳以上の男子は特別の事情なき限、必ずエルサレムの神殿に詣づる慣例なりき。中には遠く希臘、羅馬、埃及等の地に赴き居る者にても、此祝節の爲に態々エルサレムに歸る者多かりき。

さて基督も此祝節に列らんとて弟子を携へてエルサレムに上りぬ。往きて神殿に登り見れば打ち驚かるる事のみぞ多かる。いとも尊き儀式の行はるべき神殿の廣庭には數多の商人充滿たり。中にも多きは兩換屋なり、是は遠き外國より歸來するものは外國の金錢のみを有すれば、之を神殿に奉納し又は物を購ふべくユダヤ錢と兩換する必要あるなり。而して此兩換屋は餘程高利の切賃を貪りたりと見ゆ。又參詣者は己の罪の贖の爲に牛羊等を購ひて之を神殿に奉納する者なるが、貧しき者は之に代て鴿を納めたり。是等牛羊鴿等も亦神殿の廣庭にて賣買せられたりき。然ば神聖なる神殿の廣庭は彼方に牛の鳴聲、此方に羊の鳴聲、或は鴿の聲等が兩換屋の客を招く聲等と相打て、俗氣粉々、射利の市場に異らず、而も盜賊の如き心の者さへ混るに至れり。然れば古來神の言を傳ふるを職としたる豫言者は此有樣をいたく憤慨し、商人等を殿内より逐ひ出したる事も屢々ありけるが、耶蘇も此有樣に驚き給ひ、茲に豫言者の權威を現し給ひ、繩を以て鞭を作り、彼等を叱咤し又彼等に說敎して彼等を殿より逐ひ出しぬ。之を見し人々は打驚き耶蘇に問ひて貴殿此等の權威を行ふからには神より來れるものならざるべからざるが、其證明として何事を爲して我等に示すかと云ひぬ。耶蘇は直ちに、爾曹此殿を毀て我三日にて之を建てんと答へぬ。此言を聞きて人々驚き言ふ、此殿は建築に四十六年を費ししに、貴殿は三日にて建つるかと問ひぬ。蓋し此神殿は紀元前第二十年にヘロデ大王の建築に取りかかり、當時紀元後第二十六年なる故斯く

は言ひしものにて此神殿建築の全く完成せしは紀元後六十年頃、實に前後八十年を費し、世に『ヘロデの神殿を見ざれば共に美を論ずる能はず』との諺を生ずるに至りし程壯麗なるものなりき。基督は此他種々なる行爲說敎を爲してユダヤ人を敎へ導き給ひしが、人々皆其權威あるに驚きたり。然れども斯かる粗野なる一見無學とも見ゆる人の如何にして斯くは名說を爲し得るかを訝しみ、且つ祭司學者を憚りて個人的には之に近づきて敎を聽かんとせし人も多からざりき。基督は夜々エルサレムの東方なる橄欖山上に假泊し給ひたり。

茲に珍しき事こそ起りたれ。ユダヤの國會議員にて學者なるニコデモと稱ぶもの、耶蘇の言行に感服し、畢竟耶蘇には何等か他と異れる非凡のものあるべしと思ひ、之に就きて言葉を交はさんとせしが、此時早く既に崩せる祭司學者等の耶蘇に對する反感を憚り、晝間耶蘇の許に來ることを得ず、夜間竊に遙々橄欖山上の假泊所を尋ね來れるこそ奇篤の至りなりけれ。耶蘇は一見直ちに人の心を見貫き給へば、ニコデモの志を嘉し給ひ、種々の問答の後、いと懇に神の國に入る者の必要條件を語り、神の國に入らんと欲せば、從前の罪を悔い、神の御靈を受けて、全く生れ代れる魂を有たざるべからざるを諭し給ふ。ニコデモ大に之に感じ、後基督の祭司等に捕はれんとせし時、基督の爲めに辯護などしたる事ありしが、生來臆病なる人にてもありしか、耶蘇の生前には遂に公然耶蘇の弟子と爲り得ず、唯耶蘇の死後其葬りに與りしのみなりき。

賑はしき逾越の節會も終りぬ。諸方より集り來りし人々の歸り行きてエルサレムは再び常の有樣となれる頃耶蘇も弟子と共に都を立ち出で、約翰のバプテスマを授けし處に至り見れば、約翰は此時既に祭司學者達とペレア及びガリラヤの王アンチパスとの聯合せる迫害を受け、民を惑はし政治上の反亂を起すものと目せられ、遠く遁逃してサマリヤのアイノムにありてバプテスマを施せり。耶蘇は約翰の舊バプテスマを施せし對岸なるユダヤの地にて、弟子をして悔改のバプテス

マを授けしめしに、人々の來り受くる者多く、其數は約翰に勝りたり。約翰は之を聞きて少しも心地を害する事無く却つて喜び、自己を花嫁を持てる花聟の友に比し、人々即ち花嫁の多く基督に來るを見て、其友なる約翰は喜悅多しと言ひしこそ、男らしき極なりけれ。基督は此處に止まる事一月半許、若葉に樹々の輝きて、袖拂ふ風の軟かに、野には穗波を立てつつ麥の熟せる五月の半、弟子と共にガリラヤ指して歸りぬ。途はサマリヤを經けるが、ユダヤの五月は氣候漸く暑く、基督の一行がサマリヤのスカルの町に近きし夕は耶蘇を始め一同旅の疲倦にてとある井の傍に休息しぬ。それより弟子達は麵麭を購はんとて町指して去り、耶蘇を一人井の傍に殘しぬ。此時恰も或るサマリヤの婦、水を汲まんとて此井の傍に來りければ、基督は此婦に水を乞ふ事よりして始め、種々啓發的問答を爲して、遂に己が世の救主なるを說明したれば、此婦大に感動し、水瓶を其處に還して町に走り、人々に基督の事を告げたり。之によりて人々擧りて此の井の傍に集り基督の敎を聞き、多く耶蘇を信じたり。而して人々耶蘇に此處に留らん事を乞ひしかば、基督は此處に二日留りて人々を敎へ給ひぬ。

基督はスカルの町を立ち出でてガリラヤに歸りけるが、其故鄕なるナザレには歸り給はずして、カペナウムに赴かんとし、先づ數ケ月前に奇蹟を行ひて水を葡萄酒に變せしめしカナに來り給ひぬ。ガリラヤの人々はエルサレムにて耶蘇の爲しし種々の不思議なる言行を見或は傳へ聞きて耶蘇を見んとする念慮强かりければ、皆喜びて彼を迎へたり。中にもアンチパス王の大臣なりしクーザと云へるもの（路八〇三參照）其子甚しく病みてカペナウムにありけるが、耶蘇のガリラヤに來り、今カナにあるを聞くや愴惶としてカナに赴き、速かにカペナウムに下りて之を癒し給はん事を耶蘇に乞ひぬ。耶蘇は其信の篤きを見給ひ、爾の子は生くと宣ひしが、大臣は其言を信じ徹夜してカペナウムに下りしに、其奴僕のカナに向ふに遇へり。驚きて其故を問へば、今息は昨夜の七時より癒え始め給ひし故之を報

ずる爲に來りぬと云ふ。然るに是れ正しく耶蘇の「爾の子は生く」と宣ひし時と同時なりければ、之よりクーザはもとより其妻ヨハンナも其他の家族も耶蘇を信仰したりける。之より耶蘇は其弟子と共にカペナウムに歸り、其母兄弟等と共に住み給ひ、弟子等をも各々舊の生業に就かしめ、自らも世を渡るたつきの生業を爲しつつ、傍ら神の國の道を宣べ傳へつつ、或は時に約翰を援け、或は將來己が傳道の方策を考へなどして、靜に翌年三月プリムの節筵までに及びぬ。

紀元二十六年の十月より二十七年の九月まではユダヤの安息年とて、田畑に休間を與ふる年なりければ、人々間を得て宗教に心を傾くる者多く、洗禮を施せる約翰の事業も著々進捗せしは疑ふべからざる處也。約翰は基督の先驅者にして基督の爲に道を備ふるなりければ、其事業の興廢は直接基督の事業に影響するなり。然るに約翰の事業の盛になるに連れ、其迫害も亦甚しくなるは數の免かるべからざる處、更に之を一層甚しくせしめたるは、ペレア及びガリラヤの王、アンチパスの正妻を離緣して、其異腹の兄の妻ヘロデヤと婚したる事是也。約翰は之を目して人道上免すべからざる罪惡なりと宣言しぬ。ヘロデヤ之を聞きて大に怒る。加ふるに、祭司、學者、パリサイの徒等約翰に快からざるものの彼に反對するあり、約翰の身邊風雲穩かならざるに至れり。

斯かる時、耶蘇弟子を携へずして一人飄然としてエルサレムに上りぬ。時は紀元第二十七年三月プリムの節筵なりき。此時基督は安息日にベテスダの池の畔にて人の病を醫しぬ。ユダヤ人は神天地を日月火水木金の六日間にて造り、土曜日には安息に入り給ひ、人々にも亦土曜日を安息日として神に献げ、此世の業を休むべしと命じ給ひしと信じ、嚴に之を守り、すべての勤勞を忌みたる樣實に滑稽なりき。即ち歩行は十一町程より以上は禁ぜられ、重き履物、入れ齒も亦力を要する故を以て禁じたりと云へば、其如何に馬鹿氣たる慣習なりしかを察すべし。然れども慣習の勢力は莫大なるものあり、人々皆之に縛せられて脱する事能はざ

りき。然るに基督は此重き禁戒を犯して敢然として人の病を醫しぬ。是に於て基督はエルサレムの有司の前に安息日を犯すものとして注目せらるるに至り、其尋常一樣の平凡兒ならざるを見るや、一部の者は基督を殺さんとさへ謀るに至りしこそ是非なけれ。

第三章　ガリラヤ傳道

斯かる時しも一飛報あり、基督の耳朶を打ちぬ。何ぞや、洗禮の約翰遂にヘロデヤを批難したる事より延いて政治上の野心あるものとせられ、アンチパスの手に捕へられ、死海の岸なるマケロスの土牢に投ぜらるゝと。嗚呼世の女より生れしものの中約翰より大なるものなし、渺たる一布衣にして頑强なるユダヤの全土を動かしたる彼も亦遂に捕はれたるか。我が業を開始する時正に至れり。斯く思ひて基督は俄に立ちてガリラヤに歸りぬ。而して先づ赴きたるはナザレなりき。相見ざる事茲に正に一年なる故郷ナザレは山河依々として去年に似たれども、似ざるものは耶蘇の身分と、耶蘇を迎ふるナザレ人の感情なりき。士三日見ざれば當に刮目して見るべし。耶蘇はも早や一工匠に非ず、一個堂々たる豫言者なり救世主なり。昨春以來カナ、エルサレム、カペナウム等より聞こえし耶蘇の評判は著

るしくナザレ人の心を驚かしたり。斯かる偉人を我が村より出したりとの誇はナザレ人に漲りぬ。されば今眼前に基督を見るや、狂喜して之を迎へ、先づ安息日に會堂にありて、彼に説教を請ひたるは頗る自然の成行と言はざるべからず。耶蘇は喜んで之を諾し、古昔より多くの豫言者の豫言したる救世主出現の希望は、今眼前に遂げられたり。我は即ちその救世主なりと云ひぬ。之を聞きしナザレ人は皆口々に其恩惠の言葉を讃め稱へたり。此處までの調子は甚良好なりしが、次に人々が耶蘇に向つて奇蹟を爲さんことを請ふ心起りたるに對して、基督が豫言者は故郷に於て尊ばれざる所以及び其奇蹟を行はざる所以を古の例を引きて述ぶるに至りて群衆の心は變化しぬ。曩の歎美は憤怒と變り、皆立ち上りて耶蘇を殺さんとし、捕へて大なる懸崖の上に連れ行きぬ。其處より彼を下に投じて殺さんとしたる也。淺きは人の心かな。然れど耶蘇に同情する人もありてか、其處を逃れ出ててカペナウムに歸りぬ。

紀元第二十七年三月の末カペナウムに歸りて、カペナウムの會堂にて教を爲せしに、其教に權威ありしかば、人々皆駭きあひぬ。其教の要は

神の國は近づけり。人々皆悔い改めて福音を信せよ。信じたる者の行ひは、其義しき事、かの學者の輩に勝らざるべからず

と云ふにありき。人々皆喜びて彼の言説を聽けり。茲に耶蘇の病を癒す力現れたり。先きにアンデレの導きにて耶蘇に見えし其兄弟シモンの姑痛く熱病を病みてありしが、耶蘇其手をとりて起すに及んで忽ち熱去り、起きて仕事を爲し得る樣になれり。此評判四邊に聞こえければ、多くの人多くの病者を携へ來りて耶蘇に癒しを乞ひけり。耶蘇は悉く之を癒して歸しぬ。斯かりければ耶蘇は殆んど休息を得難きまでなりけり。其翌朝耶蘇曉爽に起き出で人なき所に赴きて、神に祈り居りしに、早くも人々耶蘇に寄せ來りて彼を尋ねければ、シモン等彼を慕ひ尋ねて彼に遭ひ、人々の彼を尋ぬる由を告げければ、耶蘇は之より傳道の爲に附近

の郷村に赴かんとてそのまま傳道に赴れける。之を第一回ガリラヤ巡回とは名くる也。

その頃或る朝衆人神の道を聽かんとて擠擁ける時、耶蘇ガリラヤの湖の濱に立て、磯に二艘の舟あるを見き。漁夫は舟を離れて網を洗ひ居れり、も早や仕事を終らんとするなり。其一艘はシモンの舟なりしが、耶蘇は之に乘り、請うて岸より少許離れ、坐して舟中より衆人を敎へぬ。敎へ竟りてシモンに曰ひけるは沖へ出で網を下して漁れ、シモン答へけるは師よ我等終夜働きしかど所得無かりき。然れど爾の言に從ひて網を下さん。既に下して魚を圍めること甚多く網さけかかりければ、いま一艘なる舟の友を招きて來り助けしめしに、彼等來りし時、其魚二艘の舟に充ちて沈まんばかりなりし。シモン之を見て耶蘇の足下に伏し主よ我を離り給へ我は罪人なりと曰へり。是シモン及び偕に在りし者皆漁りし所の魚の夥しきに驚ける也。シモンの友ヤコブと約翰も亦然り。耶蘇シモンに曰ひけるは懼る

る勿れ、爾今より人を獲べしと。是に於てシモン及其兄弟アンデレは舟、網其他一切を捨てて耶蘇に從ひ、ヤコブ約翰の兄弟も其父ゼベダイを傭人と共に舟に遺して彼に從へり。是にて耶蘇は生業を捨てて耶蘇に從ふ弟子四人を得たるなり。彼は此四人の弟子を携へて再び傳道旅行に出でぬ。是第二回ガリラヤ巡回なり。此巡回中にありし一事は耶蘇の癩病を癒したる事なり。即ち耶蘇或村に行きしに、身悉く癩病を患る者あり。耶蘇を見てひれ伏し願ひ曰ひけるは主若し聖旨に適ふ時は我を潔くなし得べし。耶蘇手を伸べ彼に按けて我心にかなへり潔くなれと曰ひければ、直に癩病潔れり。耶蘇彼を戒めて人に告ぐる勿れと言ひしが、耶蘇の聲名ますます揚りて許多の人々或は敎を聽かんとし、或は病を醫されんとして集り來りぬ。此故に耶蘇常に可成人を避け人無き處に退きて祈り給ひき。かくて巡回數日の後、耶蘇またカペナウムに來りしに、彼の室に居る事聞えければ、直に多の人々集ひ來り、門に立べき場所さへもなき程なりき。耶蘇彼等に敎を宣

ぶ。此に癩瘋を病たる者を四人に昇せ、耶蘇に來れるものありしが、群衆により て近づき難かりければ、彼の居るところの屋蓋を取除き、癩瘋の人を床のまま縋下せり。耶蘇其信仰を見て癩瘋の人に曰ひけるは、子よ心安かれ爾の罪赦されたりと。群衆の中には數人の學者ありて耶蘇を窺ひ、若し耶蘇に失言あらば之を捕へて批難の材料とせんと待ち居りしに、今耶蘇の言を聞きて心の中に謂ひけるは斯人は何故かく神を瀆す事を言ふか、神にあらずして誰か人の罪を赦すを得んやと。耶蘇直に彼等が心中に斯く論ずるを知りて、彼等に言ひけるは、爾曹何ぞ心中に斯る事を論ずるか、我は此地上に於て人の罪を赦す權威あり。我今其權威ある事實を爾曹に示すべしとて、癩瘋の人に向ひ、我爾に告ぐ起きて床を上げ爾の家に歸れと曰ひしに、その人直ちに起きて床を上げ衆人の前に出でぬ。衆人皆駭き、神を崇めて曰ひけるは、我儕未だ斯の如き事を見し事なしと。

此後耶蘇はマタイと名くる稅吏の稅關に居りし時行きて、己に從はん事を命せしに、マタイは遂に一切を捨てて耶蘇に從ふ身となりぬ。この人後に十二使徒の一人となりぬ。當時稅吏と言へば、羅馬の役人にて常に希臘語を用ひて上官に詔を呈し、下民にはアラマイック語を用ひて怒罵し、常に稅金を二倍に取りて、其一半は私せしものにて國民一般より今日の高利貸の如く忌み嫌はれしものなりき。基督はマタイがかかる職業のものなりしに拘らず招き給ひしは、其度量海の如きを證するものなり。而してマタイは感恩の情を表せんとて耶蘇の爲に大なる饗宴を爲せしに、耶蘇の他の弟子は元より、マタイの友人なる稅吏輩も皆共に招かれて饗宴に列りたり。是に於て、其所の學者等は之を見て大に驚き、耶蘇の弟子に向ひ、爾曹が稅吏等と共に飲食するは何故ぞと問ひぬ。耶蘇は之に答へて、健康なる者は醫者の助を需めず、惟病ある者のみ之を需む、耶蘇の世に來るは義人を招く爲に非ずして罪ある人を招きて悔い改めしめん爲なりと云はしむ。人々此言に對して反抗する事能はざりき。

當時ユダヤには四個の思想の流ありき。一、サドカイ、二、パリサイ、三、エッセーン、四、ゼロトの四派、是也。サドカイは當時の權門勢家にして宗教よりも寧ろ政治に熱中し、其宗教上の思想は死後の復活を受け納れざりしにても畧察せらるる如く甚だ冷淡なるものなりき。されど其丈又ヘロデ家或は羅馬の官吏に用ひられ上級の祭司職は多くサドカイ派の占むる處なりき。さればサドカイ派と言へば臺閣の風ありて常に貴族的生活を爲したるものなりき。パリサイ派は之に反し、極端なる宗教熱心家にして、常に宗教及び道德上他人の上に出づるを誇り、己等のみ別に神に惠まるる者と妄信し、特に古昔より言傳へたる神の律法の解釋を株守し、確く之を守りて一毫も犯さざらんとし、若し他人の之を犯すを見れば批難已む無き人々なり。されば安息日の如きは別して嚴重に守りしものにて、近頃新に名を馳せたる耶蘇なる者が安息日を犯すを聞き如何にかして之を捕へて批難せんと機を窺ひ居たりしぞうたてけれ。エッセーン派といふは、東洋の隱者の如く、世を逃れて山野に苦行し、獨清主義を執りし人々なりき。ゼロト派の人々は熱狂せる愛國者にして、常にユダヤを羅馬より獨立せしめんとて機を窺ひ、機あれば干戈に訴へても之を遂げんとする一派なりき。

紀元第二十七年の四月カペナウムを中心とせる耶蘇の活動が頗る目覺しく、ユダヤの人々を動かせしのみならず、遠くツロ、シドンの人々さへ耶蘇に接せんとて遙々カペナウム指して來るよし聞こえければ、一たびバプテスマのヨハネを牢獄に投じ得て安堵せしパリサイ派は前門虎を拒げば後門狼の譬に洩れず、周章狼狽、耶蘇の行く處を附け狙ひて何がな批難の料を見出さんと苦心したるこそ愚なれ。さて紀元第二十七年春逾越の節過ぎて、二日の後の安息日に耶蘇弟子と共に麥の畑を經過しに、此時弟子饑ゑて麥の穗を摘み之を手にて搏み食ひしかば、パリサイ派の人々は、其手にて搏みたる事を安息日を犯したるものとして批難したるこそ滑稽の極なりけれ。耶蘇之に答へて、安息日は人の爲に設けられたる者

にして、人は安息日の爲に設けられたる者に非ずと言ひ給へるは痛快なり。其後五月に入りて、ある安息日に耶蘇カペナウムの會堂にて說敎せし時、會堂に右の手枯たる人ありければ、耶蘇を訴へんと欲へる學者とパリサイの人等耶蘇之を醫すならんかと窺ひぬ。耶蘇其意を知り、手枯し人に對ひ人々の中に立てよと言ひければ、其人おきて立てり。耶蘇曰ひけるは、爾曹の中、一の羊を有てる者あらんに、若しその羊安息日に坑に陷らば之をとりあげざるか、人は羊より優るる事幾何ばかりぞや然らば安息日に人を醫すは善きにあらずや如何と、人々之に答ふる能はず。遂に耶蘇怒を含みて人々を環視し、其人に手を伸よと曰ひければ、彼其如くせしに、手即ち癒えて他の手の如くなりぬ。パリサイと學者等大いに怒り、如何に耶蘇を處せんかと互に評議を始めたり。此評議にはヨハネの時の如くヘロデ黨の人々も加はりぬ。耶蘇の身邊茲に風波騷がしくなりぬ。耶蘇も亦之に對抗して正々堂々の陣容を整へざるべからざるに至れり。

當時耶蘇の弟子は其數甚だ多かりしが、耶蘇其中より己れの心に適ふものを十二人擧げ、使徒と名け、己と共に置き、特に訓練して基督敎を確立傳播する器となしぬ。即ち之を選任する前の夜は耶蘇山に上り、終夜神に祈りぬ。夜明て耶蘇弟子を呼び、其中より十二人を選びて之を使徒と名けぬ。即ち、ペテロと名け給ひしシモン、其兄弟アンデレ、及びヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、マタイとトマス、アルパイの子なるヤコブと其兄弟ユダ、ゼロト黨なりしシモン、イスカリオテの人なるユダ以上十二人なり。耶蘇この時、大法雨を雨降さんとしたるなれば之を聽かんとて多くの人々山上山下に充滿たり。耶蘇山上より是らの人々及び弟子たちに說敎すらく、

『心の貧き者は福なり天國は即ち其人の有なれば也。哀む者は福なり其人は安慰を得べければ也。柔和なる者は福なり其人は地を嗣ぐ事を得べければ也。饑渴く如く義を慕ふ者は福なり其人は飽くことを得べければなり。矜恤ある者は福なり

其人は矜恤を得べければ也。心の清き者は福也其人は神を見ることを得べければ也。和平を求むる者は福なり其人は神の子と稱へらる可ればなり。義しき事の爲に責らるる者は福なり、天國は即ち其人の有なればなり。我爲に人なんぢらを誹り詐り又迫害いつはりて各樣の惡口をいはん、其時は爾曹福なり、喜び樂め天に於て爾曹の報賞多ければ也。そは爾曹よりも前の豫言者をも此く責めたりき。

爾曹は地の鹽なり、鹽もし其味を失はば何を以てか故の味に復さん後は用なし外に棄られて人に踏まるるのみ、爾曹は世の光なり山の上に建てられたる城は隱るることを得ず、燈火を燈して斗の下におく者なし、燭臺に置きて家にあるすべての物を照さん、此の如く人々の前に爾曹の光を輝かせ然ば人々爾曹の善き行ひを見て天に在す爾曹の父を榮むべし。

われ律法と豫言者を廢る爲に來れりと思ふ勿れ、われ來りて之を廢つるに非ず、成就せん爲なり、われ誠に爾曹に告ん。天地の盡ざる中に律法の一點一畫も遂盡さずして廢ることなし、是故に人もし誡の至微き一を壞り又その如く人に敎へなば天國に於て至微き者と謂れん。凡そ之を行ひ且つ人に敎ふる者は天國に於て大なる者と謂るべし。我なんぢらに告げん學者とパリサイの人との義しきよりも爾曹の義しき事勝れずば必ず天國に入る事能はじ。

古の人に告げて殺す事勿れ殺すものは審判に干らんと言へる事有るは爾曹が聞きし所なり。然れど我なんぢらに告げん凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん又其兄弟を愚者よといふ者は集議に干らん、又狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし。是故に爾もし禮物を携へて壇に往きたる時、かしこにて兄弟に恨まるることあるを憶ひ起さば、その禮物を壇の前に置き、まづ往きて爾の兄弟と和らぎ、後來りて爾の禮物を献げよ。爾を訴ふる者と偕に途間にある時はやく和げよ。恐くは訴ふる者なんぢを審官に付し、審官また爾を下吏に付し、遂に爾は獄に入れられん。我まことに爾に告げん分釐までも償はざれば必ず其所を出るこ

と能はざる也。

古の人に告げて、姦淫すること勿れと言へることあるは爾曹が聞し所なり。然れど我なんぢらに告ん凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也。もし右の眼爾を罪に陷さば抉出して之を棄てよ、蓋は五體の一を失ふは全身を地獄に投げ入れらるるよりは勝れり。若し右の手なんぢを罪に陷さば之を斷りて棄てよ蓋は五體の一を失ふは全身を地獄に投げ入れらるるよりは勝れり。また曰へる事あり凡そ人その妻を出さんとせば之に離縁狀を與ふべしと。然ど我爾曹に告げん、姦淫の故ならで其妻を出すものは之に姦淫なさしむるなり。又出されたる女を娶る者も姦淫を行ふなり。

また古の人に告げて僞りの誓を立つること勿れ、なんぢ誓ふ所は必ず主に遂ぐべしと言へること有るは爾曹が聞きし所なり。然れど我爾曹に告げん。更に誓ふこと勿れ天を指して誓ふ勿れ、是れ神の座位なればなり。地を指して誓ふこと勿れこれ神の足凳なればなり。エルサレムを指して誓ふこと勿れ、これ大王の京城なれば也、爾の首を指して誓ふ勿れ、そは一すぢの髪だに白くし黑くすること能はざれば也。爾曹ただ是り〳〵否々と言へ此より過るは惡より出るなり。

目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言へること有は爾曹が聞きし所なり。然ど我なんぢらに告げん、惡に敵すること勿れ、人なんぢの右の頰を批たば亦ほかの頰をも轉らして之に向けよ、爾を訟へて裏衣を取らんとする者には外服をも亦とらせよ。人なんぢに一里の公役を强なば之と共に二里ゆけ。爾に求むる者には予へ借んとする者を卻くる勿れ。爾を愛する者を愛しみて其敵を憾むべしと言へる事あるは爾曹が聞きし所なり。然れども我爾曹に告げん。爾の敵を愛しみ爾曹を詛ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇迫害者の爲に祈禱せよ。此如するは天に在す爾曹の父の子とならん爲なり夫天の父は其日を善き者にも惡者にも照し、雨を義しきものにも義しからざる者にも降らせ給へり。爾曹己れを愛する者を愛

するは何の報賞かあらん。税吏も然せざらんや、安否を兄弟にのみ問ふは人より何の優れたる事かあらん。税吏も然せざらんや、是故に天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし。

爾曹人に見せん爲に其義しきを人の前に行すことを慎め、若し然らずば天に在す爾曹の父より報を得じ、是故に施濟を行す時、人の榮を得ん爲めに、會堂や街衢にて僞善者の如く笛を己が前に吹しむる勿れ。我まことに爾曹に告げん彼等は既にその報賞を得たり。爾施濟をする時、右の手の爲すことを左の手に知する勿れ、如此するは其施濟の隱れんが爲なり、然ば隱れたるに鑒たまふ爾の父は明顯に報い給ふべし。なんぢ祈る時、僞善者の如くすること勿れ、彼等は人に見られんが爲に會堂や街衢の隅に立ちて祈る事を好む。我誠に爾曹に告げん彼等は既に其報賞を得たり。なんぢ祈る時は嚴密なる室にいり戸を閉ぢて隱微たるに在す爾の父に祈れ、然らば隱微たるに鑒たまふ爾の父は明顯に報い給ふべし。爾曹祈る時は異邦人の如く重複を言ふなかれ、彼等は言多きを以て聽かれんと欲へり、是故に彼等に效ふこと勿れ、爾曹の父は求はざる先に其需用物を知り給へばなり。然ば爾曹かく祈るべし。

天に在ます我儕の父よ、願はくは爾名を尊崇させ給へ。爾國を臨らせ給へ。爾旨の天に成る如く地にも成らせ給へ。我儕の日用の糧を今日も與へ給へ。我儕に負債ある者を我儕がゆるす如く我儕の負債をも免し給へ。我儕を患難に遇せず惡より救ひ出し給へ。國と權と榮とは窮りなく爾の有なればなり。アメン

爾曹もし人の罪を免さば天に在ます爾曹の父も亦なんぢらを免し給はん。然れど若し人の罪を免さずば爾曹の父も爾曹の罪を免し給はざるべし。なんぢら斷食する時、僞善者の如く憂容をする勿れ、彼等は斷食を人に見せん爲に顏色を損ふ。我まことに爾曹に告げん、彼等は既に其報賞を得たり。なんぢ斷食する時は首に膏をぬり面を洗へ、如此するは爾の斷食人に見えずして隱微たるに在す爾の父に

現れんが爲なり。然れば隱微たるに鑒たまふ爾の父は明顯に報い給ふべし。

蠹くひ銹くさり盜人うがちて竊む所の地に財を蓄ふること勿れ、蠹くひ銹くさり盜人穿ちて竊ざる所の天に財を蓄ふべし。蓋は爾曹の財の在るところに心も亦ある可れば也。身の光は目なり若し爾の目瞭かならば全身も亦明かなるべし。若し爾の目眊からば全身暗かるべし。是故に爾の中の光若し暗からば其暗き事如何に大いならずや。人は二人の主に事ふる事能はず。蓋は是を惡み彼を愛しみ、是を親しみ彼を疎むべければ也。なんぢら神と財に兼ね事ふる能はず。是故に我爾曹に告げん、生命の爲に何を食ひ何を飲み、また身體の爲に何を衣んと憂慮ふ勿れ。生命は糧より優り、身體は衣よりも優れるものならずや。爾曹天空の鳥を見よ稼くことなく穡ることを爲ず、倉に蓄ふることなし。然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり。爾曹之よりも大いに勝る者ならずや。爾曹の中誰か能くおもひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや。また何故に衣の事を思ひわづらふや、野の百合は如何にして長つかを思へ、勞めず、紡がざる也。われ爾曹に告げん、ソロモンの榮華の極の時だにも其裝ひこの花の一に及かざりき。神は今日野に在りて明日爐に投げ入れらるる草をも如此よそはせ給へば、況て爾曹をや。嗚呼信仰うすき者よ、然ば何を食ひ何を飲み何を衣んとて思ひ煩ふ勿れ。此れみな異邦人の求むるものなり。爾曹の天の父は凡て此等のものの必需ことを知り給へり。爾曹まづ神の國と其の義しきとを求めよ、然ば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし、此故に明日の事を憂慮ふなかれ。明日は明日の事を思ひわづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり。

人を議すること勿れ恐くは爾曹も亦議せられん。爾曹が人を議する如く己も議せらるべし。爾曹が人を量るごとく己れも量らるべし。爾兄弟の目にある物屑を視て己が目にある梁木を知らざるは何ぞや、己の目に梁木のあるに如何で兄弟にむかひて爾が眼にある物屑を我に取せよと曰ふことを得んや。僞善者よ先づ己の

目より梁木を取れ、然らば兄弟の目より物屑を取り得る樣明かに見ゆべし。

犬に聖物を與ふる勿れまた豕の前に爾曹の眞珠を投げ與ふる勿れ恐くは足にて之を踏みふりかへりて爾曹を噬みやぶらん。

求めよ然らば與へられ、尋ねよ然らばあひ、門を叩けよ然らば開かるることを得ん。蓋はすべて求むる者は得、尋ぬる者はあひ、門を叩く者は開かるべければなり。爾曹の中誰か其子パンを求めんに石を與へんや、また魚を求めんに蛇を與へんや。然れば爾曹惡しき者ながら善き賜を其子に與ふるを知る、まして天に在す爾曹の父は求むる者に善物を與へざらんや。是故に凡て人に爲られんと欲ふことは爾曹また人にも其如く爲よ、是律法と豫言者なる也。

窄き門より入よ、沈淪に至る路は濶くその門は大なり。此れより入る者多し。命に至る路は窄くその門は小し、其路を得るもの少なり。

僞りの豫言者を謹めよ、彼等は綿羊の姿にて爾曹に來れども內は殘狼なり。

是れその果に由りて知るべし。誰か荊棘より葡萄を取り蒺藜より無花果を採る事をせん、凡て善き樹は善き果を結び惡しき樹は惡き果を結べり。善き樹は惡しき果を結ばず、惡しき樹は善き果を結ぶこと能はざる也。凡そ善き果を結ばざる樹は斫れて火に投げ入れらる。是故に其果によりて之を知るべし。我を召びて主よ主よと曰ふもの盡く天國に入るに非ず唯之に入る者は我が天に在す父の旨に從ふ者のみなり。其日われに語りて主よ主よ主の名に託りてをしへ主の名に託りて鬼を追ひ、主の名に託て多く異る能を行ししに非ずやと云ふもの多からん。其時かれらに告げて、我嘗て爾曹を知らず、惡を爲すものよ我を離れ去れと言はん。是故に凡て我が此言を聽きて行ふ者を磐の上に家を建てたる智人に譬へん。雨ふり大水いで風ふきて其家を撞てども倒るることなし、是れ磐を基礎と爲したればなり。凡て我がこの言を聽きて行はざる者を沙の上に家を建てたる愚なる人に譬へん、雨ふり大水出で風ふきて其家を撞てば終には倒れてその傾覆おほいなり。』

と、其言辭堂々として實に疾風枯葉を捲くの概あり。聽く者皆駭然たり。そは學者の言の如からず、權威ある者の如く敎へたれば也。是實に神の國の憲法にして山上の垂訓と名くる處のもの、露のトルストイの如きは基督敎之に盡くと稱したるものなり。

耶蘇山上の大說敎を畢り給ひ、カペナウムに歸り給ひしに、或る異邦人にして百夫の長たりしもの、其愛する僕やみて死ぬばかりなりければ、耶蘇の事を聞きユダヤの長老等を遣して僕を助け給はん事を耶蘇に求へり。彼等耶蘇に就り切に勸めいひけるは、此事を求むる人は善人なり。我民を愛し、我儕の爲に會堂を建てたり。耶蘇彼等と共に往きて既や其家に近づける時、百夫の長朋友を遣はして曰せけるは、主よ自己を勞はすこと勿れ、我が家の下に入れ奉るは憚多し、故に我なんぢの前に出るも亦憚あり。唯一言を發し給はば我が僕は愈えん。蓋は我人の權威の下に屬ける者なるに我下に亦兵卒ありて此に往けと命へば往き、彼に來れと命へば來る。我が僕に之を行せと命へば即ち行すが故なり。耶蘇聞きて之を奇みし、從へる人々を顧て曰ひけるは、我爾曹に告げん、イスラエル人の中にも未だ斯る篤き信に遇ざりきと。遣はされたるもの家に歸りて、病みたりし僕を見れば、已に全快をなせり。

翌日耶蘇ナインと云へる邑に往きけるに、許多の弟子及び許多の人々も共に往けり。邑の門に近づきし時、舁出さるる死人あり。此は獨の子にて其母は嫠なり。邑の人々多くこれに伴ふ。主、嫠を見て憫み、哭くなかれと曰ひて近より、其櫬に手を按けければ舁ける者共止まれり。耶蘇いひけるは、少者よ我なんぢに命ふおきよ、死たるもの起きて且言ひ始む。耶蘇之を其母に予せり。衆人みな懼れて、神を崇め言ひけるは、大なる豫言者われらの中に興る、神その民を眷顧たまへりと。耶蘇の聲名ユダヤの全國また徧く四方に揚りぬ。

耶蘇すでに十二使徒の選任、山上の大說敎をなし、今又死者をして蘇らしむ。

其聲名の遠く馳せたる宜なり。然れど是と共に耶蘇に反對する氣勢も亦大いに上れり。即ち耶蘇の力を惡しき方面より觀察したるものは、耶蘇狂して斯かる異常の事を行ふと爲すに至れり。遂に耶蘇の親屬耶蘇を狂せりとし、拏へんとて來るに至りぬ。又エルサレムより耶蘇を觀察せんとて下り來れる學者等も、彼は鬼の王によりて鬼を追ひ出すなりと曰へり。此當時耶蘇の母と兄弟も亦耶蘇の言動を手控へしめんとて力めたる形跡あり。耶蘇は少しも是等に顧慮する所なく、其爲さんとし給ひし所を續行しぬ。然れど此時に當り耶蘇の傳道方法も多少變化する必要ありき。即ち新に選任されたる十二使徒に對して特別の敎育を施すの必要是なり。之が爲耶蘇の行動は是より重に十二弟子の間の敎訓に向ひ外に向つて動かず、然ば聖書に多く記する處あらず、秋期の第三ガリラヤ傳道までの間に、記さるるところはバプテスマのヨハネより使者の來れる事と、耶蘇が或るパリサイの人に請かれて客となれる二事あるのみ。

使徒の選任、山上の大說敎等は紀元第二十七年五月の事なりしが、時は進みて七月となりぬ、基督は兀々として使徒の敎誨に屈托し、聞ゆるあらず、茲に二の大なる惑を生じたるはバプテスマの約翰なりき。彼は去る三月を以てマケロスの土牢に繫がれぬ。されどヘロデ王の處置頗る寬にして、常に其弟子等と往來するを許したりき。約翰は弟子の報知によりて基督の動靜を知れり。最初五月頃までの基督の活動は頗る目覺しくして約翰の期待に背かざりしが、七月の頃となりては耶蘇の動靜杳として聞ゆるあらず、耶蘇今何事を爲すや。約翰の獄中にありて疑を生じたるは、此耶蘇果して世の救主なりや否やにてありき。即ち其弟子二人を彼に遣はして曰せけるは、來るべき世の救主は爾なりや又我等他に待つべきかと、耶蘇彼等に答へて曰ひけるは、爾曹が聞くところ見るところの事をヨハネに往きて告げよ、瞽者は見、跛者は步み、癩病人は潔り、聾者は聞き、死にたる者は復活され、貧しき者は福音を聞かせらる。凡そわが爲に躓かざる者は福な

りと。彼等の歸れる後、耶蘇約翰の事を人々に曰ひけるは、爾曹何を見んとて野に出でしや、風に動かさるる葦なるか、然らば何を見んとて出でしや、美服を著たる人なるか、美服を著たる者は王の宮にあり。然らば何を見んとて出でしや、豫言者なるか、然り、われ爾曹に告げん彼は豫言者よりも卓越たる者なり。夫なんぢに先ちて道を備ふる我が使者を我なんぢの前に遣らんと錄されたるは即ち是なり。誠に爾曹に告げん、婦の生みたる者の中未だバプテスマの約翰より大なる者は起らざりき。然れど天國の最小さき者も彼よりは大なる也と。此時耶蘇天を仰ぎ祈りて曰ひけるは、天地の主なる父よ、此事を智者達者に隱して赤子に顯はし給ふを謝す父よ然りそれ此の如きは聖旨に適へるなりと。又人々に向つて曰く、父は我に萬物を予へ給へり。父の外に子を識る者無く、又子及び子の顯はす所の者の外に父を識る者なし。凡て勞れたる者、また重きを負へる者は我に來れ、我なんぢらを息ません。我は心柔和にして謙遜ものなれば、我が軛を負ひて我に學へ、なんぢら心に平安を得べしと。

その後ある暑き日、シモンと呼ぶパリサイ派の人耶蘇を請きて共に食せん事を願ひければ、耶蘇その人の家に入りて食に就けり、邑の中にマグダラのマリアとて從來惡行を爲せる婦ありけるが耶蘇を信じて、其罪を許され、且つ心魂を潔められければ、感恩の情に堪へ難く、耶蘇がシモンの家に在りと聞きて臘石の盒に香膏を携來り、耶蘇の後に立ち、足下にて哭き、涙にて其足を濡ほし、首の髮を以て之を拭ひ、且つ其足に幾度も口を接け、又香膏を之に抹れり。シモン之を見て心の中に謂ひけるは、此人若し救主ならば捫りし者は誰なるか、又如何なる婦なるかを知らん此婦は惡行を爲せる女なり。耶蘇その意を知りて答へ曰ひけるは、シモン我爾に言ふ事あり。答へけるは師よ言ひ給へ。耶蘇曰ひけるは、或債主に二人の負債者ありて、一人は金五百、一人は五十を負りしに、償方なかりければ、債主この二人を免したり。然ば二人の者その債主を愛する事いづれか多き、

我に聞かせよ。シモン答へけるは、我思ふに免さるる事多き者ならん。耶蘇曰ひけるは爾が意ふ所違はざる也。遂に婦を顧てシモンに曰ひけるは此婦を見るか、我爾の家に入るに爾は我が足に水を與へず、此婦は涙にて我足を濡ほし首の髪を以て拭へり。爾は我に口を接けず、此婦は我ここに入りし時より我足に口を接けて已まず爾は我が首に膏を抹ず、此婦は我足に香膏を抹れり。是故に我爾に曰はん、此婦の多の罪は赦されたる故に其愛も亦多きなり。赦さるる事少きものは其愛も亦少しと。此マグダラのマリアは後にエルサレムの傍なるベタニヤに棲み、品性一變して實に貞淑清淨なる婦人となれり。

紀元第二十七年も涼風をよぐ十月となりぬ。耶蘇はこの五ヶ月の間靜かに十二使徒を訓練することにのみ重きを置きて外面に向つては、さして大なる事業を爲し給はざりしが、然せる中にも前に述べしマグダラのマリアを始め有力なる婦人の信者も數多出來して、傳道旅行にも多く事缺かず、又氣候も旅行に適するに至りたれば、愈々十二使徒を從へつつ、第三ガリラヤ巡回を始む事となれり。使徒等は單獨に傳道者として遣はさるる前に先づ耶蘇に從つて其見習を爲し、此五ヶ月の間訓練せられたる所を實地に適用せんとしたる也。此傳道者としての初旅は使徒らに如何ばかり愉快なりけん。此時耶蘇の一行に物質的の奉仕を爲せるは、マグダラのマリア、ヘロデの大臣クーザの妻ヨハンナ、スザンナと云へる女、此他多數の女なりき。

此頃より耶蘇の教説の方法少しく變じ來りぬ。即ち多く譬喩を用ゐるに至りし事是なり。或る日耶蘇ガリラヤの海邊に坐せしに、多くの人々彼に集まり來りければ、耶蘇舟に登りて坐し、凡の人々は岸に立てり。耶蘇譬を以て多端の言を人々に語りぬ。種まく者播きに出でしが、播けるとき路の傍に遺ちし種あり、空の鳥來りて啄み盡せり。また土うすき磽地に遺ちし種あり。直ちに萠出でたれど、日の出でし時灼れしかば根なきが故に枯れたり。又棘の中に遺ちし種あり、棘そだ

ちて之を蔽げり。また沃壤に遺ちし種あり、實を結べること或は百倍或は六十倍或は三十倍せり。耳ありて聽ゆる者は聽くべしと。多くかかる種類の譬喩を以て教を爲し、特に其説明を弟子に與へたる時もありき。

紀元第二十七年も終りに近づき耶蘇例に依り舟に登りて湖岸の衆人に多くの譬喩談を爲せし日の夕暮、弟子に向ふの岸に濟れと曰ひければ、弟子等衆人を歸らせ、耶蘇の舟にありしを其まま之と偕に濟れり。又他の小舟もともに往けり。時に颶風おこり浪うちこみて殆ど舟に滿つ。耶蘇艄のかたに枕して寢ねたりしが弟子かれの目を醒して曰ひけるは、師よ我儕が溺るるをも顧み給はざるか、耶蘇起きて風を斥め、且海に靜りて穩に爲れと曰ひければ風やみて大に和ぎたり。斯くて彼等に曰ひけるは何故かく懼るるや爾曹何ぞ信無きやと。耶蘇之よりガリラヤ湖東なるガダラ人の地に往き暫し止まり、再び舟にてカペナウムに歸りしに大勢の人々佇望て之を喜び接へぬ。耶蘇は海に近く居れり。會堂の宰（此職は安息日の禮拜及一週間内の政治上の事務をも兼ね治むる一市に於ける長老にして又市長の如き業務を執るものなり）なるヤイロと云ふもの年齢凡そ十二歳なる一人娘を有せしが今病みて瀕死なりければ、來り耶蘇の足下に伏して其家に來り給はんことを求ひぬ。耶蘇之に應じて往く時、衆人これに擁あへり。婦あり十二年血漏を患ひ醫者の爲に其所有を盡く耗しけれど、誰にも痊され得ざりしが、耶蘇の後に來りて其衣の裾に捫りければ、直ちに血の漏る事止りぬ。耶蘇曰ひけるは、我に捫る者は誰ぞや、衆人はみな特に捫れる者なしと曰へり。ペテロ及偕に在者ども曰ひけるは、師よ衆人なんぢに擁擠せまるに我に捫る者は誰ぞと曰ひ給ふ乎。耶蘇曰ひけるは我に捫るものあり、能の我身より出るを覺ゆればなり。その婦自ら隱せぬを知り、戰慄來りて前に伏し、捫りし故と、其直ちに愈えたることを衆人の前に告ぐ。耶蘇曰ひけるは女よ心安かれ、爾の信爾を救へり、安然にして往け。かく言へる時、會堂の宰の家より、人來りて宰に言ひけるは、爾が女早や死にたり、師を勞はす勿れ、耶蘇之を聞き答へて宰に曰ひけるは、懼るる勿れ唯信

せよ。女は痊べし。耶蘇家に入るにペテロ、ヤコブ、ヨハネ及び女の父母の外誰にも偕に入ることを許さざりき。衆人みな女の爲に哭哀しみしかば耶蘇曰ひけるは哭くなかれ、死にたるに非ず、寢ねたる耳、彼等其死にたるを知れば之を笑へり。耶蘇女の手をとり女起よと呼び曰ひければ女忽ち起きたり。耶蘇命じて食物を予へしかば父母は駭異きぬ。是れ耶蘇の死者を甦らしし第二回なり。

紀元第二十八年の一月となりぬ。耶蘇カペナウムを去りて再び故郷ナザレを訪ひぬ。前には弟子を携へずして單身訪問したりしが、此度は弟子を携へて堂々と訪問しぬ。安息日に及びければ會堂にて敎を始めぬ。然るに衆人其說敎を聞き、奇しみ曰ひけるは如何にして此人に斯の如き事あるか、誰より此智慧を授けられて如此不思議なる事をも其手より行すか、彼は木匠に非ずや、マリアの子、ヤコブ、ヨセ、ユダとシモンの兄弟にして其姉妹も此處に我儕と共に在るに非ずやと、遂に人々彼を解する能はざりき。耶蘇此處にては患ふ者に手を按け、ただ數人を醫しし外不思議なる事を行さざりき。これより又ガリラヤ巡敎の途に上りぬ。是れ第四回ガリラヤ巡回なり。かくて紀元第二十八年も三月となりぬ。

此時いと痛ましき事こそ起りぬれ。こはバプテスマの約翰の斬罪に處せられたる事なり、約翰は去年三月ヘロデヤの怨を買ひて牢獄に投せられしが、ヘロデ王は約翰を義しく且つ善なる人と知りて、彼を牢獄に置きながらも、尙ほ彼を敬ひ、彼を保護し、彼に聞きて多くの事を行ひ、且喜びて彼に聽く事をせり。然るに三月の初つかた、ヘロデその誕生の日を祝ふ事ありて、もろ〳〵の大臣千人の長及びガリラヤの尊き人々に饗宴を爲せしが、飲食の興も漸く盡きたる時、ヘロデヤの先夫の女名をサロメと呼び、年十八歲許なるが來りて席上に舞を爲せしが其舞の姿如何にも優美にしてヘロデ王の心に適ひければ、ヘロデは醉の紛れに言を發して曰く、何にても我に願へ、爾が望むところは我爾に與ふべし。又いふ、凡そ爾が求むるものは我が領分の半に至るとも爾に與へんと誓ふ。女出でて其母に

何を求ふべき乎と曰ひければ母乃ちバプテスマの約翰が首と曰へり。女直に急ぎ王に來り、求うて約翰が首を盆に載せて即時に我に賜へと曰ふ。王甚だ憂へけれども、既に誓ひたると同席の者の故とを以て之を拒む事能はず、王直にヨハネの首を携來れと命じて兵卒を遣はしければ、彼ゆきて獄に於て之を斬り、其首を盆にのせ携來りて女に與ふ。女は之を其母に與へたり。約翰の弟子等此事を聞きて來り、其屍を取りて墓に葬りぬ。ヘロデ王は心ならずも約翰を殺害し、之より心中常に恐怖を懷きたりと云ふ、然もありなん。

此頃耶蘇十二使徒をして諸方に傳道に赴かしむ、此度は耶蘇と偕ならずして弟子のみ行ける也。而して二人づつ遣はされたり。耶蘇十二の弟子を召集め、凡ての惡鬼を出し、病を醫す能力と權威とを賜け、また神の國を宣傳へ、病者を醫させん爲に彼等を遣はさんとして曰ひけるは、

『異邦の途に往くなかれ、又サマリヤ人の邑にも入る勿れ、惟イスラエルの家の迷へる羊に往け。往きて天國近きに在りと宣傳へよ。病の者を醫し、癩病を潔くし、死たる者を甦へらせ、鬼を追出すことをせよ。爾曹價なしに受けたれば亦價なしに施すべし。爾曹金または銀または錢を貯へ帶る勿れ。行囊二の裏衣履杖も亦然り。そは工人の其食物を得るは宜なり。凡そ鄉邑に至らば其中の好人を訪ねて出るまでは其處に留まれ、人の家に入らば其平安を問へ、其家若し平安を得べきものならば、爾曹の願ふ平安は其家に至らん。若し平安を受くべからざるものならば爾曹の願ふ平安は爾曹に歸るべし。若し爾曹を接けず、爾曹の言を聽ざる者あらば、其家または其邑を去るとき足の塵を拂へ、われ誠に爾曹に告げん、審判の日到らばソドムとゴモラの地は此邑よりも却て易からん。（ソドム及びゴモラの兩地は昔時罪惡に滿ちたりし爲め神罰として天火に燒き滅されし市邑なり）

われ爾曹を遣はすは羊を狼の中に入るるが如し、故に蛇の如く智く、鴿の如く馴良かれ、愼みて人に戒心せよ。蓋は人爾曹を集議所に解し、又其會堂にて鞭つ

べければ也。又わが緣故によりて侯伯及び王の前に曳るべし。是彼等と異邦人に證をなさんが爲なり。人なんぢらを解さば如何に何を言んと思ひ煩ふ勿れ、其時言ふべき事は爾曹に賜るべし。是なんぢら自ら言ふに非ず、爾曹の父の靈其衷にありて言ふなり。兄弟は兄弟を死に付し、父は子を付し、子は兩親を訴へ、且つこれを殺さしむべし、又爾曹我名の爲に凡ての人に憎まれん。然れど終りまで忍ぶ者は救はるべし。この邑にて人なんぢを責めなば他の邑に逃れよ、我まことに爾曹に告げん。爾曹イスラエルの諸邑を廻り盡さざる間に人の子は來るべし。弟子は師より優らず、僕は主より優らざる也。弟子は其師の如く、僕は其主の如くならば足りぬべし。若人主を呼びてベルゼブルと云はば況して其家の者をや。

是故に彼等を懼るること勿れ、そは掩れて露れざる者なく、隱れて知れざる者無ければ也。爾曹幽暗に於て語し事は光明に聞こゆべし。耳をつけて言ひしことは屋の上に宣播がるべし。身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るる勿れ、唯なんぢら魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ。二羽の雀は一錢にて售るに非ずや、然るに爾曹の父の許なくば其一羽も地に隕つる事有らじ。爾曹の頭の髮又皆數へらる。故に懼るる勿れ、爾曹は多くの雀よりも勝れり。然れば凡そ人の前に我を識ると言はん者を、我も亦天に在す我父の前に之を識ると言はん。人の前に我を識らずと言はん者を我も亦天に在す我父の前に之を識らずと言ふべし。

地に泰平を出さん爲に我來れりと意ふ勿れ、泰平を出さんとに非ず、刃を出さん爲に來れり。夫わが來るは人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、媳を其姑に背かせんが爲なり。人の敵は其家の者なるべし。我よりも父母を愛しむ者は我に協はざる者なり。我よりも子女を愛しむ者は我に協ざるものなり。その十字架を任りて我に從はざるものも我に協はざるもの也。その生命を得る者は之を失ひ、我が爲に生命を失ふものは之を得べし。爾曹を接くる者は我を接くる也また我を接くる者は我を遣はしし者を接くるなり。豫言者なるを以てその豫言者を接くる

者は豫言者の報賞をうけ、義人なるを以てその義人を接くる者は義人の報賞を受く、わが弟子なるをもて小き一人の者に冷かなる水一杯にても飲する者は誠に爾曹に告げん、必ず其報賞を失はじ。』

と、是を聽きたる弟子等は喜び勇み立ちて、六方に出で行き、偏く鄕邑を巡り、福音を宣傳へ且つ病を醫したれば、耶蘇の名聲益々揚れり。使徒の一人はヘロデの居城なるリビアスの邊にも赴きて頻に耶蘇の行しし事を宣傳へければ、其事へロデ王の耳にも入りぬ。ヘロデは己が淫慾の爲に心ならずもヨハネを殺して良心の尤鋭く、常に恐怖を懷きたる折からなれば、此耶蘇てふ者は畢竟己が殺したるヨハネが蘇生し來れる者なるが故にかく不思議なる事を行ふに非ずやと思ひ、耶蘇に會ひたき者なりと云ひぬ。

第四章　五千人を養ふより構廬節前まで

使徒たち歸り來りて耶蘇に其行し事共を復命しぬ。正に此時バプテスマの約翰の弟子達、師横死の報知を耶蘇に齎しぬ。此時耶蘇群衆に擁され、多忙にして食事を取る遑も無き有樣なりければ、暫休息せんとて、弟子をして舟を艤せしめ竊かにガリラヤ湖を渡り、北岸なるベテサイダ東方の野に赴きぬ。然ど耶蘇に熱狂せる群衆は早くも耶蘇の行く方を探知し、歩行にて馳せてベテサイダに赴き、耶蘇を待てり。時逾越の節に近かりければ（第二十八年の四月となりぬ）之に參せんとて諸方より此處に來合せたる人々も多く、群衆の數男の大人のみにて五千人と註せられぬ。耶蘇山に上り、弟子と共に其處に坐し、目を擧げて多くの人を見るに、彼等は牧者無き羊の如き者なるによりて之を憫み、許多の事を敎へ、神の國の事を語り、又病る者を癒しぬ。時すでに暮景になりければ、其弟子彼に來り曰ひけ

るは此處は寂寥ところにして時もはや遲し、衆人の食ふべき物無きが故に、其自ら四周の鄕村に往きて宿をとりパンを市んが爲めに彼等を去らしめ給へ、耶蘇答へけるは爾曹之に食を供へよ。弟子彼に曰ひけるは、我儕ゆきて銀二百のパンを市ひ彼等に食はしむべきか、耶蘇彼等に曰ひけるはパンは幾何ある往きて視よ、彼等五のパンと二の魚ありと答へぬ。耶蘇山を下り衆人を組々にして靑草の上に坐しめよと命じければ、或は百人或は五十人づつ列び坐せり。耶蘇其五つのパンと二の魚をとり、天を仰ぎ謝してパンをとり、弟子に與へて人々の前に陳しむ。又二の魚を每人に分け與へぬ。衆人皆食ひて飽き、其パンと魚の餘屑を拾ひしに、十二の筐に滿ちたり。パンを食ひたる男約五千人なりき。人々耶蘇の行し業を見て此は誠に世に來るべき豫言者なりと曰ふ。是に於て耶蘇彼等が來り己を執りて王に爲さんとするを知り、弟子等を强ひて舟に乘せ先づカペナウムに歸らしめ、己れは衆人を歸らせて後唯獨にて再び山に入り神に祈り居れり、日の暮るる頃弟子海に下りて舟に乘り、カペナウムに向ひて海を濟る、既に暮れけれども耶蘇彼等に就らず、狂風吹くに因りて漸に海荒れ出し、一里十町許漕ぎ出せる時既に曉の四時頃となりぬ。此時耶蘇海の上を步みて之に至りしに、弟子其海の上を步めるを見て驚き、此は變化の物ならんと曰ひて懼れ叫びたり。耶蘇頓て彼等に曰ひけるは、心安かれ我なり懼るる勿れ。ペテロ答へて曰ひけるは、主よ若し爾ならば我に命じ、水を履みて爾の所に至らしめよ。來れと言給ひければ、ペテロ舟より下て耶蘇の許に至らんとて浪の上を步みたれど、風の烈しきを見て懼れ沈みかかりければ、主よ我を救けたまへと曰ふ。耶蘇頓て手を伸べ之を執へて曰ひけるは、信仰薄きものよ何ぞ疑ふや。偕に舟に登りければ風靜まりぬ。舟に居し者近よりて彼を拜し、曰ひけるは誠に爾は神の子なり。舟は即てカペナウムに著きぬ。

基督ガリラヤに傳道する事茲に滿一年今やガリラヤ人の崇拜の中心となりぬ。耶蘇をエルサレムに携へ行きて王となし、かの憎むべき羅馬人を逐拂ひ、ユダヤ國

をして羅馬に代りて世界を支配せしめんと言ふは當時のガリラヤ人の一般に唱ふる所なりき。然れど基督の世に來りしは彼等の政治上の夢想に滿足を與へん爲ならずして、彼等に更に大なる幸福即ち永生を與へん爲なりき。彼等が會堂に入りてカペイダより歸れる日は會堂禮拜の日（月曜若くは木曜）なりき。基督は會堂に入りてカペナウムの會堂に於ける最後の説教を試みぬ。而して基督の眞面目を露出して曰く、

『我は生命のパンなり。我に就る者は饑ず、我を信ずる者は恒に渴く事なし。然ど我爾曹が我を見ても信せざる事を爾曹に告げたりき。凡て父の我に賜へし者は我に就らん、我に就る者は我必ず之を棄ず、わが天より降りしは己の心の任を行はん爲に非ず、我を遣はしし者の意のままを行はん爲なり。凡て父の我に賜へし者をわれ一をも失はず末日に之を甦らすは即ち我を遣はしし父の意なり。凡そ子を見て之を信ずる者は永生を得、われ復これを末の日に甦らすべし。是われを遣はしし者の意なればなり。』

と、是に於てユダヤ人等耶蘇の我は天より降りしパンなりと言ひしとに就き、譏きいひけるは、彼が父母は我儕の識るところならずや、即ち彼はヨセフの子耶蘇にあらずや、然るに何ぞ我は天より降りしと言ふやと。又弟子の中にも、此は甚だしき言なり、誰か能くこれを聽かんやとて耶蘇の許を去りし者多く、然しも大なりし群衆も耶蘇を見限りて、一人二人と逃げゆきて遂に耶蘇の傍に十二使徒の外誰をも見ざるに至りぬ。實にも轉變の世なるかな、耶蘇が一場の説教に急轉直下昨の繁盛は今の寂寞と變じぬ。春の花一夜の嵐に散り行く哀は此日しみ〴〵と耶蘇の感ずる所なりしならん。是に因て耶蘇十二の弟子に曰けるは、爾曹も亦去んと意ふや。ペテロ聲に應じて答へけるは、主よ我儕は誰に往んや、永生の言葉を有てる者は爾なり、又われら信じて知る爾は活る神の子基督なりと。他の十一使徒も亦之に同意せしならん、實に殘る一朶の紅に春の哀は一しほ深かりき。

ナザレの豫言者ペテサイダの野に於て奇蹟を行ひ、一時に五千人の大衆を養ひ

衆人崇拜の中心となり、今や將に王たらんとすとの注進エルサレムに達するや、エルサレムの學者とパリサイの人々とは大に驚き、是由々しき大事なりと代表者をガリラヤに降して、事の顛末を調査し、且つ一擊を耶蘇に加へしめんとす。代表者急行來り見れば耶蘇の人望地に落ちて落莫たり、而も尙ほ使徒の一團の彼に追隨するあり、捲土重來の恐れ無きを得ず、即ち仔細に彼等の一行の動靜を探るに、弟子の中に潔らざる手即ち盥ざる手にてパンを食する者あるを見て、之を責めぬ。蓋し、パリサイの人とユダヤの人々はみな古の人の遺傳を守りて其手を潔くあらはざれば食せず、市より歸來りて盥はざれば亦食せず、此ほか杯椀鍋及び牀を洗ふなど、多端の遺傳を受け守れり。是に於てエルサレムより來れる學者とパリサイ人等耶蘇を詰りて曰く、爾の弟子は何故に古の人の遺傳に遵はずして盥はざる手を以てパンを食するか、耶蘇答へて彼等に曰けるは、爾曹は人の遺傳を守らんとて能も神の誡を棄る者なり、モーセ曰ひけるは爾の父母を敬へ又父或は母を詈る者は殺さるべしと、然れど爾曹は曰ふ、もし人父或は母に對ひて爾を養ふべきものは禮物なりと曰はば事へずとも可と、而して人の其父或は母の爲に何をも行る事を爾曹許さず、斯爾曹は其敎ふる所の遺傳を以て神の道を廢うす。又多く此類の事を行ふ。耶蘇斯く言ひて人々を召て彼等に曰ひけるは、聽きて悟れ、口に入る者は人を汚さず口より出づるものは是人を汚す也。弟子來りて耶蘇に曰ひけるは、パリサイの人此言を聞きて厭ひ棄るを爾知るかと。耶蘇答へて曰ひけるは、我天の父の植ゑざる者はみな拔るべし彼等を棄ておけ。瞽者の手引する瞽者なり。若し瞽者のもの瞽者の手引せば二人とも溝に落つべしと。エルサレムの學者とパリサイの人々とは抗言する能はず沈默して去りたるが、之より彼等と耶蘇との間柄は一層險惡となりぬ。

紀元第二十八年も五月となりぬ。ユダヤにては早夏の色濃く、北方の涼陰も尋ねらるる頃なり。耶蘇は特別の目的を有てる十二使徒を特別に訓練せんとて十二

使徒のみを携へ之より外國旅行の首途に上りぬ。旅行中彼の教訓は何なりしか、固より異風異俗を見聞して智見を開發するは、其重なる目的の一なりしならんも、耶蘇の教訓として特に記すべきは、新なる方面の教訓を始めたる事也。即ち、從來は專ら神の國の事につきて語りたるが、此度は神の國の王即ち救主それ自身、即ち基督自らの使命に就て語り始めたる事是也。彼等の一行はガリラヤの海邊を去りて、遙か北方に向ひぬ。道は崎嶇たる高原を過ぎ、レバノン山の雪を冠れる峰の見ゆる邊より左に折るれば、樹木の鬱生する溪谷を通りて一の平原に達す、黄色なる海岸の砂原は細長く連なりて山と海とを分てり。此處に島の如く陸地の海の中に突出でたるに建てるはツロの市にてガリラヤより二日路なり。北の方を見渡せばシドンの市も近くに見え、その硝子工場の煙突、ツロの染料を煮る釜の煙突と雜り林立する態、或は世界の商品を入れ置く倉庫の長く列れる光景、其他大いなる屋敷や、紀念碑や、公役所、宮殿、殿堂及び千船百船の寄り集へる港など、彼等の眼には如何に物珍かなりけん。一行はツロ近き或る家に棲み、力めて人に知られざらん事を願ひしが遂に隱れ得ざりき、そは惡鬼に憑れたる幼き娘を有てる婦耶蘇の事を聞きて來り其足下に伏たるに因りてなり。此婦は希臘語を語るカナン人なりしが、惡鬼を其娘より追出さんことを耶蘇に願へり。耶蘇彼に曰ひけるは、イスラエルの家の迷へる羊の外に我は遣はされず。婦拜して曰ひけるは、主よ我を助け給へ、答へけるは兒女のパンを取りて犬に投與ふるは宜しからず、婦言ひけるは、主よ然り然れども犬もその主人の膳より落る屑を食ふなり。遂に耶蘇答へて曰ひけるは、婦よ爾の信仰は大なり、願の如く爾に成るべし。此時より其女愈えたり。一行は之より北シドンに赴き、東に折れて山地を通り、更に南に折れてガリラヤ湖東を南下しデカポリス（ガリラヤ湖の南東地方）の地に入る。此處は希臘風の地にして其言語は希臘語なりき。此處にて耶蘇は種々の醫しを爲し、又彼等に追隨し來れる人々の饑うるを悲しみ、四千人の人にパンを與へたり。而

てしガリラヤ湖南のダルマヌタの地に來れり。此處にて耶蘇は珍しき人に出會へり。即ちサドカイ派の人々とパリサイ派の人々と共になりて耶蘇に天より遣はされたる證據を見せよと迫りぬ。平生仲惡しき此兩派の提携して耶蘇に當れるこそ面白けれ、然れど耶蘇は正面に之に應せざりき。

是より耶蘇の一行は舟に乘り、北の方ベテサイダに向ひぬ。舟中にてパリサイとサドカイの敎に迷はさるる無き樣にとの耶蘇の注意深き敎訓あり、ベテサイダに著きては瞽者の目を啓き、それより上ヨルダン河の溪谷に沿ひ北上してカイザリヤ・ピリピの方に到りし時、耶蘇弟子に問うて曰ひけるは、人々は人の子を誰と言ふや。彼等いひけるは或人はバプテスマのヨハネ或人は豫言者の一人なりと言へり。彼等に曰ひけるは、爾曹は我を言ひて誰とするか。彼得答ふ、爾は救主活ける神の子なり。耶蘇答へて彼に曰ひけるは、シモン爾は福なり、蓋血肉爾に示せるに非ず、天に在す吾父なり、我又爾に告ん爾はペテロなり、我が敎會を此磐の上に建べし陰府の門は之に勝つべからず。又天國の鑰を爾に與へん爾が地に於て繫ぐことは天に於ても繫ぎ、爾が地に於て釋くことは天に於ても釋くべしと。遂に其弟子を戒めけるは、我を救世主と人に告ぐること勿れ。

此時より耶蘇その弟子に己のエルサレムに往きて長老祭司の長學者等より多の苦みを受けかつ殺され第三日に甦へる等なすべき事を示し始む是彼が受難を豫告せる最初なり。彼得耶蘇を援きとめて主よ宜らず、此事爾に來るまじと曰ひければ、耶蘇反顧りて彼得に曰ひ給ひけるは惡魔よ我が後に退け爾は我に礙く者なり。夫爾は神の事を思はず、人の事を思へり。此時耶蘇其弟子に曰ひけるは若し我に從はんと欲ふものは己を棄てて我に從へ、そは生命を保全せんとする者は之を失ひ我爲に其生命を失ふ者は之を得べければ也。若人全世界を得るとも其生命を失はば何の益あらんや、また人何を以て其生命に易んや。それ我は父の榮光を以て其使等と偕に來らん。其時各の行に由て報ゆべし。誠に爾曹に告げん、我我が

國を以て來るを見るまでは此に立つものの中に死を味はぬ者あるべし。

六日の後耶蘇彼得、ヤコブ、約翰を伴ひ人を避けて祈せんとて海拔九千餘尺なるヘルモン山に登り給ひしが、彼等の前にて祈れる時其容貌かはり、其衣輝き、白きこと甚だしくして雪の如く、世上の布漂も斯白くは爲能はざるべく思はる。時に古人なるエリヤとモーセと共に現れて耶蘇と語りぬ。エリヤは豫言者の代表者、モーセは律法の代表なり、其話題は耶蘇のエルサレムにて世を逝んとする事を語る。彼得及び偕に在りしもの等いたく寢りたりしが、已に醒て耶蘇の榮光また偕に立てる二人を見たり。この二人の耶蘇と別るる時、彼得耶蘇に曰ひけるは、師よ此に居るは善し、我等に三の廬を建らせ給へ一は爾の爲、一はモーセの爲、一はエリヤの爲にせん、此はその言ふところを知らざりしなり。斯く言へる時雲來りて彼等を蓋へり、其雲に入りし時弟子達懼れて倒れ伏しぬ。聲あり雲より出でて曰ひけるは此は我が愛子なり之に聽くべしと、是天の父なる神の聲なり。聲止みたる時、耶蘇來り彼等に手を接け、起よ懼るる勿れと曰ひければ、其目を擧げしに惟耶蘇一人を見たり、弟子たち口を緘て見たりし事を當時は誰にも告げざりき。

彼等山を下りて多くの人の居るところに來りしに、或人耶蘇の許に來り跪づき、曰ひけるは、主よ我子を憫みたまへ、癲癇にて屢々火に倒れ、水に倒れ、甚だ苦しめり、之を爾の弟子に携往きたれど醫す事を得ざりき。耶蘇答へて曰ひけるは噫信なき曲れる世なる哉、われ何時まで爾曹と偕に居んや、我何時まで爾曹を忍ばんや、彼を我が許に携來れ。遂に耶蘇鬼を斥め給へば鬼出でて其子この時より愈えたり。其時弟子竊に耶蘇に來り曰ひけるは、我らこれを逐出すこと能はざりしは何故ぞ。耶蘇彼等に曰ひけるは、爾曹信無きが故なり。我まことに爾曹に告げん、若し芥種の如き信あれば、此山に此處より彼處に移れと命ふとも必ず移らん。又爾曹に能はざること無るべし。

彼等此處を去りガリラヤを周ぐれる時、耶蘇彼等に曰ひけるは、我は人の手に解され、且つ殺されて第三日に甦へるべしと。是耶蘇が受難を豫告せる第二回なり。其時弟子達この言を曉らず、亦問ふことを恐れたり。偖耶蘇カペナウムに至り、室に居りて弟子に問ひけるは、爾曹途にて何を互に論せしや。弟子默然たり。是れ途にて互に論じ、誰か大ならんとの爭ひありければ也。耶蘇座して其十二を召び彼等に曰ひけるは若首たらんと欲ふ者は凡ての人の後となり、且すべての人の使役とならん。又嬰兒を召び彼等の中に立てて曰ひけるは、我寔に爾曹に告げん、若し改まりて嬰兒の如くならずば、天國に入ることを得じ。然れば凡そこの嬰兒の如く自ら謙だる者はこれ天國に於て大なる者なり。爾曹此小き子の一人をも慎みて輕視る勿れ我爾曹に告げん、彼等が天の使は天にありて天に在す吾が父の面を常に觀ればなり。それ我は亡たる者を救はん爲に來れり。爾曹如何に意ふや、人若し百匹の羊あらんに其一匹迷はば、九十九を山に置き行て迷ひし一を尋ねざる乎、若尋ねて之に遇はば我誠に爾曹に告げん、迷はざる九十九の者よりも尙ほその一を喜ばん。是の如くこの小き子の一人の亡るは天に在す爾曹が父の尊旨にあらず、若し兄弟爾に罪を犯さばその獨ある時に往きて諫めよ。もし爾の言を聽かばその兄弟を獲べし。もし聽かずば兩三人の口に由りて證を爲し、凡ての事を定めん爲に一人二人を伴ひ往け若し彼等にも聽かずば敎會に告げよ、もし敎會に聽かずば之を異邦人かつ稅吏の如き者とすべし。我誠に爾曹に告げん、凡そ爾曹が地に於て繫ぐ事は天に於ても繫ぎ、爾曹が地に於て釋く事は天に於ても釋くべし。我又爾曹に告げん若し爾曹の中二人のもの地に於て心を合せて何事にても求めば天に在す吾父は彼等の爲に之を成し給ふべし。蓋はわが名の爲に二三人の集まれる處には我も其中に在ればなり。厥時彼得耶蘇に曰ひけるは、主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯すを赦すべきか七次までか。耶蘇彼に曰ひけるは、爾に七次とは言じ、七次を七十倍せよ。是故に天國は王其臣と會計を調べんとする

が如し。調べ始めし時、千萬金の負債したる者を王に曳き來りしに、償ひ方なかりければ、之に命じて其身その妻孥とあらゆる所有をみな賣りて償へと曰へり。其臣俯伏し拜し曰ひけるは請ふわれを寛くし給はば皆償ふべし。是に於て其臣の主憐みて之を釋きその負債を免したり。其臣出でて己より銀一百の負債したる友に遇ひければ、之を執へ喉をとり負債を返せと曰ふ。その友足下に俯伏て求ひいひけるは我を寛くし給はば皆償ふべし。然るに之を肯はずして往き、その負債を償ふまで彼を獄に入れぬ。外の友その爲せる事を見て甚だ哀み往きて此事を皆その主に告げしかば主かれを召びて曰ひけるは惡き臣よ、爾われに求しに因りて我その負債を悉く免したり。我爾を憐みし如く爾も亦友を憐むべきに非ずや、その主怒りて負債をみな償ふまで彼を獄吏に付せり。若おの〳〵其心より兄弟を赦さずばわが天の父も亦爾曹に此の如く行し給ふべし。ヨハネ耶蘇に曰ひけるは、師よ我儕に從がはざる者の爾の名に托りて惡鬼を逐出せるを見しが、我儕に從はざるが故にこれを禁めたり。耶蘇曰ひけるは、其人を禁むる勿れ、蓋はわが名により異能を行ひて輕々しく我を誹り得る者はあらじ、我儕に敵はざる者は我儕に屬く者なり。

紀元第二十八年五月耶蘇及使徒の一行がガリラヤの海邊を辭し、遠くツロ、シドンの境に赴きしより、外國旅行及ガリラヤ周遊に數ケ月を費し、今や涼風そよぐ十月近くになりぬ。十月はエルサレムに構廬の節の行はるる時なり。此節筵はユダヤ國民の先祖が埃及を逃るる時四十年間アラビヤの荒野にさまよひ、構廬を爲したるを記念する祭にして收穫の感謝を兼ねて八日間繼續し國民の最も喜びてエルサレムに集る祭也。是に於て耶蘇の兄弟彼に曰ひけるは爾の行ふ所の事を弟子達に見せんが爲此を去りてユダヤに往け、蓋は己を顯はさんとして隱に事をなす者あらず、爾これらの事を行はば己を世に顯せよ。是當時耶蘇の態度は世を忍びつつあるが如くなりければ也。耶蘇彼等に曰ひけるは我時未だ至らず、爾曹の

時は恒に備はれり、世は爾曹を惡むこと能はず、我を惡む、そは彼等が行ふ所は惡しと我證すればなり。爾曹この節に上れ、我時未だ至らざれば我今此節に上らじ、かく言ひてガリラヤに留れり。その兄弟の往きし後、耶蘇も明然ならずして隱に節に上りぬ。此行實に耶蘇が此世に於て最後の別をガリラヤに告げたる也。耶蘇はエルサレムに赴く巡禮者の群を避け、身邊には唯使徒の一團をのみ從へつつサマリヤの路を通りてエルサレムに赴かんとしぬ。而して使者等を先に遣はしければ、彼等ゆきて耶蘇に備へんが爲にサマリヤ人の鄕に入りしに、鄕人そのエルサレムに向ひ行くさまなるを見て耶蘇を納けざりき。弟子のヤコブ、ヨハネ此事を見て曰ひけるは、主よ我儕エリヤの行し如く天より火を召降し彼等を滅さんとす可か。耶蘇顧みて之を責め曰ひけるは、爾曹の心如何なるかを自ら知らざる也。我は人の命を滅す爲に來らず、惟之を救ふ爲なり。遂に他の鄕に往けり、而してペレアとサマリヤの境ヨルダンの溪谷の邊を南下してエリコに出づる道を取りたるが如し。此時二三の出來事ありき。ある村に入し時、十人の癩病ありて、彼にあひ、遙に立ちて聲を揚げいひけるは、師耶蘇よ我儕を矜恤み給へ。耶蘇之を見て曰ひけるは、往きて己を祭司に見せよ。彼等行く中に潔られたり。その一人己が醫されたるを見て返り來り、大聲に神を榮め、耶蘇の足下に俯伏て謝せり。彼はサマリヤ人なり。耶蘇答へて曰ひけるは、潔められしものは十人にあらずや、其九人は何處に在るか、この異邦人の外に神に榮を歸せんとて返りたる者あらざる乎。又彼に曰ひけるは、起ちて往け、爾の信仰爾を救へり。路を行く時、或人耶蘇に曰ひけるは主よ何處に往き給ふとも我從はん、耶蘇彼に曰ひけるは、狐は穴あり天空の鳥は巢あり、然れども我は枕する所なし。又ある一人曰ひけるは主よ爾に從はん、先づゆきて家の人に別を告ぐることを容せ。耶蘇曰ひけるは、手を鋤に著けて後を顧る者は神の國に當はざる者也。

第五章　構廬節中の說教

當時耶蘇の名聲益々ユダヤ國に廣まり、人の集る所耶蘇の噂の出でざる事無かりき。構廬節にもユダヤ人耶蘇を尋ねて曰ひけるは、彼は何處に在るや、衆多の中にて彼に就き各樣の事を言爭へり。或人は彼を善人なりと云ひ、或人は否民を惑はす者なりと曰ふ。かかりければ、却てユダヤ人の學者祭司等は益々耶蘇を殺さんと謀れり。節筵の半頃耶蘇殿に上りて敎誨ければ、ユダヤ人之を奇み曰ひけるは、此人は未だ學ばず、如何にして書を識るや、耶蘇彼等に答へて曰ひけるは我敎ふる所は我が敎に非ず、我を遣はしし者の敎なり、人若し我を遣はしし者の旨に從はば此敎の神より出づるか又己に由て言ふなるかを知るべし。モーセ爾曹に律法を與へしに非ずや然れど爾曹の中には之を守る者なし。爾曹何故に我を殺さんと謀るや、爾曹割禮を安息日に行ふ、人若しモーセの律法を破らざらん爲に安息日に割禮を受くる時は何ぞ我安息日に人の全身を愈しし事を怒るや。外貌によりて審判する勿れ、義き審判をもて審判せよ。此時エルサレムの或人曰ひけるは、此は人々の殺さんと謀る者に非ずや、今彼明かにいふ而して之を尤むる者なし、有司等は彼を誠に救主なりと思ふなるか、然ど我儕は此人の何處より來りしかを知る、若し救主ならば、誰も其何處より來るかを知る者無らん。此時耶蘇殿にて敎へ居りしが大聲に呼び言ひけるは、爾曹我を知り、又我いづこより來るかを知るといふ。然れど我は己に由りて來りしに非ず、我を遣はしし者は誠なる者にて爾曹の知ざる所なり。我は彼を知る、そは我は彼より出で彼は我を遣はしし者なれば也。是に於て祭司の長とパリサイの人等耶蘇を捕へんと謀れり。民の中多くの人彼を信じ曰ひけるは、救主の來らん時、その行す所の業此人より多からんや。パリサイの人民等の耶蘇に就て如此竊に語りあふを聞き、乃ち祭司の長等とパリサイの人と彼を執へんとて下吏を遣はせり。是に於て耶蘇曰ひけるは我尙

ほ片時爾曹と共に居り而して後我を遣はしし者に往ん、爾曹我を尋ぬるとも遇べからず、我をる所へ爾曹來る事能はざるべし、ユダヤ人相互に曰ひけるは我儕の遇ざる爲に彼は何處へ往んとする乎、希臘に散りし者に往きて希臘の人を敎へんとする乎。構盧節は安息日に始りて安息日に終るものなるが節筵の末の安息日に耶蘇立て呼はり曰ひけるは、人若し渴かば我に來りて飲め我を信ずる者は其腹より活る水川の如くに流れ出づべし。如此いへるは、彼を信ずる者の受けんとする神の靈を指るなり。民の中にて多の人この言を聞きて、此は誠に彼の豫言者なりと曰ひ、或は斯は救主なりと曰ひ、或は救主はガリラヤより出づべけんや、聖書に救主はダビデの裔にてダビデの住し鄕ベテレヘムより出でんと錄ししに非ずやと曰ふ。是に於て民ども彼に緣きて爭ひ別れたり。その中に彼を執へんとする者も有りけれど、措手せしもの無りき。先に耶蘇を執へんとて遣はされたる下吏等、手を空しくして祭司の長とパリサイの人等の所に返りければ、彼等下吏に言ひけるは何故彼を曳き來らざる乎。下吏答へて曰ひけるは未だ斯人の如く言ひし人あらず。パリサイの人言ひけるは爾曹も亦惑はされし乎。有司又パリサイの人の中に彼を信ずる者あらんや、彼を信ずる群衆は律法を識ざる者にして呪はれたる者ならずや。此時より二年半前耶蘇逾越の節にエルサレムに上りし時夜竊に耶蘇を訪ね來りしニコデモと云へる者、彼等に曰ひけるは、其人に聽かず其行ひを知らざる先に之を審判くは我儕の律法ならんや。彼等答へて曰ひけるは、爾も亦ガリラヤより出でし者なるか、考ね見よ豫言者はガリラヤより出づる事なし。是に於て各人家に歸れり。

此時耶蘇エルサレムの東方なる橄欖山に宿り給ひしが、昧爽又聖殿に入りけるが民皆彼に來りければ坐りて彼等を敎ふ。爰に奸淫を爲せる時執へられし婦ありけるが、學者とパリサイの人これを耶蘇の所に曳來り群衆の中に置き言ひけるは師よ此婦は奸淫し居る時その儘執へられし者なり、此の如き者を石にて擊殺すべ

しとモーセ律法の中に命じたり。爾は如何に言ふや、如斯言へるは耶蘇を試みて訟への由を引出さんと欲へるなり。耶蘇身を屈め指にて地に畫けり。彼等が切に問ふにより、耶蘇起ちて之に曰ひけるは爾曹の中罪無き者まづ彼を石にて擊つべしと曰ひ、又身を屈めて地に畫けり。彼等これを聞きて其良心に責められ、老者をはじめ少き者まで一々に出で往き、ただ耶蘇と婦とのみ殘りぬ。耶蘇起ちて婦に曰ひけるは婦よ爾を訟へし者は何處へ往きしや、爾の罪を定むる者なき乎。婦言ひけるは、主よ誰もなし。耶蘇彼に曰ひけるは、我も爾の罪を定めじ、往きて再び罪を犯す勿れ。

今しも東方より射し始めたる朝日の光を指さしつつ耶蘇語りて曰ひけるは、我は世の光なり。我に從ふ者は暗中を行かず、生の光を得るなり。耶蘇此言を殿の賽錢の箱を置ける處にて語りけれど彼の時未だ至らざれば誰も手を出す者無かりき。耶蘇また彼等に曰ひけるは、爾曹は下より出で、われは上より出づ、爾曹は此世より出で、我は此世より出でず、爾曹若し我の世の救主なるを信ぜずば己の罪に死ん。爾曹我を十字架に懸けし後我の世の救主なるを知り、又我が自ら何事をも行ず惟天なる我父の神の教に從ひて此等の事を言へるを知るべし。我を遣はしし者我と共にあり、蓋は我恒に彼の心に適ふ事を行へば也。耶蘇此事を言へる時、多の人彼を信せり。耶蘇己を信ぜしユダヤ人に曰ひけるは、爾曹もし我が言葉を信じ之を實行せば誠に我が弟子なり、かつ眞理を知らん、眞理は爾曹に自由を得さすべし。

耶蘇己を信せざるユダヤ人に言ひけるは、爾曹は惡魔の子なり。彼等曰ひけるは、我儕は神の子なり、耶蘇彼らに曰ひけるは爾曹若し神の子ならば爾曹我を愛すべし。我は神より出で來たればなり。夫我は己に由りて來るに非ず、神我を遣はし給へる也。爾曹何ぞ我言ふ言を解せざるか。爾曹己が父なる惡魔より出で、また其父の慾を行ふ事を欲む、惡魔は始より人を殺す者なり。又誠に居らず、蓋

は彼の中に誠無ければ也。かれが詐を言ふ時は己より出して言ふなり蓋は彼は詐者また詐者の父なれば也。われ誠に實に爾曹に告ん、人若し我道を守らば窮なく死を視ざるべし。ユダヤ人彼に曰ひけるは今我等は爾が鬼に憑れたる者なるを知る、國祖アブラハム既に數千年前に死に又豫言者も死り、然るに爾言ふ人若し我が言葉を守らば窮なく死なじと爾は我らの先祖アブラハムよりも優れる者ならんや。耶蘇彼等に曰ひけるは誠に實に爾曹に告げん我はアブラハムの有ざりし先より在る者なり。是に於て衆人彼を擊たんとて石を取り、耶蘇隱れて其中を過り、殿を出で行けり。

耶蘇行く時、生來なる瞽者を見しが、その弟子彼に問ひて曰ひけるは師よ、此人の瞽者に生れしは誰の罪なるか、己に由るか、又二親に由るか。耶蘇答へけるは此人の罪に非ず、亦その二親の罪にも非ず、彼に由て神の作爲の顯はれんため也。此事を言ひて地に唾し、唾にて土を和き、その泥を瞽者の目に塗り彼に曰ひけるはシロアムの池に往きて洗へ彼すなはち往きて洗ひ、目見ることを得て歸れり。人々言ひけるは此は坐りて物を乞ひし盲目ならずや、或人は彼なりと曰ひ、或人は似たるなりといふ。彼言ひけるは我は彼なり。彼等言ひけるは爾の目は如何にして啓たる乎。答へて曰ひけるは耶蘇といふ人土を和きわが目に塗りて曰ふ、シロアムの池に往きて洗へと、我往きて洗ひければ目見ることを得たり。人々彼に言ひけるは彼は何處に在るや答へて知らずと曰ふ。彼らこの瞽目なりし者をパリサイの人の所に携詣れり。土を和て耶蘇彼が目を啓けし日は安息日なりき。或パリサイの人いひけるは此人安息日を守らざるが故に神より出でしにあらず、或人いひけるは罪人如何で斯る奇蹟を行ふ事を得んや。是に於て彼等爭ひ別れたり。パリサイ人等瞽者なりしものに曰ひけるは、榮を神に歸せよ我儕は彼耶蘇の罪人なるを知る。瞽者なりし者答へけるは罪人なるや否われ之を知ず、我は瞽者なりしが、今目明になれる此一事を知る。彼等又曰ひけるは彼は爾に何を行しや、如

何にして爾の目を啓けしや。答へけるは我すでに爾曹に言ひしに爾曹きかず、何故再び聞かんとする乎、爾曹も其弟子に爲んと欲ふや。彼等詬り曰ひけるは爾は其人の弟子我等はモーセの弟子なり。我儕この人の何處より來れるかを知らず、されどモーセは神の言を受けたる人なり。其人答へけるは此は奇しき事なり、神は罪人に聽かず、然れど神を敬ひて其旨に遵ふ者には聽き給ふと我儕は知る。世の元始より以來うまれつきなる瞽者の目を啓けし人あるを聞かず。若し此人神より出でずば斯る事を爲し得んや。彼等答へて曰ひけるは爾は盡く罪に生れしものなるに反つて我儕を教ふるか、遂に彼を逐出せり。彼等が逐ひ出しし事を聞き耶蘇尋ねて之に遇ひいひけるは、爾神の子を信ずる乎。答へて曰ひけるは主よ彼として我が信ずべき者は誰なる乎。耶蘇曰ひけるは今爾と言ふ者はそれなり。主よ我信ずと曰ひて彼を拜せり。耶蘇また彼等に曰ひけるは、我は門なり、若人我より入らば救はれ且つ草を得べし。我來るは羊をして生を得且つ豐ならしめん爲なり。我は善牧者なり。善牧者は羊の爲に命を捐つ、牧者にあらず己が羊を持ず只やとはれて羊を守る者は狼の來るを見れば羊を棄てて逃ぐ。狼羊を奪ひて之を散す、雇人の逃るは傭れし者なれば其羊を顧はざるに因りてなり。我は善き牧者にて己の羊を識り、又己の羊に識らる恰も父の我を識り我又父を識るが如し。われ羊の爲に命を捐てん。我は此牢にあらざる別の羊を有てり（こはユダヤ國人以外の世界の諸國人を指すなり）。彼等をも引來らん彼らわが聲を聽かん、遂に一の群一の牧者となるべし。わが父われを愛す、蓋はわれ再び命を得ん爲に命を捐つるが故なり。我より之を奪ふものなし、我自ら之を捐つるなり。我之を捐つる權能あり亦よく之を得る權能あり。我が父より我この命令を受けたり。偖この言によりて復ユダヤ人の中に爭ひ起りたり。多の者いひけるは鬼に憑れて狂ふ者なるに何ぞ彼に聽くや。又或人言ひけるは、是れ鬼に憑れし者の言に非ず、鬼は瞽目の眼を啓くる事を能くせんや。

第六章　七十人傳道より修殿節まで

此後耶蘇はヘロデの都リビアスのありしベレアに赴き、教を爲さんとし給ひしが、自ら至らんとする諸邑諸地へ前に遣はさんとて七十人を立て之を兩個づつに分ち、之に先に十二人を遣はしたる時に爲したると略同樣なる訓誨を加へて遣はしたり。七十人傳道に成功し喜び返りて曰ひけるは、主よ惡鬼さへも爾の名に因て我儕に服せりと。耶蘇曰ひけるは我爾曹に蛇蠍を踐み、また敵の諸の權を制ふる權威を賜けたり。必ず爾曹を害ふ者なし。然れども惡鬼の爾曹に服しし事は喜とする勿れ、爾曹が名の天に錄されしを喜とすべし。耶蘇また弟子を顧みて竊に曰ひけるは、爾曹が見るところの事を見る其目は福なり。我爾曹に告げん、多の豫言者及び王も爾曹が見るところの事を見んとせしかど見ず、爾曹が聞くところの事を聞かんとせしかども聞ざりき。爰に一人の教法師あり、起ちて彼を試み曰ひけるは、師よ我何を爲さば永生を受くべき乎。耶蘇曰ひけるは、律法に錄されしは何ぞ、爾如何に讀むか。答へて曰ひけるは、爾心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべし。亦己の如く隣を愛すべし。耶蘇曰ひけるは爾の答然り之を行はば生くべし。彼耶蘇に問ふ、己の如く隣を愛すとは如何なる事なりや。耶蘇喩を以て之を說明せり。曰く或人エルサレムよりエリコに下る時、强盜に遭へり。强盜其衣服を剝ぎ取りて其人を打擲き瀕死になして去りぬ。斯る時に或祭司此路を下りしが、之を見過しにして行けり。又祭司職補佐者たるレビの人も此に至りしが、進み見しのみにて同く過ぎ行けり。或サマリヤの人旅して此に來りしが、之を見て憫み、近よりて油と酒とを其の傷に注し、之を裹みて己が驢馬に乘せ旅邸に携往きて介抱せり。次の日出づる時、銀二枚を出し、館主に予へて此人を介抱せよ費もし增さらば我歸りの時爾に償ふべしと曰へり。然れば此三人の中誰が律法の趣意に適へりと爾意ふや。彼言ひけるは其人を

矜恤たる者なり。耶蘇曰ひけるは爾も往きて其如く爲よ。

斯かる中に年も終に近づき、寒風身に泌むに至り、十二月の末、ユダヤ人の修殿節となりぬ。耶蘇は此節にもエルサレムに赴きて教を爲さんと欲し旅路に上り、遂にエルサレムより二十七町此方にあるベタニヤに來れり、此處は先に耶蘇によりて精神を入れ代られ其感謝にと耶蘇に香膏を塗り己の頭の髮を以て耶蘇の足を拭ひしマリアの兄弟と共に棲む所なり。マリアの姉はマルタと言ひ其弟はラザロと云ひぬ。耶蘇はマリアの家に宿を取り給ひぬ。マリアは耶蘇の足下に坐りて其言を聽き居りしが、マルタは供給のこと多くして心いりみだれ耶蘇に近よりて曰ひけるは主よ我が妹我を一人勞働しむるを何とも意ざる乎、彼に命じて我を助けしめよ。耶蘇答へて曰ひけるは、マルタよマルタよ、爾多くの端により思ひ慮ひて心勞ひせり、然れど無くて叶ふまじき者は一なり。マリアは既に善き者を選びたり。此は彼より奪るべからざる者なり。

偖耶蘇修殿節に登りて殿のソロモンの廊を行きけるに、ユダヤ人彼を環圍みて曰ひけるは、我儕を幾時まで疑がはするや、爾若し救主ならば、明かに我儕に告げよ。耶蘇答へけるは、我爾曹に告げしかども爾曹信せざりし也。是爾曹は我羊に非ざれば也。我羊は我聲を聽く、我は彼等を知る、彼等我に從ひ、我彼等に永生を與ふ。彼等幾時までも亡びず、亦之を我手より奪ふもの無し。我に彼等を賜ひし我父は萬有よりも大なり。又わが父の手より之を奪ひ得るものなし、我と父とは一なり。是に於てユダヤ人石を取りて復彼を擊んとせり。耶蘇彼等に答へけるは、我父より受けて我多の善事を爾曹に示せしに、其うち何の事により て我を石にて擊んとする乎。ユダヤ人答へて曰ひけるは、『善事の爲に非ず、爾ただ褻瀆事をいひ、且爾人なるに己を神となすに因てなり。』

耶蘇答へけるは

『爾曹の律法に我いふ爾曹は神なりと錄されしに非ずや、聖書は毀るべからず、若神の命を奉けし者を神と稱んには、父の聖別ちて世に遣はしし者我は神の子なりと稱へばとて何ぞ之を褻瀆すことをいふと曰ふべけんや』。

彼等又執へんとしたりしが、耶蘇其手を脱れて去れり。斯て又ヨルダンの外なるヨハネのバプテスマを施しし所即ちペレアに再び歸りて教訓を垂れたり。

第七章　ペレア傳道

耶蘇某所にて祈禱に就て弟子等に敎へ曰ひけるは、爾曹の中若或人夜半に其友へ往て我が朋輩旅より來りしに供ふべき物無き故三つのパンを借せよと曰はんに、内に居るもの答へて我を煩はす勿れ、既や門は閉ぢ我と共に兒曹も牀に在れば、起きて與ふる能はずと曰ふものあらんや、我爾曹に告げん、其友なるにより起きて與へずとも、其强請によりて起ちて與ふべし。我爾曹に告げん求めよ然らば與へられ、尋ねよ然らばあひ、門を叩けよ然らば啓かるる事を得ん。

耶蘇或時群集の前にて說敎しけるは、惡鬼人より出で旱きたる所をめぐり、安を求むれども得ずして曰ひけるは、我出でし家に歸らん已に來りしに掃淨まり飾れるを見遂に往きて己よりも惡き七の惡鬼を携へ入て此に居まへば其人の後の狀態は前よりも更に惡かるべしと。此話を言へる時、群集の中より一婦聲を揚て曰

ひけるは爾を孕みし腹と爾の吮し乳は福なり。耶蘇答へけるは、然りされど神の言葉を聽きて其を守る者の福には若かず。數萬の人々相踐あふ程に集りし時、耶蘇先づ弟子に曰ひけるは、爾曹パリサイの人の麪酵を謹しめよ是僞善なり。夫れ掩はれて露はれざる者は無く隱れて知られざる者は無し。是故に爾曹幽暗に語りし事は光明に聞こゆべし、密なる室にて耳に附言ひし事は屋の上に播がるべし。衆人の中より一人耶蘇に曰ひけるは師よ我が兄弟に遺業を我に分てよと命ひ給へ。耶蘇衆人に曰ひけるは、戒心して貪心を慎しめよ。夫人の生命は所蓄の饒なるには因らざる也。また譬を彼等に語りて曰ひけるは或富る人其田畑よく豐りければ自ら忖ひいひけるは、我が作物を藏むる所なきを如何せん。又曰ひけるは我かく爲ん我倉を毀ち更に大なるを建てすべて我が作物と貨とを其所に藏むべし。斯て靈魂に對ひ、靈魂よ多年を過すほどの許多の貨物を有ちたれば安心して食飲樂しめと言はんとす。然るに神之に言ひけるは、無知なる者よ今夜なんぢが靈魂取らるる事あるべし然らば爾の備へし物は誰が有になる乎と。凡そ己の爲に財を積へ神に就て富ざる者は此の如きなり。

當時集りたる者の中にピラトがガリラヤ人を神の祭壇の傍らにて殺したる事を耶蘇に告ぐる者あり。耶蘇答へて彼等に曰ひけるは爾曹此ガリラヤ人は是の如く害まされし故に凡てのガリラヤ人よりも益りて罪ある者と意ふ乎、我爾曹に告げん、然ず、爾曹悔改めずば皆おなじく亡さるべし。シロアムの塔たふれて壓死されし十八人はエルサレムに住る凡の人々よりも益りて罪ある者と意ふか、われ爾曹に告げん、然ず、爾曹悔改めずば皆おなじく亡さるべし。又此の譬を云へり。或人その葡萄園に植ゑおきたる無花果樹ありしが、來りて之に果を求むれども得ざりければ、其園丁に曰ひけるは、我三年來りて此無花果樹に果を求むれども得ず、之を斫去れ、何ぞ徒に地を塞ぐや、園丁答へけるは主よ我その周圍を掘りて之に糞するまで今年も容せ、もし果を結ばば善し、若し結ばずば後に之を斫るべし。

耶蘇安息日に或會堂にて敎へしに、十八年鬼に患はされたる婦あり傴僂て少しも伸ること能はざりき。耶蘇之を見て婦をよび、婦よ爾は其病より釋さると曰ひて手を按ければ、直ちに伸て神を讃美たり。會堂の宰耶蘇の安息日に醫したる事を怒りたるに群衆は却つて會堂の宰を批難したりければ、彼群衆に曰く、事を爲すべき日六日あれば、其中に來りて醫されよ、安息日に爲ざれと、耶蘇彼に答へて曰ひけるは、僞善者よ爾曹各々安息日には其牛や驢馬をとき厩より牽出して水を飲ざる乎、況て此婦はアブラハムの裔なり、十八年惡魔に縛られたる其結を安息日に解べからざらんや。耶蘇斯く曰ひしかば敵對し者みな慚ぢぬ。又衆人みな其行しし慈惠きことを喜べり。多くの人耶蘇に來り曰ひけるはヨハネは奇蹟を爲さず、然ど耶蘇につきていひし事はみな眞なり。是に於て多の人耶蘇を信せり。

第八章　ラザロの甦生よりペレア傳道の終まで

時は進みて紀元第二十九年の二月となりぬ。是耶蘇の殺さるべき年なり。ベタニヤのラザロ甚だしく病めり。是故にその姉妹耶蘇の所に主の愛する者病りと言ひ遣せり。耶蘇之を聞きて曰ひけるは、此は死ぬる病に非ず、神の榮の爲なり。我をして之に因りて榮を得しめんが爲なり。是故に耶蘇其病るを聞きて後、ペレアに二日留り、其後弟子に曰ひけるは我儕又ユダヤに往くべし。弟子言ひけるは師よユダヤ人は近來も石を以て爾を擊んとせしに、復彼處に往き給ふか。答へけるは我殺さるべき時は未だ至らず、而して我儕の友ラザロ寢たり、我彼を醒さんが爲に往くべし。弟子其意を解する能はざりしかば、耶蘇更に明かに曰ふラザロは死ねり、爾曹をして信せしむる爲に我かしこに在ざりしを喜ぶ。然れど今彼處に往くべし。使徒の一人トマス他の弟子等に曰ひけるは我儕も亦ゆきて彼と偕に死

ぬべし。耶蘇ベタニヤに至りてラザロが既に墓に葬られて四日なるを知れり。多くのユダヤ人マルタとマリアを其兄弟の事に因りて慰めんとて既に彼等の所に來り居れり。マルタは耶蘇來給へりと聞きて之を出迎へマリアはなほ家に坐せり。マルタ耶蘇に曰ひけるは主よ此に在せしならば我兄弟は死ざりしものを、然ながら假令今にても爾が神に求むる所のものは神なんぢに賜ふと知る。耶蘇曰ひけるは爾の兄弟は甦へるべし。マルタ耶蘇に曰ひけるは彼が末の日の甦へるべき時に甦へらん事を知るなり。耶蘇彼に曰ひけるは我は復生なり生命なり我を信ずる者は死ぬるとも生べし。凡て生きて我を信ずる者は永遠も死ぬることなし、爾之を信ずるか。答へけるは主よ我信ず、爾は世に臨るべき救主神の子なり。如此言ひ竟りて潛に其妹マリアをよび師來りて爾を呼び給ふと曰ふ。マリア之をきき急ぎ起ちて耶蘇の所に來れり。耶蘇未だ村に入ず、仍マルタの迎へし所に居れり。マリアを慰めて偕に室に在りしユダヤ人マリアが急ぎ起ち出づるを見て彼は墓に往きて哭くならんと曰ひつつ彼に隨へり。マリア耶蘇の所に來り彼を見て其足下に伏しいひけるは主よ若し茲に在せしならば我が兄弟は死ざりしものを。耶蘇マリアの哭くと彼と偕に來りしユダヤ人の泣くを見て心を慟しめ身ふるひて曰ける、爾曹何處に彼を置きしや。彼等いひけるは主よ來りて觀たまへ、耶蘇涕を流したまへり。是に於てユダヤ人曰ひけるは、見よ如何ばかり彼を愛する者ぞ。その中なる人曰ひけるは、瞽者の目を啓きたる此人にして彼を死ざらしむる事能はざりしか。耶蘇また心を慟しめて墓に至る。墓は洞にて其の口の所に石を置けり。耶蘇曰ひけるは石を去けよ。死し者の兄弟マルタ曰ひけるは主よ彼ははや臭し、死てより已に四日を經たり。耶蘇彼に曰ひけるは爾若し信せば神の榮を見るべしと爾に言ひしに非ずや。遂に其石を死し者を置たる所より移去けたり。耶蘇天を仰ぎて曰ひけるは父よ已に我に聽けり、我之を爾に謝す、我なんぢが常に我に聽くことを知る、然るに我が斯く言ふは傍に立てる人をして爾の我を遣はし事を信

せしめんとて也。如此いひて大聲に呼びいひけるはラザロよ出でよ。死者布にて手足を縛られ、面は手布にて裹れて出づ。是れ耶蘇が死者を甦へらしし第三回也。耶蘇彼等に曰ひけるは、彼を釋きて行かしめよ。マリアと共に來りしユダヤ人耶蘇の爲し事を見て多く彼を信せり。然れども其中にパリサイの人に往きて耶蘇の行し事を告げし者あり。是に於て祭司の長とパリサイの人と議員を呼び集めて曰ひけるは、我儕如何にすべきか、此人多くの奇蹟を爲すなり。若し彼を此儘に棄て置かば、人皆彼を信せん。然れば羅馬の人來りて我儕の地をも民をも奪ふべし。

祭司の長なるカヤバと云へる者彼等に曰けるは爾曹何をも知らず、又民の爲に一人死て擧國ほろびざるは我儕の益たる事をも思はざる也。偖此日よりして彼等耶蘇を殺さんと共に議る。此故に耶蘇此より顯にユダヤ人の中を行かず、其處を去りてエルサレムの東北十四哩許なるエフライムと云ふ邑に往きて弟子と共に留まれり。

紀元第二十九年も三月となりぬ耶蘇は其最後の運命に遭はんと心に決する所あり。決然としてエルサレムに向つて旅だてり。然れど尚行すべき事、敎ふべき事の多數殘れるあり、而して其死すべき逾越の節までには尚ほ餘日あれば、エフライムより直接にエルサレムに引返さずして、先づ東ヨルダン河を越えて再びペレアの地に入り、諸邑諸鄕に敎を爲し三日間茲に費しそれよりユダの境に入り尚ほ諸地にて敎へつつエルサレムに赴かん計畫を爲せり。先づペレアに下りしに、或人いひけるは主よ救はるる者は少き乎、耶蘇彼等に曰ひけるは窄き門に入るために力を盡せ、我爾曹に告げん、入らん事を求めて能はざる者多し、爾曹アブラハム其他の先祖及び凡ての豫言者は神の國に在りて爾曹は外に投出さるるを見ん時に哀哭切齒すること有るべし。また人々西や東北や南より來りて神の國に坐するならん。それ後の者は先に先の者は後に爲るべし。當日或パリサイの人々來りて耶蘇に曰ひけるはヘロデ爾を殺さんとする故に此を離往け。答へて曰ひけるは、

爾曹其狐に告げよ、我此地にありて今日明日惡鬼を逐出し、病を醫し、第三日に此事終らん、此三日を我必ず此處に費し、然る後此地を去らん。豫言者はエルサレムの外に於て殺さるる事無ければ安心なりと。此事を言ひし後耶蘇歎じて曰ひ給はく、噫エルサレムよエルサレムよ豫言者を殺し爾に遣はされし者を石にて擊てる者よ。母鷄の雛を翼の下に集むる如く我爾の赤子を集めんと爲しこと幾回ぞや、爾曹は欲まず、視よ爾曹の家は墟となりて遺さるべし。誠に我爾曹に告げん、主の名に託りて來る者は福なりと爾曹言はん時到るまでは我を見ざるべし。

耶蘇安息日に食事の爲パリサイ派中有力者の一人の家に入りしに、人々彼を窺ひたり。其前に腹脹を患ひたる人ありしかば、耶蘇敎法師とパリサイの人々に問うて曰ひけるは安息日に醫す事は宜や否、彼等默然たり。耶蘇かの人を執へ醫して之を去らしめり。斯て其席に請かれたる人々の首席を擇ぶを見て耶蘇譬を以て彼等に曰ひけるは、なんぢ婚筵に請かれん時、首席に坐すること勿れ、恐くは爾より尊き人まねかれなば、彼と爾を請きし者來りて此人に座を讓れと曰ん。然らは爾羞ぢて末座に往くべし、是故に爾招かれん時は往きて末座に坐せよ。請きし者來りて友よ首座に進めと爾に言はば同席の者の前に爾尊まるべし、凡そ自ら高ぶる者は卑され、自ら卑だる者は高くせらるべし。又彼を請ける者に曰ひけるは、爾午餐或は晩餐を設くる時、朋友兄弟親類また富る隣の人を請くなかれ、恐くは彼等また爾を請きて其報答を爲さん、爾筵を爲さば貧乏、癈疾、跛者、瞽者などを請け、然ば爾福なるべし。蓋は彼等は爾に報ゆること能はず、義しき人々の甦へらん其時爾に報答あれば也。同に食せる者の一人之を聞きて耶蘇に曰ひけるは、神の國に食する者は幸福なり。耶蘇彼に曰ひけるは、或る人大なる筵を設けて多實を請けり。筵の時、僕を其請きたる者に遣はして百物はや備りたれば來るべしと言はせけるに、彼等みな同く辭りぬ。其始の者彼に曰ひけるは我田地を買ひたれば往きて視ざるを得ず、願はくは我を允し給へ、又一人のものいひけるは我五耦の牛を買

ひたれば之を試むる爲に往ん願くは我を允したまへ、又一人の者いひけるは我妻を娶りたり、是故に往くことを得ざる也。其僕かへりて此事を主人に告げければ、主人怒りて其の僕に曰ひけるは速かに邑の衢巷に往きて貧しき者、癈疾、跛者、瞽者などを此に引來れ、僕曰ひけるは主よ命の如く行り、然れど尙あまりの座あり。主人僕に曰ひけるは、道路や藩籬の邊にゆき强ひて人々を引來り我が家に盈しめよ、我なんぢらに告げん彼の招きたる人々は一人だに我餐を嘗ふ者なし。多くの人々耶蘇と共に行きしが、耶蘇顧みて彼等に曰ひけるは、凡そ我に來りてその父母妻子兄弟姉妹また己の生命をも憎む者に非れば我が弟子と爲ることを得ず。又其十字架を任ずして我に從ふ者は我が弟子と爲ることを得ず、爾曹誰か城を築かんに、先づ坐して其費その事の竣るまでに足るや否やを計らざらんや、恐くは臺を置ゑて之を成能はずば見る者みな嘲笑ひて此人は築き始けて成遂げざりしと曰ん。また王出でて他の王と戰はんに先坐して此一萬人をもて彼が二萬人に敵すべきや否を籌らざらんやもし及かずば敵尙ほ遠れる時に使を遣はして和睦を求むべし。然れば此の如く爾曹其所有を盡く捨てざる者は我が弟子と爲ることを得ず。鹽は善物なり、然れども鹽その味を失はば何を以て之に味を和けんや。田にも糞にも益なく外に棄てらるるなり、耳ありて聽こゆる者は聽くべし。さて稅吏と罪ある者共耶蘇に聽かんとて近よりければ、パリサイの人と學者達譏誚きて曰ひけるは、此人は罪ある人に接はりて共に食せり。耶蘇此譬を彼等に語りて曰ひけるは爾曹の中誰か一百の羊あらんに若その一を失はば九十九を野におき、往きて其失ひし羊を獲るまでは尋ねざらんや。尋ね得ば喜びて之を己が肩に負け家に歸りて其の友と其隣の人々を召集て曰ん我と共に喜べ我失へる羊を獲たれば也、われ爾曹に告げん。此の如く一人の罪ある人悔改めなば、悔改むるに及ばざる九十九の義人よりも尙ほ天に於て喜びあらん。又婦の中誰か金錢十枚をもち、其一枚を失はんに燈火を燃して家を掃除し之を獲るまでは切に尋ねざらんや、尋ね得ば其友と

其隣の人々を召集て曰ん、我と共に喜べ、我が失ひし金錢を獲たれば也。われ爾曹に告げん、此の如く一人の罪ある人悔改めなば神の使の前に喜びあるべし。又曰ひけるは或人子二人あり。その季子父に曰ひけるは父よ我得べき財産を我に分與へよ。父其財産を彼等に分ちたれば、幾日も過ざるに季子その財産を盡く集て遠國へ旅行せしが、放蕩にして其分資を皆そこにて耗せり。盡く耗しし時、大なる饑饉その地に有りて彼乏しく爲り始めければ、往きて其地の一民に身を投せたり。其人豕を牧ふために彼を野に遣はせり彼豕の食する所の豆莢をもて己が腹を果さんと欲ふ程なれど何をも彼に與ふる人なし、自ら省悟て曰ひけるは、我父の所には食物あまれる傭人の許多か有るに我は飢ゑて死なんとす、起ちて我父に往きて曰はん、父よ我天と爾の前に罪を犯したれば、爾の子と稱ふるに足ざる者なり。爾の傭人の一人の如く我を爲し給へと。即ち起ちて其父に往けり。尚遠くありしに、其父彼を見て憫み趨り往きて其頸を抱きて接吻しぬ。子父に言ひけるは、父よ我天と爾の前に罪を犯したれば爾の子と稱ふるに足ざる也。父其僕等に曰ひけるは、至も美服を携來りて之に衣せ其指に環をはめ、其足に履を穿せよ、また肥たる犢を牽來りて宰れ我儕食して樂まん。是わが子死て復生き、失ひて復得たれば也とて彼等と共に樂み始む。其兄田にありしが、歸りて家に近づき、樂と舞の音を聞き、その僕の一人を召びて是何事ぞやと問へるに、僕曰ひけるは爾の弟歸りたり。恙無く彼を得たりしに因りて爾が父肥えたる犢を宰りたるなり。兄怒りて入ず。是故に其父いでて彼に勸めしかば、父に答へて曰ひけるは、我多年爾に事へて未だ爾の命に背かず、然ども我が友と樂しむ爲に羔をも予へし事なし、然るに妓の爲に爾の財産を耗したる此なんぢが子歸れば、之が爲に肥たる犢を宰れり。父彼に曰ひけるは子よ爾は常に我と共に在り、また我が所有は皆爾が屬なり、爾の弟死て復生き失ひて復得たるが故に我儕喜びて樂しむは當然の事なり。

耶蘇また人の恒に祈禱して沮喪すまじき爲に譬を彼等に語りけるは、或邑に神

を畏ず、人を敬はざる裁判人ありけるが、其邑に嫠婦ありて我を我仇より救ひ給へと曰ひて彼に至りしに、彼久く肯はざりしかど、其後心の中に思ひけるは我神を畏ず、人をも敬はざれども此婦われを煩はせば彼が絶ず來りて我を聒さざる爲に之を救はん。耶蘇言ひけるは不義なる裁判人の言ひし事を聽け、況て神は晝夜祈る所の人を久く忍ぶとも終に救はざらんや。又みづから義と意ひ人を輕しむる或人に耶蘇此譬を語れり。二人祈らんとて殿に登りしが、其一人はパリサイの人、一人は稅吏なりき。パリサイの人たちて自ら如此祈れり。神よ我は他の人の如く强索、不義、姦淫せず、亦此稅吏の如くにも有ざるを謝す。われ七日間に二次斷食し、又すべて獲る者の十分の一を献げたり。稅吏は遠に立ちて天をも仰ぎ見ず、其胸を拊ちて神よ罪人なる我を憐みたまへと曰へり。我なんぢらに告げん。此人は彼人よりは義とせられて家に歸りたり。夫れすべて自己を高ぶる者は卑られ、自己を卑だす者は高げらるべし。

第九章　最後のエルサレム行

さる程に耶蘇豫定の三日をペレアに送り、此等の敎を了りし時、ペレアより移りてヨルダン河の此方なるユダヤの地方に入りけるに多くの人々從ひしかば此處にて彼等を醫し給へり。時にパリサイの人等耶蘇に來りて試み曰ひけるは、人何の故に係はらず其妻を出すは宜きか、答へて彼等に言ひけるは、元始に人を造りし神は之を男女に造れり。是故に人父母を離れて其妻に合ひ、二人のもの一體となるなりと云へるを未だ讀まざる乎、然ば早や二には非ず一體なり。神の合せ給へる者は人之を離すべからず。耶蘇に曰ひけるは然ば離緣狀を予へて妻を出せとモーセが命せしは何ぞや。彼等に曰ひけるはモーセは爾曹の心の不情に因りて妻を出すことを容したる也。されど元始は如此あらざりき。我爾曹に告げん、若し姦淫の故ならで其妻を出し他の婦を娶る者は姦淫を行ふなり、又出されたる婦を

娶る者も姦淫を行ふなり。弟子達耶蘇に曰ひけるは若人妻に於て此の如くならば娶らざるに若かず。彼等に曰ひけるは、此言は人皆受納ること能はず唯賦けられたる者のみ之を爲し得べし。

耶蘇に撫られ祝福を受けん爲に人々孩提を携來りければ、弟子たち其携來れる者を責めたり、耶蘇之を見て怒を含み彼等に曰けるは孩提を我に來せよ、彼等を禁むる勿れ。神の國に居る者は斯の如き者なり。誠に我爾曹に告げん凡そ孩提の如くに神の國を承けざる者は之に入る事を得ざる也。即ち彼等を抱きて手をその上に按せこれを祝せり。

耶蘇途に出けるに一人走り來りて跪づき、問ひけるは、善師よ我永生を嗣ためにに何を行すべき乎、耶蘇彼に曰ひけるは何ぞ我を善と稱や、一人の外に善者は無し即ち神なり。誠は爾が識るところなり。姦淫する勿れ殺す勿れ盜む勿れ妄の證を立る勿れ、拐騙るなかれ、爾の父と母とを敬へ、答へて曰ひけるは師よ是れ皆我が幼きより守れるもの也。耶蘇彼を見て愛しみ曰ひけるは、爾なほ一を虧くゆきて其所有を賣り貧き者に施せ、然らば天に於て財あらん。而して來りて我に從へ。彼此言によりて哀み憂ひて去りぬ。彼は大なる產業を有てる者なればなり。耶蘇環視して其弟子に曰ひけるは財を有てる者の神の國に入るは如何に難いかな。弟子此言を駭けり。耶蘇答へて彼等に曰ひけるは小子よ財を恃む者の神の國に入るは如何に難いかな。富る者の神の國に入よりは駱駝の針の孔を穿るは却つて易し。弟子等最く駭き互に曰ひけるは、然らば誰か救を受くべき乎。耶蘇彼等を見て曰ひけるは、是人には能はざる所なれど神に於ては然らず、神は能はざる所無ければ也。是に於て彼得彼に曰ひけるは、我儕一切を捨てて爾に從へり。耶蘇答へて曰ひけるは誠に爾曹に告げん我が福音の爲に家宅或は兄弟或は姉妹、或は父或は母或は妻或は兒女或は田疇を捨つる者は此の世にて百倍を受けざる者なし、即ち家宅兄弟姉妹、母、兒女、田疇を迫害と共に受け、また後の世には窮な

き生を受けん。されど多くの先なる者は後になり、後なる者は先になるべし。

さて彼等エルサレムに上る途間耶蘇弟子に先ち行きければ、彼等駭き且つ畏れて從へり。是耶蘇の死に就かんとする決心の自から外形に表はれたる爲ならん。耶蘇人を離れ十二人の使徒を召びて將に己に及ばんとする事を彼等に告げ給ひけるは、我儕エルサレムに上り、我は祭司と學者等に付されん、彼等われを死罪に定め異邦人に付し、又之を嘲弄し、鞭ち唾し、且つ之を殺さん。斯て第三日に甦へるべし。弟子此語を少しも達らず、亦この言へる事彼等に隱れたり。耶蘇が己が受難につきて豫告せし第三回なり。

ヤコブと約翰耶蘇に來りて曰ふ、師よ我儕が求むる事を願はくは我儕に成給へ。彼等に曰ひけるは爾曹に我が何を成さん事を欲ふか。彼等いふ、爾榮を得ん時、我儕の一人を其右に一人を其左に坐せしめよ。耶蘇彼等に曰ひけるは爾曹は求ふ所を知らず、爾曹わが飲む所の杯を飲みわが受くる所のバプテスマを受け得るか。彼等曰ひけるは能くすべし。耶蘇彼等に曰ひけるは、爾曹は實に我が飲む所の杯を飲みまた我が受くる所のバプテスマを受くべし、然れど我が右左に坐する事は我が與ふべきにあらず、唯備へられたる者は與へらるべし。十人の弟子之を聞きてヤコブと約翰を憤れり。耶蘇彼等を召びて曰ひけるは、異邦人の君と見ゆる者は其民を治め、又大なる者どもは彼等の上に權を執る。是れ爾曹が知る所也。然れど爾曹の中にては然すべからず。爾曹の中大ならんと欲ふ者は爾曹に役はるる者とならん。又爾曹の中首たらんと欲ふ者は凡て人の僕とならん。蓋は我の此世に來るも人を役ふ爲に非ず、反つて人に役はれ、且多くの人に代り其生命を予へて贖ひとならん爲なり。

耶蘇エリコに近よれる時、ある瞽者道の傍に坐して乞ひ居たりしが、大衆の過ぐるを聞きて此は何事ぞと云ひければ、人々ナザレの耶蘇の過ぐるなりと告ぐ。瞽者呼ばはりて曰ひけるはダビデの裔耶蘇よ我を恤み給へ、多くの人々これに緘默と

戒めけれども、愈々呼ばはりて、ダビデの裔よ我を恤み給へと曰ひければ、耶蘇立止まりて彼を召べと命じければ、人々瞽者を召びて彼に曰ひけるは心を安せよ、起て、耶蘇爾を召ぶ。瞽者其表衣を棄てたちて耶蘇に來れり。耶蘇彼に曰ひけるは爾我に何を爲られんと欲ふや。瞽者いふ主よ見えなん事を欲ふ。耶蘇彼に曰ふ往け爾の信仰なんぢを救へり。直ちに彼見ゆることを得耶蘇に從ひて路を行けり。

耶蘇エリコに入て經行く時、ザアカイと云へる人あり。稅吏の長にて富る者なり。耶蘇は如何なる人なるか見んと欲へども、身量低ければ大衆なるに因りて見る事を得ず。彼を見んとて趨り往き桑樹に昇れり。耶蘇其道を過らんとする故なり。耶蘇此に來り仰ぎて彼を見言ひけるは、ザアカイよ速ざ下れ。我今日必ず爾の家に宿らん。彼急ぎ下り喜びて耶蘇を迎へたり。衆人之を見て怨言いひけるは、彼は往きて罪ある人の客となれり。ザアカイ起ちて主よ我所有の半を貧しき者に施さん。若しわれ誣訟へて人より收りたる所あらば四倍にして之を償ふべし。耶蘇彼に言ひけるは、今日この家救はるることを得たり。蓋は此人もアブラハムの裔なれば也。それ我は喪ひし者を尋ねて救はん爲に來れり。耶蘇此事を言ひし後衆人に先だちてエルサレム指して上れり。

さて紀元第二十九年三月も末になりてユダヤ人の逾越の節近づきければ、人々己を潔めんが爲に節の前に鄕間よりエルサレムに來り耶蘇を尋ね殿に立ちて相互に曰ひけるは、如何に意ふや、彼は節筵に來らざる乎。祭司の長等とパリサイの人と已に令を出して若耶蘇の所在を知る人あらば告ぐべしと云ふ。こは彼を執へんとする也。

第十章　受難週

逾越の節（當年の逾越の節は金曜の夕に始まり翌週の金曜に終れり）の五日前（日曜日）耶蘇ベタニヤに至る、此處は即ち死にて甦へりしラザロの在る所なり。茲に耶蘇の此世に於ける最後の週は來りぬ。其夜或人々この處にて耶蘇に筵席を設けぬ。マルタ給仕を爲り。ラザロも耶蘇と共に坐せる者のうちの一人なり。宴中にしてマリア蠟石の盒に價高きナルドの香膏を盛りて携來り、耶蘇の頭に膏を沃ぎ又足に塗り己が頭髪にて其足を拭へり膏の香偏く家の中に滿てり。人々互に怒を含み言ひけるは、此膏を糜すは何故ぞや、之を賣らば三百有餘のデナリ（九十圓以上）を得て貧しき者に施す事を得んと此婦を言ひ咎む。耶蘇曰ひけるは彼に係はる勿れ、何ぞ此婦を擾すや、我に善事を行へる也。貧しき者は常に爾曹と共に在れば爾曹意に隨せて彼等を濟くる事を得べし。我は常に爾曹と共に在ず、此婦は力を盡して作り、蓋あらかじめ我を葬る爲、わが身に膏を沃ぎしなり。我誠に爾曹に告げん、天の下いづくにても此福音の宣傳へらるる處には此婦の行し事も亦その記念の爲に言ひ傳へらるべしと。多くのユダヤ人耶蘇が此に在るを知りて來る、特に耶蘇の爲のみに非ず、亦その死より甦へらしし所のラザロをも見んと欲へるなり。祭司の長等ラザロをも殺さんと謀る、蓋はラザロの故によりて多くの人耶蘇を信ずるが故也。

明れば月曜、今の四月十四日に相當す。此日耶蘇はダビデの裔イスラエルの王としての堂々たる入城をなしぬ。多くの人々耶蘇のエルサレムに來らんとするを聞き、棧櫚の葉を取ゆきて彼を迎へ、萬歲主の名に託りて來るイスラエルの王は福なりと呼はれり。耶蘇驢馬の子を得て之に乘る豫言者の言に視よ爾の王は柔和にして驢馬の子に乘りなんぢに來るとシオンの女に告げよと云へるに應へり。衆人多くは其衣を途に布き、或は樹枝を伐りて途に布き、かつ前に行き後に從ひ、ダビデの裔萬歲と呼べり。大衆の中より或パリサイの人耶蘇に曰ひけるは師よ爾

の弟子を責めよ。彼等に答へけるは我爾曹に告げん、此輩若し默止なば石號呼ぶべし。既に近づける時耶蘇城中を見て之が爲に哭きいひけるは若し爾だにも今その爾の日に於て爾の平安に關はれる事を知らば福なるに今なんぢの目に隱れたり爾の敵なんぢの周邊に壘を築き四方より圍攻め爾と其中なる兒女を擊滅し石をも石の上に遺さざる日來らん是なんぢ其眷顧たまふの時を知らざれば也と。耶蘇エルサレムに至れる時都城擧りて搖動ちいひけるは是誰ぞや衆人言ひけるは是はガリラヤのナザレより出でたる豫言者なり彼はラザロを墓の中より甦らしめたりと。是に於てパリサイの人互に言ひけるは、爾曹が謀る所の益無きを知ずや見よ世は皆彼に從へり。此日耶蘇は聖殿に入りて悉く見廻し、時すでに暮に及びければ、十二と偕にベタニヤに出で往けり。

翌火曜(十五日)彼等ベタニヤより出し時耶蘇饑ゑたり。遙に葉ある無花果の樹を見て其樹に何かあらんとて來りしに葉の外何も見ざりき。耶蘇此樹に對ひて今より後永久も爾の果を食ふ人あらざれと云ふ。弟子之を聞けり。彼等エルサレムに至り、耶蘇殿に入て其中に居る賣買する者を殿より逐出し、兌銀する者の案、鴿を賣る者の椅子を倒し、彼等に諭へて曰ひけるは、我室は萬國の人の祈禱の室と稱へらるべしと錄されしに非ずや、然るに爾曹は之を盜賊の巢と爲り。瞽者跛者の人々殿に入りて耶蘇に來りければ之を醫しぬ。祭司の長と學者等其行し給へる奇事を見又兒童輩の殿にて呼はりダビデの裔萬歳と云ふを聞きて怒を含み、耶蘇に言ひけるは彼等が言ふ事を聞くか。耶蘇答へて曰ひけるは、然り嬰兒乳哺者の口に讃美を備へたりと錄されしを未だ讀ざる乎と。學者と祭司の長如何にかして耶蘇を喪ばさんと謀りしが、彼を懼れたり、蓋は人々皆其教に駭きたれば也。日暮れて耶蘇城邑を出でベタニヤに往き其處に宿れり。

翌水曜(十六日)は耶蘇が此世に於て、公衆に對し最後の說教、攻擊、應酬を爲せし日にて、頗る多事なりしなり。朝彼等無花果の樹を過ぐる時、その根より盡

く枯たるを見る。ペテロ憶ひ出でて耶蘇に曰ひけるは、師見よ詛ひし所の無花果樹は枯れたり。耶蘇答へて彼等に曰ひけるは、神を信せよ誠に我爾曹に告げん誰にても其心に疑ふ事なく其いふ所の言は必ず成るべしと信じ、此山に移りて海に入れといはば其言の如く成るべし。是故に我爾曹に告げん、凡そ祈禱の時、その求ふ所のものは必ず得べしと信せば必ず得べし、又爾曹立ちて祈禱する時、もし人を憾むこと有らば之を免せ、蓋は天に在す爾曹の父に爾曹も亦其過を免されん爲めなり、若し爾曹免さずば、天に在す爾曹の父も亦爾曹の過を免し給はじ。

耶蘇殿に入て教へたる時、祭司の長及び民の長老たち來り曰ひけるは、何の權威を以て此事を爲すや誰がこの權威を爾に予へしや。耶蘇答へて彼等に曰ひけるは我も一言爾曹に問ん、我に其事を告なば、我も何の權威をもて之を行すか爾曹に曰ふべし。約翰のバプテスマは何處よりぞ天よりか人よりか。彼等互に論じ曰ひけるは若し天よりと曰はば然ば何故信せざるかと曰ん、若し人よりと云はば我儕民を畏る、蓋はみな約翰を豫言者とすればなり。遂に答へて知らずと云ふ。耶蘇彼等に曰ひけるは我も何の權威を以て之を行すか爾曹に語らじ。爾曹如何に意ふや或人二人の子ありしが長子に來りて曰ふ子よ今日わが葡萄園に往きて働け答へて否と曰ひしがのち悔いて往きたり。又次子にも前の如く曰ひけるに答へて我往くべしと曰ひしが遂に往かざりき。此の二人のもの孰れか父の旨に遵ひしか。彼等曰ひけるは長子なり。耶蘇彼らに曰ふ誠に爾曹に告げん稅吏および娼妓は爾曹より先に神の國に入るべし夫ヨハネ義道を以て來りしに爾曹之を信せず、稅吏娼妓は之を信じたり。

彼等耶蘇を其言葉に由りて陷いれんとしてパリサイの人とヘロデの黨の中より數人を遣せり。遣はされし者共耶蘇の所に來り曰ひけるは、師よ爾は眞なる者なり又誰にも偏らざる事を我等は知るそは貌に依て人を取ず誠を以て神の道を敎ふれば也。貢をケイザルに納むるは宜や否や、われら納むべきか、納めざるべきか。

耶蘇其實ならざるを知りて彼等に曰ひけるは何ぞ我を試むるや、貢錢を携來りて我に觀せよ。彼らデナリを携來りければ耶蘇彼等に曰ひけるは此像と號は誰か。答へてケイザルなりと曰ふ。耶蘇曰ひけるはケイザルの物はケイザルに歸し、又神の物は神に歸すべし。彼等之を奇として耶蘇を去り往けり。

耶蘇賽錢の箱に對ひて坐し、人々の錢を箱に入るるを見給ひしに多くの富める者は多く投げ入れたり。一人の貧しき嫠婦來りてレプタ二を投入たり。此は四厘ほどに當れり。耶蘇その弟子を召びて彼等に曰ひけるは誠に我爾曹に告げん箱に投入れし凡の人々よりも此貧しき嫠婦は多く投入れたり。そは彼等は皆その餘れる所をもつて入れ、此婦はその不足ところより其凡ての所有を皆入れたれば也。

禮拜のため節筵に上れる者の中にギリシヤの人あり。彼等ガリラヤのベテサイダの人なるピリポに來り求うて曰ひけるは、君よ我儕耶蘇に見えん事を欲ふ。ピリポ來りてアンデレに告ぐ、アンデレ亦ピリポと共に耶蘇に告ぐ。耶蘇彼等に答へて曰ふ、我が榮を受べき時至れり。誠に實に爾曹に告げん一粒の麥若し地に落て死なずば唯一にて存らん、若し死なば多くの實を結ぶべし。我若し地より擧げられなば萬民を引きて我に就らせん。

復生無しと曰ひなせるサドカイの人來りて耶蘇に問ひけるは、師よ我儕にモーセが書遺けるには人の兄弟もし子なくして妻を留し死ばその兄弟この妻を娶りて兄弟の裔を立べしと。爰に七人の兄弟ありしが、長子妻をめとり子なくして死に、第二の者これを娶りまた子無くして死に、第三もまた然す、七人みな之を娶りたれど子なく終には此婦も死ねり。復生の時、かれら甦へらば、此婦は誰の妻となるべきか、蓋は七人同じく之を娶りたれば也。耶蘇答へて彼等に曰ひけるは爾曹は聖書をも神の能をも知らざるに因りて謬れるならずや、それ死より甦へる時は娶らず嫁がず、天にある使者等の如し。死し者の甦へる事に就てはモーセの書棘中の篇に神かれに語りて我はアブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりと曰ひ給

ひしを爾曹は讀ざる乎、神は死にし者の神に非ず、生ける者の神なり。爾曹大いに謬れり。

耶蘇サドカイの人をして口を塞がしめたりと聞きてパリサイの人一處に集りけるが、其中なる一人の教法師耶蘇を試みん爲に問うて曰ひけるは、師よ律法の中何れの誡か大なる。耶蘇答へけるは爾心を盡し精神を盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべし是れ第一にして大なる誡なり。第二も亦これに同じ。己の如く爾の隣を愛すべし。凡の律法と豫言者は此二つの誡に依れり。教法師曰ひけるは善哉師よ爾の言葉は眞なりと。此後敢て耶蘇に問う者無かりき。

耶蘇全ての質問家を沈默せしめて、而して後、耶蘇の方より逆に彼等に質問を發して曰ひけるは爾曹救主について如何思ふか。是誰の子なるか。彼等耶蘇に曰ひけるはダビデの裔なり。彼等に曰ひけるは、然らばダビデ靈に感じて何故之を主と稱へし乎。然ればダビデ既に之を主と稱へたれば如何その子ならん乎。誰一言之に答ふること能はざりき。

厥時耶蘇人々と弟子とに告げて曰ひけるは、學者とパリサイの人はモーセの位に坐す。故に凡て彼等が爾曹に言ふ所を守りて行ふべし。然れど彼等が行ふ所を爲すこと勿れ。蓋は彼等は言ふのみにして行はざれば也。また彼等は重くかつ負ひ難き荷を括りて人の肩に負はせ己れは一の指をもて之を動すとすら好まず。彼等の行ひは凡て人に見られんが爲にする也。その佩經を幅濶し、其衣の裾を大にしまた筵席の上座會堂の高座市上の問安、人々より師よ師よと稱へられん事を好む。噫爾曹禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ蓋は爾曹天國を人の前に閉ぢて自ら入ず。且つ入らんとする者の入るをも許さざれば也。噫爾曹禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ、蓋は爾曹寡婦の家を呑み、僞はりて長き祈を爲す、之に由りて爾曹最も重き審判を受くべければ也。ああ禍なる哉僞善なる學者とパリサイの人よ、蓋は爾曹偏く水陸を歷巡り、一人をも己が宗旨に引入れ

んとす、既に引入るれば之を爾曹よりも倍したる地獄の子と爲り。噫なんぢら禍ひなるかな瞽者なる手引よ、爾曹は曰ふ人もし殿を指して誓はば事なし、殿の金を指して誓はば背くべからずと愚にして瞽者なる者よ。金と金を聖からしむる殿とは孰か尊き。又いふ人若し祭の壇を指して誓はば事無し、其上の禮物を指して誓はば背くべからずと、愚にして瞽者なる者よ、禮物と禮物を聖からしむる祭の壇とは孰か尊き。それ祭の壇を指して誓ふ者は祭の壇及び其上の凡の物を指して誓ふなり。又殿を指して誓ふ者は殿及び其中に在す者を指して誓ふなり。また天を指して誓ふ者は神の寶座及び其上に坐する者を指して誓ふなり。噫爾曹禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ。蓋は爾曹薄荷、茴香馬芹の十分の一を取納めて律法の最も重き義と仁と信とを爾曹は廢つ、是れ行ふ可もの也、かれも亦廢つべからざる者なり。瞽者なる手引よ、爾曹は蠓を漉出して駱駝を呑むもの也。噫禍なる哉僞善なる學者とパリサイの人よ爾曹杯と盤の外を潔くして內には貪欲と淫慾とを充せり、瞽者なるパリサイの人よ、爾曹まづ杯と盤の內を潔くせよ然ばその外も亦潔まるべし。噫爾曹禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ爾曹は白く塗りたる墓に似たり。外は美はしく見ゆれど、內は骸骨と諸の汚穢にて充つ。此の如く爾曹もまた外は義しく人に見れども內は僞善と不法にて充つ。噫爾曹禍ひなるかな僞善なる學者とパリサイの人よ、爾曹豫言者の墓をたて義人の碑を飾れり。又いふ我儕もし先祖の時にあらば豫言者の血を流すことに與せざりしをと。然れば爾曹は豫言者を殺しし者の裔なることを自ら證す。爾曹先祖の量を充せ、蛇蝮の類よ、爾曹いかで地獄の刑罰を免れんや。是故に我爾曹に豫言者と智者と學者を遣はさんに或は殺し又十字架に釘け或は其會堂にて之を鞭ち、或は邑より邑へ逐ひ苦しめん、そは義なるアベルの血より殿と祭の壇の間にて爾曹が殺ししバラキアの子ザカリヤの血に至るまで地に流したる義人の血は凡て爾曹に報い來らんが爲なり。我誠に爾曹に告げん此事みな此代に報い來るべ

し。

耶蘇此日數多の比喩談を爲せり。或る家の主人葡萄園を樹り、籬を環らし、其中に酒榨を掘り、塔をたて農夫に貸して他の國へ往きしが、果期近づきければ、其果を收ん爲に僕を農夫のもとに遣せり。農夫ども其僕等を執へ一人を鞭ち、一人を殺し一人を石にて擊てり。また他の僕を前よりも多く遣はしけるに之にも前の如くなせり。我子は敬ふならんと謂ひて終に其子を遣はしに農夫どもその子を見て互に曰ひけるは此は嗣子なり率これを殺して其產業をも奪るべしと即ち之を執へ葡萄園より逐出して殺せり。然れば葡萄園の主人來らん時にこの農夫に何を爲すべきか。衆人耶蘇に曰ひけるは、此等の惡人を悉く討滅し期に及びてその果を納むる他の農夫に葡萄園を貸與ふべし。

爾曹より奪ひその果を結ぶ民に與ふべし。是故に我爾曹に告げん、神の國を

耶蘇人々に多くの敎訓を爲ししかど彼等信せざりき。然れど有司等の中に多く彼を信せし者も有りしが、パリサイの人を畏れて明かに信ずると言はざりき。其會堂より黜けられん事を恐れたるに因る。是れ彼等は神の譽より人の譽を喜べるなり。

耶蘇公衆に語る事を終り、夕ぐれ聖殿より出でければ一人の弟子彼に曰ひけるは、師よ視給へ此石この殿宇如何に盛ならずや。耶蘇答へて曰ひけるは、爾曹この大なる殿宇を見るか、一の石も石の上に圮されずしては遺らじ。耶蘇都城を出でて橄欖山にて殿に對ひ坐し給ひしにペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ竊に問ひけるは、何の時此事あるか、又爾の來る兆と世の末の兆は如何我儕に告げ給へ。耶蘇曰ひけるは先づエルサレムの滅亡の事を語れば、爾曹愼みて惑さるる事なかれ、蓋は多の者わが名を冒し來り、我は救主なり時は近よれりと云はん、然れど爾曹從ふ勿れ、戰亂を聞く時懼るる勿れ、此等の事の先にあるは止むを得ざるとなり。然れど末期は未だ速かならず。又曰ひけるは民は民を責め、國は國を

攻め、各處に大なる地震饑饉、疫病おこり且恐るべき事と大なる休徵天より現はるべし、此事より先に人々爾曹を執へ苦しめ會堂及び獄に解し我名の爲に王及び侯の前に曳往くべし。然れど爾曹が此事に遭は證となるなり。故に爾曹まづ何を對へんと思意るまじき事を心に定めよ、蓋はすべて爾曹に仇する者の辯駁また敵對することを爲し得ざるべき口と智とを我爾曹に賜へん。又なんぢら父母兄弟親戚朋友等より解され、且つ爾曹の中或者は殺さるべし。爾曹わが名の爲に人々に憾まれん、然れども爾曹の首髮一縷も喪はじ、爾曹耐忍びて其生命を全うせよ。爾曹軍勢にエルサレムの圍まるを見なば其亡び近きに在ると知れ、その時ユダヤに在る者は山に逃れよエルサレムに在る者は出でよ、鄉下に在る者はエルサレムに入る勿れ。これ刑罰の日にして錄されたる事のみな應らるる日なり。其日には孕みたる者と哺乳兒ある者は禍なるかな。これ地に大なる災ありて怒此民に及ぶべければ也。人々刀刃に斃れ且捕はれて諸國に曳れ、エルサレムは異邦人の時滿つるまでは異邦人に蹂躙さるべし。（以上はエルサレムの滅亡の豫言なり。以下は此世の終末の豫言なり）耶蘇又言ひけるは此世の終末には日月星に異象あるべし。地にては諸國の人哀み海と波との瀾濤くによりて顛沛、人々危懼つつ世界に來らんとする事を俟惱むべし。是天の勢震動すべければ也。其時人々は我の權威と大なる榮光を以て雲に乘り來るを見るべし。此等の事の成り初めん時は起きて爾曹の首を翹げよ、蓋は爾曹の贖ひ近づけば也。爾曹無花果と凡の樹を見よ、既に萠せば爾曹これを見て自ら夏はは近しと知る。此の如く爾曹も此等の事成るを見ば神の國の近きを知れ。誠に我や爾曹に告げん、此事みな成るまでは此世は逝ぎざるべし。天地は廢るべし然れども我言は廢るべからず。爾曹自らを慎めよ。恐くは飲食に耽けり、世の事に累はれ、爾曹の心昏迷なりて慮よらざる時に此日なんぢらに臨まん。これ機檻の如く遍く地の上に居む者に臨むべし。是故に爾曹つつしみて此臨まんとする凡ての事を避れ、また我の前に立得る樣に常に祈れ。その日その時を知るものは唯わが父

のみ天の使者も誰も知る者なし。ノアの時の如く人の子の來るも亦然らん。それ洪水の前ノア方舟に入る日までは人々飲食嫁娶等して洪水の來り悉く之を滅すまで知らざりき。此の如く我も亦來らん。其時二人田にあらんに一人は取られ、一人は遺さるべし。二人の婦磨ひき居らんに一人はとられ一人は遺さるべし。是故に爾曹の主いづれの時來るかを知らざれば怠らずして守れ、爾曹之を知れ若し家の主人盜人何の時來るかを知らば其家を守りて破らすまじ、然れば爾曹も亦預備せよ、意はざる時に我來らんとすればなり。時に及びて糧を彼等に與へさする爲に主人がその僕等の上に立てたる忠義にして智僕は誰なるか、その主人の來らん時、かくの如く勤むるを見らるる僕は福なり。我まことに爾曹に告げん其所有を皆彼に督どらすべし、若その惡僕おのが心に我が主人の來るは遲からんと意ひその朋輩を打撻きて酒に醉たる者共と共に飲食し始めなば、その僕の主人おもはざるの日知らざるの時に來りて之を斬殺し其報いを僞善者と同うすべし。其處にて哀哭切齒すること有ん。其時天國は燈を執りて新郎を迎へに出る十人の童女に比ふべし。その中の五人は智く五人は愚なり。愚なる者は其燈をとるに油を携へざりしが、智き者は其燈火と共に油を携へたり。新郎おそかりければ皆假寢して眠れり。夜半ばに叫びて新郎きたりぬ出て迎へよと呼ぶ聲ありければ、その童女ども皆おきて其燈を整へたるに、愚なる者智き者に曰ひけるは、我儕の燈熄んとす、願はくは爾曹の油を我儕に分與へよ。智者答へて曰ひけるは我儕と爾曹とに恐くは足るまじ、爾曹賣者に往きて己が爲に買へ、彼等買はんとて往きしとき新郎來りければ、既に備へたる者は之と共に婚筵に入りしかば門は閉られたり。斯て後その餘の童女來りて曰ひけるは主よ主よ我儕の爲に開き給へ。答へて我まことに爾曹に告げん我は爾曹を知らずと曰へり。然れば怠らずして守れ爾曹其日其時を知らざれば也。又天國は或人の旅立せんとして其僕をよび所有を彼等に預くるが如し。各々の智慧に從ひて或者には銀五千或者には二千或者には一

千を與へ置き、直ちに旅立せり。五千の銀を受けし者は往きて之を貿易し他に五千を得たり。二千を受けし者も亦他に二千を得たり。然るに一千を受けし者は、往きて地を掘りその主の金を藏せり。歷久て後その僕等の主かへりて彼等と會計せしに、五千の銀を受けし者その他に五千の銀を携來りて主よ我に五千の銀を預けしが、他に五千の銀を儲けたりと曰ひければ、主彼に曰ひけるは、あゝ善かつ忠なる僕ぞ、爾寡なる事に忠なり、我爾に多き者を督らせん爾の主人の歡樂に入れよ。二千の銀を受けし者來りて主よ我に二千の銀を預けしが、他に二千の銀を儲けたりと言ひければ、主彼に曰ひけるは、あゝ善かつ忠なる僕ぞ爾寡なる事に忠なり、我爾に多きものを督らせん、爾の主人の歡樂に入れよ。また一千の銀を受けし者來りて曰ふ主よ爾は嚴しき人にて播ざる處より穫り散さざる處より歛むる事を我は知る故に我懼れてゆき主の一千の銀を地に藏し置けり。今爾なんぢの物を得たり。その主答へて曰ふ惡しくかつ惰れる僕ぞ爾わが播ざる處より穫り散さざる處より歛むるを知るか、然らば我金を兌銀舖に預け置くべきなり。然れば我が歸りたるとき本と利とを受くべし。是故に彼の一千の銀を取りて十千の銀ある者に與へよ。それ有てる者は與へられて尙あまりあり、有たぬ者はその有てる物をも奪らるる也。無益なる僕を外の幽暗に逐やれ、そこにて哀哭切齒する事あらん。

耶蘇此の世の最後の審判の有樣を譬を以て語り曰ひけるは、我わが榮光をもて諸〻の聖き使を率ゐ來る時は、その榮光の位に坐し、萬國の民を其前に集め、羊を牧ふものの綿羊と山羊とを別つが如く彼等を別ち、綿羊を其右に山羊を其左に置くべし。斯て王その右に居る者に云はん吾が父に惠まるる者よ來りて創世より以來なんぢらの爲に備へられたる國を嗣げ、蓋は爾曹我が飢ゑし時我に食せ、渴きし時我に飲せ、旅せし時われを宿らせ、裸なりし時われに衣せ、病し時我を見舞ひ、獄に在し時我に就ればなり。是に於て義き者かれに答へて曰ん、主よ何

時爾の飢ゑたるを見て食せ、又渇きたるに飲ししや、何時主の旅したるを見て宿らせ、又裸なるに衣せしや、何時主の病また獄に在るを見て爾に至りしや。王答へて彼等に曰はん、我誠に爾曹に告げん、既に爾曹わが此兄弟の最微き者の一人に行へるは即ち我に行ひしなり。遂にまた左に居る者に曰ん、罰せらるべきものよ、我を離れて惡魔と其使者の爲に備へたる熄ざる火に入れよ蓋は爾曹我が飢ゑし時我に食せず、渇きし時我に飲せず、旅せし時我を宿らせず、裸なりし時われに衣せず、病また獄に在し時われを顧はざれば也。是に於て彼等また答へて曰はん主よ何時なんぢの飢ゑ又渇き又旅し又裸また病また獄に在るを見て主に事へざりし乎、其時王答へて彼等に曰はん、我まことに爾曹に告げん、此最微き者の一人に行はざるは即ち我に行はざりし也。此等の者は窮なき刑罰に入り、義き者は窮なき命に入るべし。

偖耶蘇この諸の言を言ひ竟りて日は全く暮れぬ。其弟子に曰ひけるは、二日の後逾越の節なるは爾曹が知るところなり。それ我は十字架に釘られん爲に付さるべしと。是れ受難の豫示第四回也。此時祭司の長及民の長老等カヤパと云へる祭司の長の邸の庭に集り、詭計をもて耶蘇を執へ殺さんと共々に謀りぬ。其時十二弟子の一人イスカリオテのユダと云へる者祭司の長等の所に行きて曰ひけるは、我なんぢらに彼を賣さば幾何を與ふるか。遂に銀三十にて約したり。此時より耶蘇を賣さんと機を窺ひぬ。

明れば木曜(十七日)耶蘇明日は十字架に懸けらるべきを豫知したれば此日を以て弟子と共に最後の晩餐を取り、且は宗教上最も大切なる儀禮を遺さんと欲し、其準備を爲さしむる爲めペテロ及びヨハネをエルサレムに遣さんとして曰ひけるは、往きて我儕が食せん爲に晩餐を備へよ。彼等答へけるは、何處に之を備へんとするか。耶蘇曰ひけるは城下に入らば水を盛れる瓶を挈てる人爾曹に遇ふべし。其入る所の家に隨ひ往きて、家の主に師爾に云ふ、わが弟子と共に晩餐を食

すべき客房は何處に在るやと曰へ。然すれば彼備へたる大なる樓房を示すべし。其處に備へよ。彼等ゆきて耶蘇の曰ひ給ひたる如く遇ひしかば其處に備へせり。

日暮れて耶蘇十二の弟子と共に來り晩餐の席に就けり。耶蘇彼等に曰ひけるは、我苦難を受くる前に爾曹と共に此晩餐を共にする事を大に願へりと。

惡魔は兼て耶蘇を賣さんとする事をイスカリオテのユダの心に發さしめたり。耶蘇之を知れり。

十二弟子の中に長たる者は誰なるかと互の爭ありき。是に於て耶蘇晩餐の席を起ちて上衣をぬぎ手巾を腰に束ひ、而して盤に水を入れ、弟子の足を濯ひその束ひたる手巾にて拭き初め、遂にペテロに及ぶ。ペテロ彼に曰ひけるは主よ爾わが足を濯ふか。耶蘇答へて曰ひけるは、我爲すことを爾今知ず、後之を知るべし。ペテロ彼に曰ひけるは爾斷て我足を濯ふべからず。耶蘇答へけるは、若しわれ爾を濯はずば爾は我と干渉なし。ペテロ彼に曰ひけるは、主よ止に我足のみならず、手と首とをも濯ひ給へ。耶蘇曰ひけるは、濯ひたる者は足の外濯ふに及ばず、然して全く潔し。彼等の足を濯ひし後その上衣を取り、また坐りて彼等に曰ひけるは、我爾曹に行し事を知るか、爾曹われを師と呼びまた主と呼ぶ。なんぢらの言ふところは宜し。われは誠に是なり。我は爾曹の師また主なるに、尙ほ爾曹の足を濯ふ。爾曹も亦互に足を濯ふべし。我爾曹に例を示せり。此は我爾曹に行し如く爾曹にも爲しめんが爲なり。耶蘇此事を言し後心に憂へ曰ひけるは、誠に實に爾曹に告げん。一人爾曹の中に我を賣す者あり。弟子達互に面を覩あはせ誰を指して言へるなる乎を疑ふ。耶蘇の愛する一人の弟子（約翰）耶蘇の懷に倚りてありしが、ペテロ此は誰を指して言へるなる乎を問はしめんと首をもて示せり。約翰耶蘇に曰ひけるは、主よ誰なるか、耶蘇低聲に答へけるは我一撮の食物に物を濡けて予ふる人は其なりとて遂に一撮の食物に物を濡けて、イスカリオテのユダに予ふ。耶蘇ユダに曰ひけるは爾が爲さんとする事は速かに爲せ。彼に何故に如

此いひしかを同に席に在る者どもの中知る者あらざりき。或人ユダは金嚢を職かれる故耶蘇彼をして節筵について用ふべき物を市しむるならんか亦は貧しき者に施さしむるならんと意へり。偖彼は一撮の食物を受けて直ちに出でたり。

ユダの出でし後耶蘇曰ひけるは、今我榮を受く。神又彼に因りて榮を受くるなり。小子よ我なほ片時爾曹と共にあり、爾曹我を尋ねん、我が行く所に爾曹は至る事能はず。前に之をユダヤ人にいふ、今又之を爾曹に告ぐ。われ新しき誡を爾曹に與ふ、即ち爾曹相愛すべしとの事是なり。我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし、爾曹若し相愛せば之に因て人々爾曹の我が弟子なるを知るべし。

耶蘇彼等に曰ひけるは、今夜爾曹皆我に就て礙かん、蓋は我牧者を擊ん其時綿羊散るべしと錄されたれば也。然れど我甦へりて後爾曹に先だちガリラヤに往かん。ペテロ耶蘇に曰ひけるは假令みな礙くとも我は然らず。耶蘇曰ひけるは、シモンよシモンよ惡魔爾を索めて麥の如く簸はんとす。然れども爾の信仰絶えざる樣爾の爲めに祈れり。爾歸らん時、其兄弟を堅うせよ。ペテロ曰ひけるは、主よ我獄にまでも死にまでも爾と共に往んと心を定めたり。主何處へ往き給ふか、耶蘇彼に答へけるは我往くところへは爾今從ふこと能はず、後我に從はん。ペテロ彼に曰ひけるは、主よ何故に今爾に從ふこと能はざる乎、我は爾の爲に我が命を捐てん。耶蘇彼に答へけるは爾命を我爲に捐つるや誠に實に爾に告げん今日この夜鷄二次鳴く前に爾三次われを識ずと言はん。彼また力言いひけるは我は爾と偕に死ぬるとも爾を知らずと曰はじ。弟子みな如此言へり。

耶蘇又彼等に曰ひけるは、我が財布旅袋履をも帶たせで爾曹を遣はしし時事の缺けたること有しや。答へけるは無かりき。耶蘇彼等に曰ひけるは、今は財布ある者は之を取れ、旅袋ある者も亦然り、此等を有たぬ者は衣服を賣りて刃を買ふべし。我爾曹に告げん彼は罪人の中に算へられて有りしと錄されたる此言は我に於て應げらるべし。蓋は我を指したる事は必ず成げらるべければ也。かれら曰ひ

けるは主見よ此に二の刃あり。耶蘇彼等に曰ひけるは足り。

彼等食する時、耶蘇パンをとり謝して擘き、彼等に與へて曰ひけるは此は爾曹の爲に與ふるわが身體なり。我を記えん爲に此を行せ、また食して後杯をとり曰ひけるは此杯は爾曹の爲に流す我血にして立つる所の新約なりと。茲に基督教の二大禮典の一たる聖餐の式は始められぬ。

次に耶蘇は弟子に慰めの言葉を與へぬ。爾曹心に憂ふること勿れ神を信じ亦我を信ずべし。わが父の家には第宅多し、然らずば我豫て爾曹に之を告ぐべきなり。我爾曹の爲に所を備へに往く、もし往きて我爾曹の爲に所を備へば又來りて爾曹を我に納くべし。我居る所に爾曹をも居らしめんとてなり。爾曹わが往く所を知り又其途を知る。トマス曰ひけるは主よ我儕爾の往く所を知らず如何にして其途を知らんや。耶蘇彼に曰ひけるは我は途なり眞なり生命なり人若し我に由らざれば父の所に往く事能はず、若し爾曹我を識らば我父をも識るべし。今より爾曹彼を識るなり。已に爾曹彼を見たり。ピリポ彼に曰ひけるは主よ我儕に父を示はし給へ然らば足り。耶蘇彼に曰ひけるはピリポ我かく久しく爾曹と偕に在しに未だ我を識らざる乎、我を見し者は父を見しなり。何ぞ父を我儕に示はせと言ふや。われ父にをり父の我に在ることを信せざる乎。誠に實に爾曹に告げん我を信ずる者は我爲す所の事を行ん。且つ此より大なる事を行べし蓋はわれ我父へ往けばなり。爾曹すべて我名に託りて求ふ所のことは我すべて之を行さん父の榮の子によりて顯れんが爲なり。若し爾曹我を愛するならば我が誡を守れ、我父に求めん父必ず別に慰むる者を爾曹に賜ひて窮なく爾曹と共に在らしむべし。此は即ち眞理の靈なり。世之を接くる事能はず。蓋はこれを見ず且知らざるに因る。されど爾曹は之を識るそは彼爾曹と偕に居り、かつ爾曹の衷に在ればなり。我爾曹を捨てて孤子とせず、再爾曹に來らん。暫くせば世我を見ることなし、然ど爾曹は我を見る。われ生くれば爾曹も生ん。その日に爾曹われ我父に在りなんぢら我に在りわれ爾

曹に在ることを知るべし、我誡を有ちて之を守る者は即ち我を愛するなり。我を愛する者は我父に愛せらる。我も亦それを愛して彼に自己を示はすべし。わが名によりて父の遣はさんとする訓慰師即ち聖靈は衆理を爾曹に教へ亦わが凡て爾曹に言ひしことを爾曹に憶起さしむべし。われ平安を爾曹に遺す、我與ふる所は世の與ふる所の如きに非ず。爾曹心に憂ふる勿れ又懼るる勿れ、我ゆきて復なんぢらに來らんと我曰ひし言を爾曹聞けり。若し我を愛せば父に往くと我いへる言を爾曹喜ぶべきなり。蓋は我が父は我より大いなれば也。事未だ成らず我先づ爾曹に告ぐ、事成らん時に爾曹之を信ずべき爲なり。此後我多の言を以て爾曹に語らじ蓋は此世の主來る故なり。彼我に與はる事なし。然れど我彼に殺るるは我の父を愛し且其命せし事に從ひて行ふことを世に知らしめんが爲なり。起てよ我儕此處を去るべし。

斯て彼等思出多き此樓房を出でて何處に行きしか。彼等は神殿指して大路に出でぬ。而して神殿の門上なる金の葡萄蔓(是ユダヤ國の記號なりき)を仰ぎつつ耶蘇曰ひけるは、我は眞の葡萄樹わが父は農夫なり。我に在りて凡て實を結ばざる枝は父之を剪除りすべて實を結ぶ枝は之を潔む。蓋はますます繁く實を結ばしめん爲なり。今爾曹我言ひし言によりて潔くなれり。爾曹我に居れ、さらば我亦爾曹に居らん、枝若し葡萄樹に連らざれば自ら實を結ぶこと能はず、爾曹も我に連らざれば亦た此の如くならん。我は葡萄樹爾曹は其枝なり。人若し我に居り我亦彼に居らば、多くの實を結ぶべし、蓋は若し爾曹我を離るる時は何事をも行能はざれば也。人若し我に居らざれば離れたる枝の如く外に棄てられて枯るるなり、人之を集め火に投入れて焚くべし。爾曹若し我に居り、又我言し言爾曹に居らば凡て欲ふ所求めに從つて與へらるべし。爾曹多くの實を結ばば我父之に由りて榮を受く、然れば爾曹我弟子なり。父の我を愛し給ふ如く我爾曹を愛す、爾曹わが愛に居れ、若爾曹我誡めを守らば我愛に居らん、我わが父の誡を守りて其愛に居るが如

し。我この事を爾曹に語るは我が喜び爾曹に在りて爾曹の喜びを盈しめんが爲なり。我が爾曹を愛する如く爾曹も亦互に愛すべし、是わが誡めなり。人その友の爲に己の命を捐つるは此より大なる愛は無し。凡て我なんぢらに命ずる所の事を行はば即ち我友なり、今より後われ爾曹を僕と稱ず、蓋は僕は其主の行すことを知ざればなり。我先に爾曹を友と呼べり。我爾曹に我父より聞し所の事を盡く告げしに緣る。爾曹我を選ばず、我爾曹を選べり。且つ爾曹をして往きて實を結ばせ其實を存しめんが爲また爾曹の凡て我名に託りて父に求ふ所の者を彼をして爾曹に賜はらせんが爲に我なんぢらを立てたり。爾曹互に愛せんが爲に我之を命ず、世若し爾曹を惡む時は爾曹よりも先に我を惡むと知れ。爾曹若し世の屬ならば世は己の屬を愛すべし。然れど爾曹は世の屬ならず、我なんぢらを世より選びたり、之に因りて世爾曹を惡む。僕は其主より大ならずと我爾曹に曰ひし言を心に記めよ、人若し我を窘迫ば爾曹をも窘迫もし我言を守らば爾曹の言をも守るべ

し。然れど彼等は我を遣はしし者を識ざるにより、わが名の故を以て此等の事を爾曹に加ふべし。我若し來りて語らざりしならば彼等罪無らん、然れど今は其罪言ひ開くべき樣なし。我を惡む者は亦わが父をも惡むなり。我若し他の人の行ざりし事を彼等の中に行はざりしならば彼等罪無らん、然れど我と我父とを已に見、かつ之を惡めり。此の如きは彼等の律法に故無くして我を惡めりと錄しし言に應はせん爲なり。われ訓慰師を父より遣らん。即ち父より出づる眞理の靈なり。其來る時我が爲に證をなすべし。爾曹も亦我と偕に始より在りしによりて證を作すべし。我此等の言を爾曹に語れるは爾曹の礙かざらん爲なり。衆人爾曹を會堂より黜くべし且凡て爾曹を殺す者自ら神に事ふると意ふ時至らん。此等の事を爾曹に行すは、父と我とを知らざるが故なり、我之を爾曹に語れるは時至りて我これを言ひし事を爾曹の憶出ん爲なり。我今我を遣はしし者に往かんとす。然れど爾曹の中我に何處へ往くと問ぬる者なく、却つて憂爾曹の心に盈てり。われ眞を

爾曹に告げん我が往くは爾曹の益なり。若往かずば訓慰師爾曹に來らじ。若往かば、彼を爾曹に遣らん。彼來らん時、罪に就き義きに就き、審判につき世をして罪ありと曉らしめん、罪に就てと云へるは我を信ぜざるに因りてなり義に就てと云へるは我我が父へ往くによりて爾曹また我を見ざれば也。審判に就てと云へるは斯世の主審判を受くればなり。我なほ爾曹に多く語るべき事あれども、今爾曹曉る事を得ず。然れど彼即ち眞理の靈の來らんとき爾曹を導きて凡の眞理を知らしむべし。蓋は彼己に由りて語るに非ず、其聞きし所の事を爾曹に言ひまた來らんとする事を爾曹に示すべければ也。彼わが榮を顯はさん、蓋はわが屬を受けて爾曹に示せばなり。凡て父の有ち給ふ者は我有なり、是故に彼我が屬を受けて爾曹に示すと曰へり。暫くせば爾曹われを見じ復しばらくして我を見るべし、是我父へ往くなり。

是に於て弟子の中にて我人互に曰ひけるは、暫せば爾曹我を見じ、復しばらくして我を見るべしと言ひ、且つ是我は父へ往くなりと我儕に言ひしは何の事ぞや。彼等また曰ひけるは此暫と言ひしは何の事ぞや其言へる所を我儕知らず。耶蘇彼等が問はんとするを知りて曰ひけるは、暫せば我を見じ、復暫して我を見るべしと言ひし此事に因りて爾曹互に詰ねあふ乎。誠に實に我爾曹に告げん。爾曹は哭き哀しみ世は喜ぶべし。爾曹憂ふるならん、然れど其憂は變りて喜びとなるべし。婦子を產んとする時は憂ふ。其期至るに因りて也。然れど已に生めば前の苦みを忘する。世に人の生れたる喜びによりてなり。此の如く爾曹も今憂ふ、然れど我又爾曹を見ん、其時爾曹の心喜ぶべし。其喜びを奪ふものあらじ。其日なんぢら我に問ふところ無かるべし。誠に實に爾曹に告げん、凡そ我名に託りて父に求むる所のもの父之を爾曹に授け給ふべし。爾曹今まで我が名に託りて求めたる事無し、求めよ然らば受けん、而して爾曹の喜び滿つべし。譬喩を以て此事を爾曹に語りしが、譬喩を用ひずして爾曹に語り、父に就て明かに示す時いたら

ん。其日爾曹我名に託りて求めん、我爾曹の爲に父に求ふと曰はず、蓋は父自ら爾曹を愛すれば也。これ爾曹われを愛し、且父より我來りし事を信ずるに因る。我父より出でて世に來れり。復世を離れて父に往かん。弟子彼に曰ひけるは爾いま明かに言ひて譬喩をいはず、我儕今爾の知らざる所なく且人の爾に問ふは用なきことを知る。之に因りて我儕神より爾の出で來りしことを信ず。耶蘇彼等に答へけるは、今爾曹信ずる乎。時まさに至らん、今至りぬ。爾曹散りて各人其屬する所に往き、ただ我を一人殘さん。然れど我一人居るに非ず、父我と偕に居るなり。われ此事を爾曹に語りしは爾曹をして我にありて平安を得させんが爲なり。爾曹世に在りては患難を受けん、然れど懼るる勿れ、我すでに世に勝り。

耶蘇此言を語り畢りて天を仰ぎ曰ひけるは、父よ時至りぬ。爾の子爾の榮を顯はさんが爲に爾の子の榮を顯はし給へ。これ爾われに賜ひし所の者に我永生を與へんが爲め凡の者を制る權威を我に賜ひたればなり。永生とは唯一人の眞神なる爾と其遣はしし耶蘇基督を知る是なり。我爾の榮を世に顯はし爾の我に委し所の行は我之を成り。父よ今我をして爾と共に榮を得させ給へ、即ち創世より先に爾と共に有ちし所の榮を得させ給へ。爾世より選びて我に賜ひし人々に我爾の名を顯はせり。彼等は爾の屬にして爾之を已に我に賜ふ彼等又爾の言葉を守れり。彼等今爾の我に賜ひし者は皆爾より出でしと知る。蓋は我爾が我に賜ひし言を彼等に與へたればなり。彼等之を受けまた我が爾より出でし事を誠に知りかつ爾の我を遣はしし事を信じたり。我彼らの爲に祈る我祈るは世の爲にあらず、爾の我に賜ひし者の爲なる耳、それ彼等は爾の屬なれば也。凡て我屬は爾のもの爾の屬は我屬なり。且つわれ彼等に由て榮を受く、我今より世に在らず、彼等は世に居り、我は爾に就る。聖き父よ爾の我に賜し者を爾の名に在らしめ之を守りて我儕の如く彼らをも一になし給へ、我彼らと偕に在し時、彼を爾の名に在らしめて之を守りたり。爾の我に賜ひし者を我守りしが、其中一人だに亡びたる

者なし、惟沈淪の子ほろびたり。是聖書に應はせん爲なり。我今爾に就る我世にありて此事を語れるは我喜びを彼等に充たしめん爲なり。我爾の道を彼等に授けたり。世は彼等を惡む、蓋はわが世の屬に非ざる如く彼等も世の屬に非ざれば也。われ爾に彼等を世より取給へと祈らず惟彼等を守りて惡きに陷らす勿れと祈る。爾の眞理を以て彼等を潔め給へ、爾の言は眞理なり。なんぢ我を世に遣はしし如く我も彼等を世に遣はせり。我彼らの爲に自を潔む、是れ眞理によりて彼等の聖められん爲なり。我ただ彼等の爲にのみ祈らず、彼等の敎によりて我を信ずる者の爲にも祈る也。此はみな一にならん爲なり。父よ爾我に居り、われまた爾に居る、かくの如く彼等も我儕に居りて、一にならん爲、且つ世をして爾の我を遣はし事を信せしめん爲なり。爾の我に賜ひし榮を我彼等に授けたり。此は我儕の一なるが如く彼等も互に一にならん爲なり。われ彼等に居り、爾我に居る。蓋は彼等をして一に全くならしめ、且つ世をして爾の我を遣はしし事又爾我を愛する如く彼等をも愛する事を知しめんとなり。父よ爾の我に賜ひし者の我が居る所に我と共に居りて我榮即ち爾が我に賜ひし者を見ん事を願ふ。そは世の基を置かざりし先に爾我を愛したれば也。義しき父よ世は爾を識らず我は爾を識る。彼等も爾の我を遣はしし事を知れり、我なんぢの名を彼等に示せり、復これを示さん、蓋は爾の我を愛するの愛かれらに居りまた我彼等に居らん爲なり。

耶蘇此事を言ひて後、神殿を去り弟子と共にエルサレムを東に出でケデロンの河を渉り、橄欖山の麓なるゲッセマネの園に入りぬ。かくて弟子等に曰ひけるは爾等此處に坐れ、我彼處に往きて祈らん。ペテロ及ヤコブ、ヨハネを携へ憂ひ哀みを催ほし、彼等に言ひけるは、我心いたく憂ひて死るばかりなり、こゝに待ちて我と偕に目を醒し居れ。少し進み往きて、ひれふし祈りけるは我父よ若しかなはば此杯を我より離ち給へ然れど我が心の從を成んとするに非ず聖旨に任せ給へ。而して弟子に來り、其寢ねたるを見てペテロに曰ひけるは、如此一時も我と

偖に目を醒しをると能はざる乎、惑に入らぬ樣目を醒し且つ祈れ、その靈には願ふなれど肉體弱きなり。二度ゆきて復祈りけるは我が父よ若しわれに此杯を飲さで離つこと能はずば聖旨に任せ給へ。來りて又彼等の寢ねたるを見る是彼等の目疲れたる也。彼等を離れて又ゆき第三次も同じ言をもて祈れり。遂に其弟子に來りて曰ひけるは今は寢ねて休め、時は近し我は罪人の手に付されん、起てよ我儕往くべし、我を賣す者近づきたり。時は既に夜半を過ぎ、日は金曜(十八日)に入れり。此時ユダ一隊の兵卒と下吏共を導き、祭司の長、殿司、及長老等と共に炬と提灯と兵器とを携へて此に來れり。耶蘇事の己に及ばんとするを悉く知り出でて彼等に曰ひけるは、誰を尋ぬるか。彼等答へけるはナザレの耶蘇なり。耶蘇彼等に曰ふ、我は其なりと。此時彼ら退きて地に仆れたり。耶蘇曰ひけるは若し我を尋ぬるならば此輩を容して去しめよ。時にペテロ劍を佩たりしが、之を拔きて祭司の長の僕の右の耳を削おとせり。耶蘇彼に曰ひけるは、爾の劍を故處に收めよ、凡て劍をとる者は劍にて亡ぶべし。我今十二軍餘の天使を我が父に請うて受くる事能はずと爾曹おもふ乎、若し然せば如此あるべき事を錄し聖書に如何で應はんや。耶蘇其耳に捫りて醫したり。かくて隊の兵卒及び其長とユダヤ人の下吏耶蘇を執へ縛りて牽行けり。ペテロ、ヨハネの外弟子皆耶蘇を離れて奔去りぬ。衆人耶蘇を祭司の長に携往きけるに、祭司の長長老及學者等悉く彼の所に集まれり。

是より徹宵の審問初まる也。ペテロ遠く離れて耶蘇に從ひ、祭司の長の庭の內まで入り、僕と共に坐して火に燠まり居れり。祭司の長及び議員皆耶蘇を殺さんとして證を求むれども得ず、多の人々耶蘇に妄の證を言ひ出せども其證あはず、或人々たちて妄の證を言ひ出しけるは、彼手を以て作りたる此聖殿を毀ち三日の間に手を以て作らざる別の殿を建てんと言ひしを我儕は聞けり、かく言ひしが其證また符ず。祭司の長中に立ちて耶蘇に問ひけるは、爾答ふる言無き乎、この人

人の爾に立つる證據は如何。耶蘇默然として何も答へざりければ祭司の長又彼に問うて曰ひけるは、爾は頌むべき者の子救主なる乎。耶蘇曰ひけるは、然り、我が大權の右に坐し、天の雲の中に現はれ來るを爾曹見るべし。是に於て祭司の長其の衣を裂きて曰ひけるは、我儕なんぞ復外に證據を求めんや、その褻瀆たる言は爾曹も聞ける所なり。爾曹如何に思ふや。彼等擧りて耶蘇を死に當るべき者と擬めたり。或者は彼に唾し又その面を掩ひ拳にて擊きいひけるは豫言せよ。亦僕等も手の掌にて彼を批てり。ペテロ下庭に居りしに、祭司の長のある婢來りて其火に燠まり居るを見、つくづく彼を視て曰ひけるは爾もナザレの耶蘇と共に在りし、ペテロ肯はずして曰ひけるは我之を知らず、亦なんぢが言ふところの事を識り得ざる也。斯くて庭門に出でければ鷄鳴きぬ。その婢彼を見て傍にたてる者に又いひけるは此人もかの黨の一人なり。ペテロ又肯がはず。少頃して傍に立てる者又ペテロに曰ひけるは、爾誠に彼黨の一人なり。蓋は爾はガリラヤの人なり、其方言之に合り。是に於てペテロ誓ひて我神の祟を受くるとも爾曹がいふその人を我は識ざる也と言ひしが、此時鷄二次鳴きければペテロ耶蘇の鷄二次鳴く前に三次我を識らずと曰んと言ひ給ひし事を憶ひ起し且これを思反して哭き悲めり。

平旦に及び直ちに祭司の長、長老學者達凡ての議員と共に議りて耶蘇を縛り、曳携れてユダヤ總督ピラトに解せり。（是に於て耶蘇を賣ししユダ彼の死に定められしを見て悔みその銀三十を祭司の長長老等に返して曰けるは、無辜の血を付して我は罪を犯しぬ彼等いひけるは我儕に於て何ぞ與からんや、爾自ら當るべし。ユダ其銀を殿に投げ棄てて其處を去りゆきて自ら縊れたり。祭司の長達この銀を取りて曰けるは此は血の價なれば賽錢の箱に入るべからずとて共に謀りこの銀を以て旅客を葬る爲に陶工の田を買へり）。午前六時頃より審問始まる總督ピラト彼に問ひけるは爾はユダヤ人の王なるか、耶蘇答へけるは爾が言へる如し。祭司の長多の事を以て彼を訟ふ。ピラト復耶蘇に問うて曰ひけるは、何も答へざるか、彼らが爾について證を立てしと幾何ぞや。ピラトの奇とするまでに耶蘇何をも答へざりき。偖此節筵には彼等が求に任せて一人の囚人を赦すの例なり。時にバラバと云へる

者あり、己と共に謀叛せし黨と同じく繫がれ居たりしが、彼等は其謀叛の時人を殺しし者等なり人々聲を揚げて呼はり恒例の如くせん事を求へり。ピラト彼等に答へて曰ひけるは、ユダヤ人の王を爾曹に我が釋さん事を欲むや。是ピラト祭司の長等の嫉に因りて耶蘇を解したりと知ればなり。祭司の長民共にバラバを釋さん事を求へと唆む。ピラト又答へて彼等に曰ひけるは然らばユダヤ人の王と爾曹が稱ふる者には何を我が爲さん事を爾曹欲むや。彼等また叫びて之を十字架に付けよといふ。ピラト彼等に曰ひけるは彼何の惡事をなししや、彼等益叫びて、之を十字架に付けよと曰ふ。ピラト民の懽を取らんとしてバラバを彼等に釋し耶蘇を鞭ちて之を十字架に付けん爲に付せり。兵卒等これを公廳に携れゆき、全營を呼集め、彼に紫の袍を衣せ、棘にて冕を編みて冠らしめたり。斯くて曰ひけるはユダヤ人の王安かれ又葦を以て其首を擊き、かつ唾し、跪づきて拜しぬ。嘲弄し畢りて後紫衣をはぎ、故の衣をきせて十字架に付けんとて曳往きしがシモンと云へるもの田舍より來りて其處を經過りければ强ひて之に耶蘇の十字架を負せたり。耶蘇をゴルゴタと云へる所に携來り、沒藥を酒に和せて飲せんと爲たりしに之を受けざりき。耶蘇を十字架につけし後、誰が何を取らんと鬮を括りてその衣服を分てり。午前九時に耶蘇を十字架につけ、其罪標にユダヤ人の王と書つく、二人の盜賊彼と共に一人は其右一人は其左に十字架につけらる。往來のもの耶蘇を詬り、首を搖りて曰ひけるは噫聖殿を毀ちて之を三日に建る者よ、自己を救ひて十字架を下よ。祭司の長學者等も同じく嘲弄して互に曰ひけるは人を救ひて自己を救ひ能はず。イスラエルの王救主は今十字架より下るべし。然らば我儕見て之を信せん、又共に十字架につけられたる者共も彼を詬れり。偖耶蘇の母と母の姉妹及びクロバの妻のマリア並びにマグダラのマリア其十字架の傍に立てり。耶蘇母と愛する所の弟子ヨハネと傍に立てるを見て母に曰ひけるは婦よ是爾の子なり。又弟子に曰ひけるは是爾の母なり。此時その弟子彼を己の家に携往

きたり。正午より三時に至るまで徧く地の上暗くなりぬ。三時に耶蘇大聲に呼はり、エリ、エリ、ラマサバクタニと曰ふ、之を譯せば、我が神わが神何ぞ我を遺てたまふやと云へるなり。傍に立ちたる者の中或人之を聞きて彼はエリヤを呼ぶなりと曰ふ。一人走り往きて海絨をとり醋を漬せ之を葦に束けて彼に飲しめ曰ひけるは俟てエリヤ來りて彼を救ふや否試むべし。耶蘇大なる聲を出して氣絶ゆ。殿の幔上より下まで裂て二と爲れり。耶蘇に對ひて立ちたる百夫の長かく呼はりて氣絶えたるを見て曰ひけるは誠に此人は神の子なり。是日は節筵の準備の日にて安息日の前の日なりければ、ユダヤ人長く屍を十字架の上に置くことを欲まざるが故にユダヤ人ピラトに對ひ、彼等の脛を折りて其屍を取除くことを求へり。是に於て兵卒共耶蘇と共に十字架につけられし者の一人の脛を先に折り次に亦一人の脛を折り、後に耶蘇に來りしに、已に死たるを見て其脛を折ざりき。一人の兵卒弓にて其脅を刺きければ直ちに血と水と流れ出でたり。茲に議員にて富人なるアリマタヤのヨセフと云へる者あり。前にユダヤ人を懼れて竊に耶蘇の弟子となれるが、熱心に神の國を慕へる者にてピラトに往き耶蘇の屍を乞ひ受けぬ。又曩に夜間耶蘇に就りしニコデモといふ人沒藥と蘆薈とを和せ凡そ百斤ばかり携へ來る。彼等布と香とにて耶蘇の屍を裹み未だ人を葬りし事なき石の鑿たる墓に置き石を墓の門に轉ばし置けり。マグダラのマリア及びヨセフの母なるマリア其屍を葬きし處を見たり。

翌土曜（十九日）は安息日なり。諸人皆靜に休息したりしが、祭司の長とパリサイの人等ピラトの所に集ひ來り曰ひけるは、主よ我儕憶出せり。彼の僞者いき居りしとき三日の後甦へらんと言ひし。是故に命じて三日に至るまで墓を固守しめよ。恐くは其弟子夜來りて之を竊み、死より甦へりたりと民に言ん、然らば後の惑は先よりも愈勝るべし。ピラト彼等に言ひけるは守る兵は爾曹にあり、往きて意のままに固守しめよ、是に於て彼等ゆきて石に封印し、守兵をして墓を固守めしめたり。

第十一章　復活及昇天

耶蘇の死は弟子等に取りては非常なる失望なりき、屈辱なりき。彼等は茫然爲すところを知らざりしなり。然るに安息日終りて翌日曜(二十日)喜ばしき出來事こそ起りけれ。此日黎明マグダラのマリア及び他のマリアその墓を觀んとて來りしに大なる地震ありて主の使者天より降り、墓の門より石を轉ばし其上に坐す。その容貌は閃電の如く其衣服は雪の如く白し。守兵かれを懼れ戰き、死たる者の如くなりぬ。天使こたへて婦に曰ひけるは爾曹懼るる勿れ、我爾曹が十字架に釘けられし耶蘇を尋ぬることを知る。彼は此に在ず其言へる如く甦へりたり。爾曹來りて主の置かれし處を見よ。且つゆきて其弟子に告よ。彼は死より甦へり爾曹に先だちてガリラヤに往けり。彼處に於て爾曹彼を見るべし。我之を爾曹に告ぐ。婦懼れながらも甚く喜びて急く墓を去り、其弟子に告げんとて走り往きけり。遂

にペテロ及びヨハネに趨り往きて曰ひけるは、墓より主を取し者あり。我儕何處に置きしや其處を知らず。ペテロとヨハネ出でて墓に往く。二人共に趨る。ヨハネはペテロより疾く趨りて先に墓に至りぬ。俯みて屍を裹みし布を置けるを見たれども入ず。ペテロ彼に後れて來り、墓に入り屍を裹し布を見たり。その首を裹し手巾は屍を裹し布と同に置かず、離して別の處に疊みて置けり。是に於て先に墓に來れるヨハネも入りて之を見たり。斯くて弟子は己の宿に歸れり。マリアは墓の外に立て哭きつつ墓にむかひて俯み、二人の天使白き衣を著、耶蘇の屍を置きたりし所の首の方に一人足の方に一人坐し居るを見たり。天使彼に曰ひけるは婦よ何ぞ哭くや。彼答へけるは、我主を取し者あり。何處に置きしかを知らざれば也。如此いひて反顧耶蘇の立ちしを見る、然れども耶蘇なることを知らず。耶蘇彼に曰ひけるは婦よ何ぞ哭くや誰を尋ぬるか。マリア園を守る人ならんと意ひ、彼に曰ひけるは君よ爾もし彼を轉移ししならば、何處に置きしか我に告げ

よ、我之を取るべし。耶蘇彼にマリアよといふ。婦かへりみて師よといへり。耶蘇彼に曰ひけるは、我に捫ること勿れ、我未だ我父に昇らざれば也。わが兄弟に往きていへ。我は我が父に昇ると。マグダラのマリア主を見しことと主の如此おのれに言ひ給へるといふ事とを弟子達に往きて告ぐ。此後耶蘇はペテロにも現れたり。

婦の墓を去りし後守兵のうち或者ども城に至り、凡て有りし事を祭司の長等に告げしかば、彼等と長老集まりて共に議り多くの銀子を兵卒に給へて曰ひけるは、爾曹曰へ我儕が寢ねたる時その弟子夜來りて彼を竊めりと。此事もし總督に聞こゆる共、我儕かれに勸めて爾曹に憂慮無からしめん、かれら銀子を取りて囑くめられたる如くしたりき。

當日午後二人の弟子エルサレムより三里ばかり隔たりたるエマオと云へる村に往きけるに、互に此等の所遇を語りあへり。語り論ずる時に耶蘇自ら近づきて偕に往けり。然れど彼等の目迷はされて知る事を得ざりき。耶蘇曰ひけるは爾曹行みつつ互に哀しみ語り合ふとは何ぞや。其一人のクレオパと云る者答へけるは、爾はエルサレムの旅人なるに獨り此頃有りし事を知らざる乎。答へけるは何事ぞや。之に曰ひけるはナザレの耶蘇の事なり、此人は神と萬民の前に於て行と言とに大なる能ある豫言者なりしが、祭司の長と有司等彼を死罪に解して十字架につけたり。我儕イスラエルを贖はん者は此人なりと望みたりし。又それのみならず、此等の事のありしより今日は第三日なるに、我儕の中なる或婦たち我儕を驚駭せり。彼等朝はやく墓に往き、その屍を見ずして來り、天使現れて彼は甦へれりと云へるに會へりと告ぐ。また我儕と偕に在し者も墓に往きたるに婦の言へる如くにて且彼を見ざりき。耶蘇曰ひけるは、豫言者の凡て言ひたる事を信ずる心の遲き愚なる者よ。基督は此等の難を受けて其榮光に入るべきにあらずや。斯くて耶蘇はモーセより凡の豫言者を始めすべての聖書に於ける彼に就ける事を詳か

に解明したり。彼等行く所の村に近づきけるに彼行き過ぎんとする狀をなせば、彼等勸め曰ひけるは、日昃きて暮に及びぬ。我儕と共に止れ。彼入りて止る。共に食に就ける時、パンをとり謝して擘き彼等に與へければ、二人の者の目瞭かになりて彼を識れり。又忽ち其目に見えず爲れり。彼等互に曰ひけるは途間にて我儕と語りかつ聖書を解開ける時、われらが心熱えしに非ずや。此時彼等起ちてエルサレムに歸り十一の弟子及び同なる人の集居るに遇ふ。その人等曰ひけるは主實に甦へりシモンに現れたり。二人の者も途間にて所遇とパンを擘きたまへるに因りて識りたる事を語れり。

此夜弟子等はユダヤ人を懼るるに因りて集れる所の門を閉ぢ置きしが耶蘇來りて其中に立ち彼等に曰ひけるは爾曹安かれ、彼等駭き懼れて見るところの者を靈ならんと意へり。耶蘇曰ひけるは、爾曹何ぞ駭くや、何ぞ心に疑ひ起るや、わが手わが足を見て我なるを知れ、我を摸でて見よ、靈は我があるを爾曹が見る如く肉と骨とは有らざる也。如此言ひて其手足を示せしに、彼等喜べども猶信せず、異しめる時に耶蘇茲に食物ありやと曰ひければ、炙りたる魚と蜜房とを與ふ。之を取りて其前に食せり。是に於て彼等信じて喜べり。耶蘇又彼等に曰ひけるは、父の我を遣はしし如く我も爾曹を遣はさん。爾曹誰の罪を赦すども其罪赦され、誰の罪を定むるとも其罪定められるべし。此時十二弟子の一人なるトマス彼等と偕に在らざりき。是故に他の弟子彼に曰ひけるは、我儕主を見たり。トマス彼等に曰ひけるは我もし其手に釘の跡を見、わが指を釘の迹に探し、わが手を其脅に探すに非ずば信せしと。

八日を越し後の日曜又弟子達室の内に在りしが、トマスも彼等と偕に居れり。門を閉ぢたるに耶蘇來りて其中に立ちて曰ひけるは爾曹安かれ。遂にトマスに曰ひけるは、爾の指を此に伸べて我手を見、爾の手を伸べて我が脅にさせ、信せざる勿れ信せよ。トマス答へて曰ひけるは我主よ我神よ。耶蘇彼に曰ひけるは爾わ

れを見しに因りて信ず、見ずして信ずる者は福なり。

此後耶蘇又ガリラヤの湖にて弟子等に己を現はせり。其現はせる事左の如し。

ペテロとトマス、及びバルトロマイとヤコブと約翰及び他の二人の弟子ともに在り。ペテロ彼等に曰ひけるは、我漁に往かん。彼らいひけるは、我儕も偕に往かん。彼等いでて舟に登しが、此夜は何の所獲も無かりき。已に夜の明けたるに、耶蘇岸に立てり。然れど弟子達、その耶蘇なる事を知らず。耶蘇彼等に曰ひけるは、小子等よ、食物あるや。彼等答へけるは無し。耶蘇彼等に曰ひけるは、網を舟の右に撒たば所獲あらん。遂に網をうつ、魚多きに因て曳擧ること能はず。是に於てヨハネ、ペテロに曰ひけるは、是れ主なり、ペテロ主なりと聞きて裸なりしが、衣をつけ帶して湖に投入りぬ。他の弟子等は小舟にて魚の入りたる網を曳て至れり。蓋は岸を距る事遠からず、五十間許なりければ也。岸に著きしに、炭火と其上に載たる魚及びパンあるを見たり。耶蘇彼等に曰ひけるは、今獲し所の魚を少し携來れ、ペテロ舟に行き、網を岸に曳來りしに其網の中に大なる魚百五十三尾いりたり。如此多かりけれど網は裂けざりき。耶蘇彼等に曰ひけるは來りて食せよ。弟子たち敢て彼に爾は誰なるかと問ぬる事をせず、此は主なりと知れば也。耶蘇來りてパンを取り彼等に與ふ魚をも亦その如くせり。偖彼ら食して後、耶蘇ペテロに曰ひけるは、シモンよ、爾は他の弟子に過りて我を愛するか。彼曰ひけるは、主よ然り、わが爾を愛することは爾知れり。耶蘇彼に曰ひけるは我羔を牧へ。又二次彼に曰ひけるは、シモンよ我を愛するか、彼曰ひけるは主よ然りわが爾を愛することは爾知れり。耶蘇彼に曰ひけるは我が羊を牧へ。三次彼に曰ひけるは、シモンよ我を愛するか。ペテロ三次我を愛するかと言はれしにより て憂ふ。斯て答へけるは、主知らざる所なし、我が爾を愛する事は爾知れり。耶蘇彼に曰ひけるは、我羊を牧へ。誠に實に爾に告げん、爾いとけなき時、自ら帶し、意に任せて遊行きぬ。老いては手を伸べて人爾を束り意に欲はざる所に曳至

らん。此く言へるは其如何なる死にて神を榮めんといふ事を示せるなり。此を言ひて後又彼に曰ひけるは、我に從へ。ペテロ反顧りヨハネを見て耶蘇に曰ひけるは、主よ斯人いかに。耶蘇彼に言ひけるは、我もし彼が存へて我が來るを待つを欲まば爾に何の與あらんや、爾は我に從へ。是に於て此言兄弟の中に傳はりて此弟子死ずと言へり。

耶蘇豫め約したるガリラヤの或山に於て十一の弟子に顯はれ彼等に語りいひけるは、天の中地の上の凡の權を我に賜はれり。是故に爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈との名に入れて弟子とし、且つわが凡て爾曹に命せし言を守れと彼等に教へよ。夫われは世の末まで常に爾曹と共に在るなりと。是れ基督教の二大禮典の一たるバプテスマの起原也。

耶蘇の死は弟子に取りて失望、落膽、沮喪なりし如く、耶蘇の復活は、歡喜、希望、勇氣なりき。而して聖書には力めて耶蘇の復活は靈の復活に非ずして、肉の復活なるを說けり。耶蘇復活せる最初の夜、エルサレムの或る家にて弟子に現はれたる時、弟子等は皆、靈ならんと欲ひしが、耶蘇は其身體上の創痕を示し、且つ食事を爲して其靈ならざるを證明したり。然り、若し耶蘇の復活は靈なりしならば墓中の身體は其儘にありたるべし。然るにペテロもヨハネも、又マリアも其墓の空しきを見たりしにあらずや。復活の肉なりし事明かなり。而も耶蘇の復活體はラザロの其の如く我等人間の現在有する肉體と同一なる者に非ざりし事も亦看過すべからざる所なり。今茲に左の三事を擧げん。

(一)變化したり。耶蘇の復活體に於て著しく我等の眼に止まる事は其驚くべく變化したる事なり。彼の今弟子等に現はるる姿はかのヘルモン山上に祈れる時ペテロ、ヤコブ、ヨハネに現はれたる變貌の姿と略同樣なりき。其變化の甚だしきや、かの耶蘇を極愛したるマリアさへ、墓邊に於て、耶蘇の傍に立てるを見て、それと知る能はず園丁と見紛ひたる程なり。固より涙に曇る彼女の眼は何物をも明辨

する能はざりしに相違なけれども、此事が決して其のみの故にあらざりしは、他にも同様なる出來事の頻出するより察すべし。即ちエマオに赴ける二人の弟子は、長き間耶蘇と共に歩みながら、之を知る能はず、耶蘇を全く他人と見做り。ガリラヤ潮畔に耶蘇の現はれし時も弟子は其耶蘇なる事を直ちに知る能はざりき。いづれの場合にも耶蘇は其耶蘇なるを自ら現はして始めて弟子之を知れるなり。マリアには昔の語調にて其名を呼びかけて之を示し、エマオにては、パンを祝し裂きて之を示し、エルサレムにては創痕を示し、ガリラヤ湖畔にては二年前の奇蹟を繰返して之を示したる程なり。

(二)物理的法則に従はず。又耶蘇の復活體は普通の事物を支配する物理的法則に従はざりしなり。其體は如何なる物體にも遮らるる事無く所謂神通無碍なりしなり。耶蘇が復活して弟子等の集會の眞中に立ちたる時は、門は堅く閉ぢられたるに拘らず、誰も之を訪るるを聞きし者もなく、又之を開けし者も有ざりしなり。

即ち耶蘇は入る隙も無きところにも入り得る體なりしなり。實に耶蘇の體には空間といふものは無意味なりしなり。

(三)肉眼に見えざるを得。エマオの村に於ても、彼は弟子の心の眼を開きて、其耶蘇なるを認めしむるや、忽ちかきけす如く消え失せたり。即ち彼等二人の弟子の心の眼を蔽へる帳は暫かかげられ、又忽ち下されたるなり。エマオの村の旅亭に於て二人が耶蘇と語り居る時にも、旅亭の下婢は或は耶蘇を見ざりつらん。

夫斯の如し、されば耶蘇が生前我が名に於て二三人の集る處には我も其中にありと云ひ、又復活後ガリラヤの山上に於て我は世の終まで常に爾曹と共にあるなりと曰ひし言は文字通に解せらるべきなり。彼は復活の後橄欖山上より昇天せりと雖も、是は單に其比較的頻繁なる顯現を廢するを示す一時期を劃する表象に過ぎずして、耶蘇が今も尙ほ我等と共に在るは爭ふべからざる事實なり。

耶蘇は苦難を受けし後、多くの確なる證を以て己の活ける事を現はし、四十日

の間彼等に見え、神の國の事を語り、偖昇天の時至りたれば、耶蘇またエルサレムに於て弟子等の集れる處に現はれ、彼等に曰ひけるは、モーセの律法、豫言者の書、また詩の篇に錄されたる我事につく凡の言の必ず應ぐべきは我もと爾と共にありし時語れるところなり。かくて耶蘇聖書を悟らせんとて其聰を啓き曰ひけるは、已に斯く錄されたり。如此基督は苦難を受け第三日に死より甦へるべし。又其名に託りて悔改と赦罪とはエルサレムより始り、萬國の民に宣傳へられん。爾曹は是等の證人なり。爾曹エルサレムを離れずして我に聞けるところの父の約束し給ひし事を待つべし。蓋はヨハネは水を以てバプテスマを施したれども、爾曹は久しからずして聖靈によりバプテスマを受くべければ也。聖靈爾曹に臨むによりて後爾曹能力を受け、エルサレム、ユダヤ全國、サマリヤ、及び地の極にまで我が證人となるべし。此事を言ひし後、耶蘇彼等を導きベタニヤに至り、手を擧げて彼等を祝す。祝する時、彼等の見るが中に擧げらる。雲之を接けて見えざらしめたり。耶蘇の昇れる時彼等天を仰ふぎ視たりしに、白衣を着たる二人の人ありて傍に立ち、曰ひけるは、ガリラヤ人よ、何故に天を仰ぎて立てるや、爾曹を離れて天に擧げられし此耶蘇は爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く亦來らんと。

耶蘇基督は斯くて天に擧げられ彼が地上に於ける三十三年の生涯は閉ぢられぬ。而も我等は彼の現在を信ずる者なり。心眼を開けば隨時隨處耶蘇を見る。而して尙ほ耶蘇の我等に告げたる父と子とより出づる聖靈は亦常に我等に啓廸輔導を與ふるを信ずるなり。此外尙ほ父の保護あり。此三者一體にして三方面の惠を我等に與ふ。子に赦され、聖靈に潔められ、父に助けらる。基督者の生涯は幸福なるかな。

耶蘇の現在は前に言へり。而して此處に耶蘇の再臨を說くは何ぞや。耶蘇の屢豫言せる如く此世には終末あるなり。人々皆其行ひによりて審判せらるるの

時なり。此時は生きたるも死たるも甦へされ、皆基督の臺前に立ちて生前の行に從つて審判せらるるなり。其時耶蘇は神の子たる榮光の姿にて再び此世に臨みたまふなり。而して其時は天國の此世に成る時にして、善き者は天國に於て日の如く輝き、惡き者は地獄に於て永久の形罰を受く。永生は天國に入る者の繼ぐところなり。我ら天國を此世に建設すべく努力しつつ、耶蘇の再び臨るを待たんかな。耶蘇よ來り給へアメン。

第十二章　年　譜

以上にて耶蘇傳の概略を叙し終りたるが、今左に此書の取りし見解に基き、耶蘇の生涯の出來事の時間的順序、又其起れる場所等を表記し、又四福音調和の上の主なる典據を示さん。

紀元前第五年の夏　聖誕。(是れデビッド・スミスに據れり)
同　四年二月　埃及に避難。
同　同　三月末　(若しくは四月初)ヘロデ王死。
同　同　四月　ナザレに歸る。
紀元後　九年春　耶蘇エルサレムに上る。
同　二十五年夏　ヨハネ傳道を開始す。(是れデビッド・スミスに據れり)
同　二十六年一月　耶蘇のバプテスマ。

紀元後　廿六年一月—二月耶蘇の誘惑。
同　二月　耶蘇最初の弟子を取る。其時は午前十時（此時間はデビッド・スミスに據れり）
同　カナの婚禮。
同　三月　カペナウム假居。
同　四月　逾越に上る。
同　第一回の神殿潔め、ニコデモとの談話。
同　四月—五月　ユダヤにてバプテスマを施す。
同　五月　サマリヤ旅行。（是れエデルシャイムに據る）
同　大臣の子を愈す。
同　此後弟子開放せらる。（是エデルシャイムに據る）
二十七年三月　耶蘇プリムの節筵に上京、ベテスダ池畔に人を愈す。
同　ヨハネ捕はる。
同　ナザレに赴く。
同　第一期ガリラヤ傳道。
同　耶蘇四人の弟子を召す。（是路加傳の順序による）
同　第二期ガリラヤ傳道。（此時癲病愈さる）
同　癩瘋を愈す。
同　マタイを召す。
同　四月　逾越後の安息日耶蘇の弟子麥の穗を摘食ふ。
同　手枯えたる人を愈す。
同　五月　使徒選任と山上の説教。
同　百夫長の僕を愈す。
同　ナインの若者甦生。

紀元後　二十七年七月　約翰の使者來る。
同　八月　シモンの饗宴、惡行女の注膏。
同　秋　第三期ガリラヤ傳道、婦人多く奉仕す。
同　譬喩談。
同　ガリラヤ湖上の風波。
同　湖東の治癒及拒斥。
同　年末　ヤイロの娘甦生。
二十八年一月　第二回ナザレ訪問、第四期ガリラヤ傳道。
同　三月　ヨハネ斬首せらる。
同　十二使徒の派遣。
同　四月　五千人を養ふ。
同　耶蘇波の上を歩む。
同　カペナウムの生命のパンの說教。
同　五月—九月　ツロ、シドン、デカポリス、ダルマヌタ（マガダン）ベテサイダ、カイザリヤ・ピリピ、ヘルモン、カペナウム、ガリラヤ地方旅行。
同　十月　構廬節に上京、途次ヨハネ等火を呼ばんとして叱責せらる。十人の癩病潔まる。（是、ゲイキイ傳による）
同　十月—十二月　ペレアに於ける七十人傳道。
同　十二月　耶蘇ベタニヤにマリア姉妹の歡待を受く。
同　修殿節に上京。
同　十二月—一月　ペレア傳道。
二十九年二月　ラザロ甦生。
同　エフライムに退く。
同　三月末　ペレアに立寄りエリコを經て上京。

紀元後　二十九年三月末　エリコに入る前旨目を愈す。
同　同　エリコにてザアカイ改心。
同　同　四月半ば日曜ベタニヤに著く其夜同所に饗宴（以下受難週の順序は大體デビッド・スミスによる）
同　同月曜　救主として入京。
同　同　同火曜　第二回神殿潔め、子供の讃美。
同　同水曜　最終の談論。
同　同木曜　最後の晩餐。
同　同金曜　午前一時過捕縛午前九時十字架につき、午後三時絶命。
同　同土曜　祭司バリサイ人墓に守兵を置く。
同　同日曜　朝復活マリアに現はる。（四月二十日）
同同（　午後ペテロ及クレオパ等に現はる、夜其他の弟子に現はる。
同　同　第四日曜トマスに體を示さる。
同　同　其後ガリラヤ湖畔に現はる。
同　同　ガリラヤ山上に現はる。
同　同　五月三十日頃耶蘇エルサレムにて現はれ、橄欖山上より昇天す。

耶蘇基督　終

大正五年十月廿五日印刷
大正五年十月廿八日發行

定價金二拾錢

著者　大井一郎
東京市京橋區明石町八番地
基督教興文協會代表者
エス・エッチ・ウェンライト

發行者　横濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

印刷者　東京市京橋區銀座四丁目一番地
福音印刷合資會社東京支店

印刷所

發行所　東京市京橋區明石町八番地　日本基督教興文協會

發賣所　丸善書店・警醒社・教文館・福音書店・基督教書類會社
岩波書店

不許複製

36

325
459